



東方三界黃龍伝

龍王編

文・絵

小龍

表紙絵

sho_ko

目次

序章

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	序章
相剋 フィールド、 解除	幕開け	飛龍の勘	歌を忘れた龍	水雲宮前の攻防	空っぽの部屋	龍族との因縁	異変	深夜の会談	奏欽と瑠伊	焼け焦げの紙片	生誕祭にて	
134	123	115	106	92	85	78	68	54	46	36	24	6
25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
相撃ち	本当の敵	突入開始	近衛隊長の末路	九玄の心得	三者三様	脱走	依頼	戦闘準備	最大の因縁	見えない敵	欽チャンとジローさん	混乱
270	262	253	241	233	223	212	203	193	183	169	158	145

29	28	27	26
10分	痛恨のミス	デザート・イーグルの実弾	飽和

310	298	289	281
-----	-----	-----	-----

あとがき	32	31	30
	Like a Flower (終)	戦場の恋人達	射程内

350	341	332	321
-----	-----	-----	-----

主な登場人物

沙龍^{シャロン}（甲斐馨）……主人公。そろそろ天界生活も板についてきたところ。

木佐小次郎（真武君）……沙龍の親友。四方将神の一人。

九雷……天界軍元帥。沙龍の恋人。

陽輝……天界西方軍大将。九雷の親友。

奏欽^{そうきん}……南海龍王。管弦府の長官も勤める美女。

敖坤^{ごうこん}……東海龍王。東方軍大将も兼任している。

敖閏……西海龍王。

九天玄女……崑崙防衛軍隊長。沙龍の良き協力者。

公務員……泰山府の職員だが、沙龍と個人的に雇用関係を結んでいる。

序章 この世で愛でるべき二つのもの

BC 1201——。

「イイ香りだな……。なんの花だ？」

「さあ？」

酔っ払い二人が風情のないことを言うので、思わず口を挟んだ。

「全く、もの知らず共が。これは、桂花けいか（金木犀）だろ？」

「フーン？」

緑麗りよくれいは、花の名などほとんど知らない。

世の中には酒さえあればいい、という女だ。

今の会話だって、花の名を聞いてきたのは九雷くらいのほうだ。

コイツは政敵を嘲いながら蹴落とすような男だつてのに、変な所が繊細で、この前も軍本部の中庭が殺風景だとか言つて、金盞花きんせんかを一面に植えさせていた。

「ふわあ……、退屈だぜ」

「陽輝ようき、風邪ひくぞ」

緑麗がかけてくれた上着を引き寄せて、ほろ酔いのいい夢見心地に陥った。

俺が手放した杯に残っていた酒を、待ってましたとばかりに小龍が飲み干す。

「コラ、小龍シヤオロン。酒の味を覚えるのはまだ早い」

「ウキユ」

そんな風景は、もう、大昔のことだ――。

* * *

A D 1025――。

俺は、相変わらず退屈していた。

平和な治世が続く天界で、変わり映えのしない日常を送っていると、たまには刺激も欲しくなるもんだが、その刺激を得るために行動を起こすのが少々面倒

だった。

若い頃はさんざん遊んできた俺も、いささか遊び尽くした感があつて、最近じゃなにに対しても熱くなれない。

女を抱くのすら面倒臭くなつてきた始末だ。

この前、近所のガキに初めてオッサン呼ばわりされ、愕然としたのも束の間、そう呼ばれてもおかしくないよな、と思いなおした。

美味しい酒が飲めなくなつて、久しい。

九雷は表面上はなにも変わつちやいないが、屈折ぶりにますます磨きがかかつて、最近^{てんま}はあまり歓迎したくない噂ばかり聞こえてきやがる。

天真^{てんま}は肝臓を壊したとかで、あまり酒に付き合つてくれなくなつた。ただ、ひたすら退屈だ、と。

それをどうこうする気も起きないほどに退屈だ、と。

俺が奏^{そう}欽^{きん}に出逢つたのは、そんな退屈を極めている頃のことだった。

その日、俺が仕切っている西方軍の演習場に場違いな女が現れた。第一印象は悪かったぜ。

身なりからしていかにもイトコのお嬢ちゃんって感じで、スラム出身の俺なんかが目にしたことのないような、金ぴかの髪飾りをつけ、扇以外持ったことのないような、白く細い指をしていた。

恋しい男に微笑む姿はさぞかし花のようだろう、と思ったもんさ。だが、その女は間違いなく怒っていた。

「ああ？　なんだって？」

巷じゃ『愚連隊』などと陰口叩かれてる西方軍の演習場にたった一人で乗り込んできたってのに、女は物ともせず抱えていた書類をめくっていく。

龍族か、というのはすぐに分かった。

その流れるような手の動きが如実にそれを物語っている。

俺の背後では部下達がソワソワしていた。全く、若い女と見たらこれだ。

「本日の練兵場使用許可証の提出がないようですが？」

「なんだって自分んとこの敷地で軍事演習すんのに、許可が要るんだよ」



くわえた煙草のまままで話す俺に、副官の一人がなにか言いたげな表情をしてるが無視した。

「ええ、普段は簡略されているようですが、宮中行事が催される際にはあらゆる軍事行動の事前申請が義務づけられているはずです」

「そうだったか？」

「全ての予定を中止せよ、とは申しません。ただ、ここで大砲を撃つのはやめて頂きたいのです。本日は年始の歌会が行われるのですから、遠慮なさるのが軍大将の努めでありましょう」

「そんなの俺の知ったこっちゃねえよ。そもそも、アンタ、ナニモン？」

「私の名は奏欽。管弦府の長官を務めております」

「へエ、アンタが？」

「そういや、最近、最年少で長官に抜擢されたのが居たな、と思い出した。」

「ガキの使いか、どこぞのお大尽の妾かと思っただぜ」

それまで、淑女然として振舞っていたその女がいい加減切れたらしい。

柳眉が逆立つつてのはまさにこれか、と思っただ。

「西方軍の大將は野獣のような無法者だという噂も嘘ではないようですね……」
「そりゃ、俺にとつちや賛辞だぜ？」

嘲笑するように言うと、女は持っていた書類を地面に投げ捨てた。

怒ってそうしたというより、俺にはその行動が臨戦体勢を取るためだと分かった。

その緊張感を察したのか、それまで俺の肩の上で寛いでいた小龍が逃げるように空へと舞い上がる。

「陽輝大將、即刻この演習の中止を要請します！ 罷免されたいんですか!？」

「お遊戯会のせいで演習が中断されたとあつちや、西方軍の名折れだぜ。悪いが帰ってくれ。ここはアンタみてえなお嬢ちゃんの来るような場所じゃない。上に密告りたきや好きにしるよ」

「この喧しい音が止むまでは帰る訳にはいきません！」

「言っても分からないなら力づくってのが、俺達のやり方でね」

脅しのつもりで言ったが、女は怯むどころかますます喰って掛かってきた。

「軍人はすぐそれですね。馬鹿のひとつ覚えもいいところ」

「だったら、アンタにや俺にコレを止めさせるどんな方法があるって言うんだい？ 他の四方軍がどうだか知らないがな、俺がシマ張ってる限り、ここじゃお上品な討論は通用しないぜ？」

怪しい雲行きに、副官が俺達の間割って入ってきた。

「大将！ なにもそんな喧嘩腰で。奏欽様もウチの大将を煽らないで頂きたい！」

この後、管弦府のスタッフがぞろぞろと現れ、更にウチの野郎共もいきり立って、一触即発な事態になったが、騒ぎを聞きつけてやって来た西海龍王がその場を勝手に諫めやがった。

あの冗談口調で片付けた手際は、相変わらず見事だったが、久々に面白え事態になったってのに、なんだか拍子抜けした気分だった。

後から聞いた話で、この時の女が南海龍王の末娘だったことを知った。

あの高慢ちきな態度はそれ故か、とも思ったが、この『喧嘩』の後始末に親父

を引つ張り出してこないところはちよつと感心した。

俺は龍族には一方的にちよつとした借りがある。

と言つても、それは北海龍王家限定だ。

伸ばし伸ばしにしていたが、『これ』はもしかしたらチャンスかもしれないねえ、と、奏欽にはことある毎に突つかかってみた。

尤も、そんなチャチな復讐劇に本気であるのお嬢ちゃんを巻き込むつもりはなかった。

アイツがいつも思った通りの反応をするもんで、からかうのが面白くなって、つい深入りしちまったってだけの話だ。

「女など、美しくても醜くても見世物にされるだけです。男が見ているのはその外側ですから」

いつだったか、からかいついでに口説いたら、利いた風なことを言ってきた。

どう見たってまだ男も知らねえようなお嬢ちゃんなんだがな……。

「それは『内側』も知って欲しいっていう、遠まわしなお誘いか？」

「別に、貴方になんか……！ ……!？」

すぐ別の意味にも気付いたらしい。

嫌悪感を顕わに、そして少々赤い顔をして、俺を罵倒する。

「最低のケダモノですね！ なぜ貴方のように品位の欠片もないような人が大将になれたんです!？」

「ああ、よく言われる」

この頃の奏欽はまだ若かった。

俺の一挙一動に振り回されながら、いつも、一生懸命、思いつく限りの反撃をしてきた。

「世の中には男女しか居ないからお互いに執着するんです。もつと色々いれば、集中力も分散されるというのに」

「だが、それもいいんじゃないやねえか？」

「なにが……。それより、いい加減、その手を離して下さい」

そうは言っても、こんな甘い香りを漂わせてるんじゃないや、離すどころか手は自然に腰に伸びてしまう。

檀香や沈香を焚いてる女はよく居るが、“これ”はそのどちらでもないな。

「そりや、物事にはイイトコも悪いトコもあるさ。どっちかひとつつてのは、ナシだ。だから、アンタが言うように、例え男と女以外に種類があつたとしても、今度は、他の悪い問題も出てくるってワケだ」

「貴方と議論するつもりはありません！」

「話すつもりもなくて、振りほどくつもりもないんだらう？ だったら……」
初めて奏欽にキスした時のことはやけに鮮明に覚えてる。

平手討ち喰らうくらいは覚悟の上だったんだが、この時ばかりは予想が外れた。

なにせ、大粒の涙こぼしながら真っ赤になつて抗議してきたからな。

だが、この時の奏欽の可愛いことといったらなかつたぜ。

「馬鹿馬鹿ツ、いきなりこんな……、こんなやつて！ なに考えて……！」

まあ、そりや（恐らく）初めてのキスが、薄汚い路地裏のビールケースを背につつても幻滅だろうし、初心者にはきついのをかました俺も悪いが、だからといって、どこぞの草原の白いベンチを選んでたらこういう女は落せない。

「意地張つてないで認めちまえよ。お前は、俺が好きなんだろ？」

「そのまるつきり根拠のない自信は一体どこからくるんです！」

沸騰しそうな顔で、腰が半分抜けてることに気付いてないんじゃないか、コイツ。

「お姫様ってのは、結構、優男より不良が好きなものだろ？」

「知りません、そんなの！」

それから、晴れて仇討ちを果たした俺は、もう龍族の内情を探る必要もなくなり、奏欽の前から消えようとしたが、それにしても未練が大きすぎた。

他にいい女はたくさん居るつのに、なんだってあんなお堅いお嬢ちゃんが気になるのか、自分でも分からなかったが。

「じゃあ、結婚するか？」

そんないい加減なセリフで半ば強引に、しかも成り行きで結婚しちゃった。

この時、なんで奏欽が承諾したのか未だによく分からない。

恐らく本人も半分自棄だったんじゃないかねえか、と思ってるんだが。

ホラ、よくあるだろ。

ああいう伝統とか格式高い一族にありがちな、一回貫通しちまったら他の男んところには嫁にいけない、みたいな。

そうして、何度か季節が巡り、周囲の大方の予想に反して、奏欽が南海龍王の座を継ぐことになった。

末子の、しかも女である奏欽が龍王になるのは異例中の異例だが、先代は最初からそのつもりだったらしい。

まあ、親父さんの目は確かだったと思うぜ。

奏欽の五行術は、北や東のシヨボイ龍王なんかよりはるかに上を行くはずだからな。

尤も、その非凡さが奏欽の不幸だったのかもしれないが。

とかく、龍王ってのは面倒な官位だ。

当人が望めば政治的な発言力も發揮できるし、独自の軍事力すら持っている。

世間的に見れば誉れかもしれないが、これからはなにをするにも人目を引いて、奏欽も堅苦しい生活を余儀なくされるだろう。

その龍王公主の亭主がこんなゴロツキじゃ、アイツにとっていいことなんてひとつもない。

そう思ったのは確かだ。

だからといって、別に身を引いたってわけじゃない。

これから起こるであろうキナ臭い展開に、アイツを巻き込みたくなかったってだけの話だ。

そう、そろそろタイムリミットだった。

緑麗は必ず戻ってくる。そして、俺達はあの無意味な神獣の闘いに今度こそケリをつけなきやならねえ。

ただ、ひとつ心残りなのは、俺にはあのお嬢ちゃんのふくれっ面を花のように綺麗な笑顔にさせることはできなかったってことだ。

仔犬のようにキャンキャン嘯み付いてくる奏欽も可愛かったが、アイツはきつと笑ったほうがいい。

「この世で愛でるべきモノは三つしかない。なあ、奏、お前にや、それがなにか分かるか？」

「愛でるべきモノ……?」

「酒と、友と、女さ。それさえ分かっつてりや、人生、結構楽しいぜ? お前も、いつもそんなしかめっ面してねえで、人生楽しめよ」

最後に、俺が奏欽に言ったセリフだ。

それ以来、いつも桂花の香りを纏っていたあのお嬢ちゃんには逢っていない。

* * *

A D 20XX、現代——。

どこからか、花の香りがする。

甘くて強い、一度嗅いだら忘れられないような香りだ。

強いのに、どこか控えめで、あのお嬢ちゃんにはお似合いだ、と思ったっけ。

「……、陽……?」

女の声だ。

俺を呼んでるのか？

「陽輝……、……」

その香りの中で俺を呼ぶのは、一人しか居ない。

沙龍は酒瓶を抱えて床の上で寝ていた朋友を揺り起こした。

「陽輝、……陽輝ってば！」

風邪をひきそうだと思つて声をかけたのだが、目を覚まそうとしない。

「いや、起きなくていいから、せめてベッドで寝てよ」

「ん……」

その時、思わぬ事態に陥つて、沙龍は「え？」という顔をした。

陽輝は寝惚けているのか、沙龍を抱き寄せて、いきなり唇が触れそうになる。

しかし、その時、

ボキッ

という鈍い音がした。

咄嗟のことで手加減しなかったので、これが生身の人間だったら、肋骨の二、三本は折れていただろう。

「……目、覚めたか？」

そう言い放つ沙龍は、自分の拳のほうが痛い思いをしたんじゃないだろうかと
思ったものだ。

「沙龍……、優しく抱き起こせとは言わないが、鉄拳で起こすなよ」

壁にめり込んだ陽輝は、ここが水雲宮すいいうんききゆうで、昨夜は明け方まで九雷と呑んで
たということを出す。

「今、誰と間違えた」

「ふわあゝあ。……ン？ この前、飲み屋で会った、姉ちゃんじゃねえか？」

陽輝はそのそとベッドに這い上がる。惰眠の続きをしようという魂胆らし
い。

「今日、非番なの？ 元帥はどこよ」

「ああ、九雷なら仕事行ったんじゃないやねえ……？ 俺は自主的に非番だ。夕方まで

起こしてくれるな」

「あいよ……」

行きかけた沙龍に、片目を薄く開けた陽輝が言った。

「桂花の香りがする……。近所にあつたか？」

「ケイカ？ なんじゃそら」

水雲宮の侍女が、昨夜、その客間で香を焚いていたのを、二人は知らない。
「お前に聞いた俺が間違ってたよ……。おやすみ」

1 生誕祭にて

かうんきゆう
火雲宮——。

その本殿に続く廊下を、中背瘦身の女性が足早に歩いていった。
なのに足音ひとつ立てていないのは、彼女が龍族だからである。

総じて龍族の者というのは立ち居振舞いが優美で、流れるような所作を持っているが、彼女の場合はそれが顕著だった。

そして、衣装の華やかさもさることながら、なによりも顔立ちが人目を引く。
誰もが振り返るほどの美女なのだ。

群青色の大きな瞳も、流れるような黒髪も、ここまで人目を惹くほど鮮やかな者はそう居ない。

「まあ、欽姫よ」

「相変わらずお美しい。……なのに、こういう時でないと拝めないのは残念だな」

そんな、侍女や官吏達の囁きも、そこかしこで聞こえてくる。

奏欽はそんな立ち話など聞こえないふりをして、追従する部下になにやら指示を与えていた。

普段、滅多に人前に姿を現さない奏欽が火雲宮の本殿などという一番華やかな場に居るのは、今日が秦帝しんていの生誕祭だからである。

管弦府の長としてこれに欠席するわけにはいかない。

宴の席での生演奏は言うに及ばず、館内放送から周囲の雑音規制まで、全ての音響の仕事を一手に引き受けているので、管弦府のスタッフ達も今日は大忙しだった。

奏欽に付き従っているのは溜伊るいという青年で、奏欽の幼馴染みでもある。

もともとは南海龍王家で下働きをしている家の子供だったのだが、奏欽とは歳が近かったせいもあり、一緒に楽器の練習しているうちに同じ道に進むことになったのだ。

同年代の友達が居ない奏欽にしてみれば、唯一気心の知れた幼馴染みといえた。

「欽姫、忙しいのは分かりますが、陛下のお祝いの席なので……」

小声で嗜める瑠伊は、愛想笑いのひとつでもしろ、と言っているのだが、奏欽は口元を緩めることはない。

「私は祝辞を述べに来たわけじゃなくて、仕事してるのよ」

奏欽はさつきから見ているスケジュール表から目を離さず言ったが、さすがにさきほど泰山府君たいざんぷくくんに声を掛けられた時は、素っ気無く応対し過ぎたと自覚していた。

「失礼、仕事がありますから——」

そんな短い言葉で、世間話のひとつでもしようと思ってきた最高神を追い返すなど、普通の長官では許されないだろう。

かろうじて奏欽が南海龍王だから許されるようなものだ。

天帝陛下に直に謁見して祝辞を述べるのが許されている者というのは、限られている。

しかも、午前中に拝謁に来る連中というのは、つまり、帝都でもVIP中のVIPだ。

泰山府君はそうそうに退出したが、次々に拝謁を済ませた要人達が階段から降りてくる。

奏欽はその要人達に対して、足を止めてわざわざ挨拶をすることはなかったが、昼前という時間になって降りてきた背の高い男に対しては初めて足を止めた。別に向こうのほうが地位が高いから、というわけではない。

一般的な認識からすれば、天界軍元帥よりも龍王のほうが位は上だ。

ただ、先日のこともあったし、奏欽はこの男が嫌いではないのだ。

性格が悪いと評判で、無愛想具合は奏欽と負けず劣らないこの男が、である。

奏欽が挨拶しようと近寄ると、男のほうから声を掛けてきた。

「これは、奏欽殿。お珍しい」

先日会ったばかりなのに、わざとそう言う九雷の意図を、奏欽はちゃんと理解していた。

「たまに出てくると、皆、口を揃えてそう言いますね。そういうマニユアルでもあるんですか？」

「これは手厳しい」

独特の抑揚で言う九雷は、傍らに人形のような少女を伴っていた。

人形のように可憐で美しい、という意味ではない。

その少女は、なにかに抑制されているように動きがぎこちなく、九雷に追従するよう立ち止まってからはピタリと動かないのだ。

それが三重、四重になった桂の上に、更に重ねられた表衣のせいなのだろう、ということとは奏欽には分かった。

確かにこの女性用の宮中における正装は着慣れていないと動きがぎこちなくなるし、総重量十キロに耐えられる女性もなかなか居ない。

だから、華奢な女性にはいくつかこの正装を軽くするための裏技があるのだが、彼女はそれを知らないようだった。

もしくは、この正装を着付けた侍女がそれを知らないのかもしれない。

奏欽は少女から視線を戻し、九雷に言った。

「将神を連れ回すとはいいご身分ですね、九雷元帥」

嫌味にしか聞こえないが、九雷は気にしなかった。

「愛人アイレン（注1）を同伴するのが、問題でも？」

薄い笑みまで浮かべて、居丈高に開き直っている。

こういう態度が、宮中の女性達が彼を敬遠する原因のひとつでもあるのだが、奏欽は所謂宮中会話には慣れているし、まだ彼のほうが儀礼をわきまえている分、ましだとも思うのだ。

火雲宮の敷地で正装も着けずに、バイクで乗りつけるとんでもない無法者も居る。

若気の至りとはいえ、なぜあんなゴロツキと結婚までしてしまったのか、奏欽は未だに夢にうなされることがある。

「この微妙な時期にわざわざ『それ』をやるところが、問題といえれば問題でしょうね」

奏欽はそう言ったが、それすらも九雷の計算のうちか、と思いなおした。

そこには音楽家らしい理解の仕方がある。

奏欽は九雷の演奏を聞いたことがあるのだ。だから、彼の人となりも分かっているつもりだった。

「さあ……。なにを仰ってるのか、分かりかねますが」

「将神もいい迷惑ですね」

すると、それまで黙ってことの成り行きを見守っていたらしい少女、沙龍が、迷いながらも口を開いた。

「イヤ、元ですが……」

「それは、失礼……」

さっさと自分の仕事に戻っていく奏欽を、なにかを確かめるように、沙龍はしばらく見送っていた。

あの衣装では相当動きがスローになるはずなのに、その重さを感じさせない動作も気になるが、沙龍が気にしているのはそういった視覚ではない。

目に見えるものはいつも一番強烈なイメージを与えるが、それ故にあまり重きを置かないほうがいいというのは、風林の教えであり、沙龍自身も実践していることだった。

「今のが、陽輝の元奥方さ」

沙龍の頭上に、九雷の声が掛かった。

「へえ……。……。ええええッ!？」

「なんだその反応は。そんなに驚くことか？」

「だって、ナニ、アレ!? すげー美人じゃんッ!？」

しかも、沙龍の感覚で言えばかなり歳の差があるようにも見える。

あの一見ならず者にしか見えない陽輝と、深窓のお姫様風の奏欽が元夫婦だったというのは想像を絶するのだ。

「本人はあの美女をして『ヘンな顔』と言っていたがな」

「ナルホド……」

と、沙龍が妙に納得したのは、陽輝の審美眼はおかしい、と再三九雷が言っているからだ。

「しかし、そんなんであんな美人と結婚したら、天界中の男から総スカン食らいそう……」

「実際、食らってたぞ」

「フーン……?？」

沙龍はどうもまだピンと来ない。

「管弦府の長官をしていてな。普段はほとんど出てこないんだが……」

さすがに、今日は長官自ら出仕して、指揮を取らなければならぬような日だ。

「なにか怒ってたのかな。それとも、ああいう人なの？」

「色々気苦労もあるんだろう。今の南海龍王だからな」

「……えッ？」

沙龍の今度の驚きは、その言葉の裏に「あの西海龍王と同等？」というのがあ
る。

四海龍王とは、かつての天帝が特別に拝したという最高位の官位であり、龍族
を統べる、言葉通りの『王』である。

本来なら、威風堂々、長い顎髭なんか生やした厳つい男性を思い浮かべてしま
うものだ。

しかし、実際に沙龍が知っている龍王というのは、あの飛龍（ごうじゆん）の父親にして、毎
日遊んで暮らしているようなちよい悪オヤジ風の西海龍王敖閏（ごうじゆん）なので、どうし

ても基準がそこになってしまおうのだろう。

「あんな可愛い子が『龍王様』？」

実際は、沙龍より遥かに年上なのだろうが、奏欽は見た目年齢では確かに十七、八にしか見えない。

「代変わりして間もないからな」

九雷はことも無げに言う。

しかし、彼らの言う『間もない』というのが数年単位でないということは、沙龍もなんとなく分かってきた。

高校生くらいにしか見えない奏欽が、離婚歴のある龍王にして、一省庁の長官であるということも、この世界ではどうということはないのだろう。

「なんか色々繋がってきたような気がするよ」

沙龍は、陽輝が龍族に嫌われているという噂があるのを思い出したのだ。

なるほど、あの美女を搔っ攫っておきながら離婚したとなれば、嫌われてもしょうがないかもしれない。

だが、それだけではないだろう。

惚れた腫れたの事情だけで嫌われるほど、メルヘンな世界でもあるまい、と沙龍は思う。

更に、普段はあまり火雲宮の政治的事情を話さない九雷が、この件についてはわりとオープンな物言いをするのが引っ掛かった。

とりあえず、奏欽が言っていた『微妙な時期』という言葉の真意については、夜にでも九雷に聞いてみよう、と思った。

「いい匂いがする」

沙龍が独り言のように言った。

「ああ、桂花か」

九雷はそう言っておいてから、周囲に金木犀の木を探したが、特に見当たらなかった。

「そうだね」

沙龍だけが、その残り香の正体を理解していた。

(注1) 愛人……中国語で「恋人」の意味だが、九雷は「婚約者」とか「パートナー」の意味で使っている。

2 焼け焦げの紙片

祝辞を述べたついでに、沙龍は秦帝に一連の仕事の報告書を提出してきた。

『黒の森』における五行の歪みは、冥府最下層と繋がっていたのが原因であったこと、そして、神獣がどこからやって来た存在なのかということ——、それらの事実と、玉帝ぎょくていのレポートの翻訳部分も併せて、やっと提出できる形になったのである。

沙龍と秦帝にとっての最大の関心事であった「保持者の魂魄から神獣を引き剥がす方法」は結局見つからなかった。

ただ、沙龍の手元には焼け焦げた数枚の紙片は残っている。

白帝君りゅうきつが竜吉りゅうきつの公主に頼まれてデリバリーしたものだ。

後日、金鑾斗闕きんらんとうけつに問い合わせた結果、確かにそれが玉帝のレポートの残りの部分であったことが分かったのだが——。

「これ、どうせーっちゆうねん」

一人、水雲宮に戻った沙龍は、書齋でその紙片と睨めっこしていた。

沙龍は秦帝にこの焦げた紙片のことについては報告をしなかった。

白帝君の落ち度を庇うわけではなく、この紙片には大したことは書いてないだろうと思ったわけでもなく、ただ、なんとなく、である。

無理矢理説明するのなら『ここに書かれてあることは自分にとってだけ重要』という気がしたからだ。

なぜそう思うのか、というと、白帝君がいつぞや訳してくれた『昊こうちゃんレポート補完バージョン』の一文による。

『保持者が人の身であった場合、長寿を保つ方法はひとつある。それを保持者が望めばの話だが』

なぜ玉帝がそんな一文を残したのかは謎だが、それはまるで、今の沙龍の状態を分かっているかのようだった。

実際、そうなのかもしれない。

玉帝はいつか緑麗の魂魄が天界に戻ってくることを確信していたのだし、その時、生身の人間である『神獣の保持者』が、それ（つまり長寿を）を望む場合も充分に考えられたはずだからである。

（別に永遠に若くありたいとか、死にたくないとか、そういうんじゃないだけどなー……）

沙龍はさつきからそんなことを考えている。

少し肌寒くなってきた、と感じて、まくっていたパーカーの袖をおろした。

帝都は常春とはいえ、この時期、陽が落ちればそれなりに冷える。

九雷は「生誕祭」の夜の部に参加していて、今日は遅くなるだろう。

沙龍も方々から誘われたが断ったのだ。あの重たい正装で数時間を過ごせる自信がなかったのである。

悠花ゆうかの淹れてくれたコーヒーを飲もうとして、沙龍は一旦マグカップを置いた。

頭上で微かな物音がしたからである。

しかし、それは水雲宮の屋根に風火輪ふうかりんが着地した、馴染みの音だったので、す

ぐに警戒を解いて、テラスまで出て行った。

耳だけには絶対の自信がある。

案の定、夜色に染められた少年飛龍ひりゆうがテラスに降りてきた。

「晚上好。どしたの？ 今日きゅうげんにゃんにゃんは九玄娘々 の所に行ってるんじゃないかっけ？」

水雲宮の居候と化している飛龍だったが、寢床は一定していない。

保護者である九天玄女の所や、最近では木佐の屋敷に寝泊りすることもあるらしい。

「九玄にその話をしたら、心当たりがあるそうだ」

無表情の飛龍が、さっきまで沙龍が唸っていた焼け焦げの紙片を指差した。

「心当たりって、つまり、復元してくれるような人が居るってこと？」

「そうだ。俺の宝貝パオペイを作ってくれたヤツでもある。行ってみるか？」

「今から？」

「ああ」

沙龍は少し躊躇したが、飛龍に「十分待て」と言って部屋を出て行った。

まず、この夜空の下でドライブするのは相当寒いだろうと思ったし、ちよつと長旅になる予感もしたので食料持参のほうがいいだろう、と思ったのだ。

クローゼットからマントのような大きめの上衣を引っ張り出し、小走りで階下の調理場に行くと、夕飯の準備をしていた料理長が少し驚いた顔をしていた。

「え！ 今からお出かけなんですか？」

「うん、だから弁当が欲しい。今すぐ用意できる？」

「そりやできないことはないですが……」

巨大な鍋を前にして途方に暮れてる料理長は、今作っているこの膨大な料理の行方を心配しているのだ。

「戻ったらちゃんと食べるから。悪くなるようだったら、冷凍でも……」

そう言う沙龍の後ろから、厨房見習いの少年が声を掛けた。

ひよんなことから水雲宮にやって来た、日本人の男の子である。

「あの、緑麗様。簡単に詰めましたが、これでいいですか？」

こういうことがたまにあるので、沙龍の姿を見た時からササッと用意したらしい。

機転が利く少年なのである。

「謝々！」

「デザートはオレが作りました。本物の仙桃せんとう入りの桃饅です」

「ほー、もう単独で作らせて貰えるようになったのか」

沙龍はにっこり笑って、この見習い少年が水雲宮にやって来た時のことを思い出していた。

心細そうな目をしていたが、日々水雲宮の調理場で鍛えられ、だいぶ逞しくなったらしい。

「ありがとう、健ちゃん。味わって食べるよ」

日本語でお礼を言ってから、沙龍は飛龍の待つテラスに戻った。

「む、ちよつと寒いな……」

飛龍の背中で冷たい夜風を受けながら、沙龍は両肩をすぼめた。

以前は、もつと寒さには強かったはずなのに、天界の常春の気温に慣れすぎた

せいだろうか。

木佐と日本で暮らしていた時は「東京の真冬をノースリーブで歩けるのは馨だ
け」とまで言われたのに、沙龍は最近、よく寒がる。

「大丈夫か？　もう少し低空を飛ぶか？」

龍形態の飛龍が、首だけを半分回して聞いてきた。

「いや、いい。あまり低空飛行すると、天界側の警備システムに見つかったら
でしょ」

帝都の防衛網は超A級のクオリティを誇ると言われている。

領土の東西南北を異民族神魔に晒され、且つ、ことごとく撃退してきた歴史を
考えればそれは当然かもしれない。

かなり高度を飛ばないとすぐに見つかってしまうのだ。

そして、仙界との境界ラインでこの警備システムに引っ掛かると、厄介なこと
になる。

天仙界の実力者四名にお墨付きを貰っている沙龍とはいえ、事前報告もなしに
この境界越えをして、それが見つかつたとなれば数時間は官吏に説教されるだろ

う。

九雷は恐らくなにも言わないし、怒りもしないだろう。どこまでも極甘な恋人なのである。

「で、向かってるのはどこつつつたつけ？」

早速弁当を広げながらもごもごやってる沙龍は、飛龍の口にも桃饅を丸ごと放り込んでやった。

「乾元山かんげんざんというところだ。太乙たいいつが住んでる」

「ふーん。じゃあ、その太乙って仙人が、これを直してくれるのか」

沙龍は焼け焦げた紙片を掻き集めて入れてあるビニール袋を取り出した。

「なにか、大事なもののなのか？」

「それすらも分からないんだけどね。……あ、それより、復元にはいくらかかんの？ タダでやってくれるわけないよね？」

「いや、金は取らないはずだ。自分の研究にしか興味のないような仙人だからな」

「あー、そのタイプね……」

一方、水雲宮の最上階では、火雲宮から今しがた戻ったばかりの九雷が、バスケットの中で暴れている小龍を救い出していた。

小龍が寢床にしているそのバスケットの上に、何冊か重い本が重ねられていたので、自力では出られなかったのだろう。

恐らく、そこに小龍が入ってることを忘れていたか、気付かなかった沙龍の作業だ。

「ムキューツ！」

「そう怒るな。……で、沙龍はどこへ行ったんだ？」

しかし、小龍に聞いたところで分かるはずもなく、九雷はベッドサイドのテーブルから、手書きのメモを見つけていた。

『元帥へ。ちよつと飛龍と散歩してくる。——沙龍』

それを読んだ九雷は、まだ怒ってガシガシと本を蹴っている小龍を見て、
「放って置かれてるのは、確実に俺のほうだと思わないか……？」

そんなことを言っていた。

今度は、『どこに』と『いつまで』という重要な要素もちゃんと書いておくように言わないと、と九雷は思った。

3 奏欽と瑠伊

激務の一日が終わった管弦府では、スタッフ達がささやかな慰労会を始めていた。

毎年、この日さえ乗り切れば、後は気楽に仕事ができるのである。

官庁とはいえ、スタッフはほとんど芸術家肌の音楽家達だ。キビキビと実務をさばくのは慣れていない。

その慣れない仕事と重責から解放されれば、気分も弾むというものだ。

しかし、奏欽はいつもの通り、にこりともせず、スタッフに労いの言葉をかけただけで、席を立った。

奏欽はお酒が飲めないのです、こういう時は乾杯だけして帰るのを、皆、承知している。

が、奏欽は帰るのではなかった。

まだ細々とした仕事が残っている。

静かな足取りで、府内の奥の長官室に向かっていた。

一年に一度くらいしか使われていない長官室に入ると、夜の冷たい空気がそこにひっそりと溜まっていた。

さっさと残っている事務仕事を片付けて家に帰りたいたのだが、いつもはなににも考えずに動く手も、今日はあまりいうことを聞いてはくれなかった。

明かりも点けずに、疲れた顔で長官室の椅子に沈み込む。

ここ最近の龍王会議や、実家での諸問題で疲労はたまっているようだ。

気配に気付いたのだろうか。隣の部屋で同じく残業をしていたらしい瑠伊が、長官室の様子を見に来た。

「欽姫、まだ残ってたんですか」

瑠伊はそう言いながら明かりを点けようとして、やめた。

前に何度か怒られたことがある。彼女は、明るい太陽や、夜の煌々とした電灯が好きではないらしいのだ。

瑠伊はすぐに顔を引っ込め、数分後に暖かいコーヒーを持って戻ってきた。

「お疲れのようですね。もう帰ったほうがいいんじゃないですか？」

差し出されたカップを受け取りながら、奏欽は曖昧に首を横に振った。

「今日、将神に会ったわ」

ポツリ、と奏欽がもらす。

「ああ、緑麗様ですか」

「着物の重量に潰されそうな、あんなコンパクト・サイズが、最強と謳われた美女……？」

その独り言のような言葉に他意はないが、奏欽にとって『将神緑麗』は少し気になる存在でもあったので、実際に会ってみると、落胆のようなものも感じた。

「前世は本当に美女だったららしいですけどね」

「九雷元帥が背高いから、余計、愛人というより、親子みたいだったわよ」

奏欽や溜伊は、緑麗が叛乱を起こし、地上に落とされてから、さらに数百年後に生まれた世代だ。

二人とも、昔の歴史は知っていても、自分達にはあまり関係のないことだと思っっている。

では、なぜ、奏欽が緑麗に少し関心を抱いているかというところ、緑麗が、奏欽の

元夫と親密だったからだ。

男女関係はなかったはずなのだが、それなのになぜ仲良くなれるのか。そこが気になるのだ。

「それにしても、火雲宮は相変わらず陽気も陰気も派手に溢れていて、これじゃ、玉皇陛下が身を呈して護った意味がないんじゃないかしら」

奏欽の憂鬱な呟きは、龍王会議での芳しくない結果とも関係がある。

瑠伊は具体的にはその内容を知らないし、奏欽も教えてくれないので、この話になると距離を置かざるを得ない。

このもどかしさは、子供の頃は知らないでいられたのに、と瑠伊は思う。

「欽姫、さきほど、ごうめい敖明様が管弦府にお見えになりましたが……」

話題を変えようと思っただけで言ったのだが、逆効果だった。

途端に、端正な奏欽の顔が険しくなる。

「居ないって言った!？」

「え、ええ、まあ。欽姫が陛下に謁見している間のことでしたから」

「この前はつきり断ったのに、まだ諦めてないってことね。娘の職場にまで現れ

るなんて！」

敖明とは奏欽の父であり、先代の南海龍王である。

今は隠居生活をしているが、未だに南海龍王家では発言権があつて、最近はやかましく再婚を勧めてくるので、奏欽は逃げていた。

「再婚、したくないんですか？」

「したいわけないじゃない！　そもそも誰とするって言うのよ!？」

「そりや、まあ……」

強い口調にたじたじとなつた瑠伊だったが、その数秒後には思わず微笑んだ。

こういう話になると、奏欽は元気になる。

「元気」というのは少し語弊があるかもしれないが、子供の頃の活発さが戻つてきた気がして、瑠伊は嬉しいのだ。

ここ数十年、いや、数百年の奏欽は滅多に登城もしないし、大好きだったはずの二胡も弾いていないようで、ずっとなにかから逃げているように見える。

ちつとも笑わなくなつた奏欽は、まるで人形のように見えた。

だから、少しでも——例えそれが悪口だとしても——やかましいくらいが、瑠

伊にとっては嬉しい。

「年頃の娘が龍王位に就いているのに、未だにバツイチ独身つてのは外聞が悪
いってだけの話よ。この前なんてとんでもないこと言い出したわ」

「なんです？」

「こともあろうに、後宮入りも考えてみるって」

「そりゃ、いくらなんでも……」

瑠伊は笑ったが、言い出した敖明は半分本気なのかもしれない。

敖明は龍族の遺伝子というものに多大な誇りを持っているし、それ故に、娘が
嫁ぐのなら相応の者でなければならぬと考えているからだ。

だから、奏欽が昔、陽輝と結婚すると言い出した時は大反対した。

しかし、「南海龍王を継ぐ」という交換条件を奏欽が承諾したので、渋々認め
たのである。勿論、そこには親の甘さもあつた。

最後まで大反対し、かなり悪質にその結婚を阻止しようとしたのは、兄の敖丁ごうてい
のほうだった。

「今度の水晶宮すいしょうきゅうでの春節はお見合いパーティーになるはずよ。かき集められ

るほうもいい迷惑よね。こんなバツイチ・ブサイクの龍王の再婚候補なんて」

瑠伊は、今までに何度も言っているのに一向に聞き入れてくれない、「欽姫はブスじゃないですよ」というセリフを飲み込んだ。

周囲から「龍族一の美姫」だの「月夜もかすむ天女」だのと誉めそやされていくというのに、奏欽はそれを龍王に対するおべっかだと思っていて、自分のことを完全にブスだと信じ込んでいる。

どこか美的感覚がおかしいのではないかと瑠伊は思っているが、蟠桃会で会ったことのある竜吉公主や九天玄女のことを「美人」と言っていたので、特に異常なセンスというわけでもなさそうだった。

「でも、そんなのはどうでもいいのよ。断ればいいだけなんだから。問題なのは……」

奏欽は喋りすぎたと思ったのか、それ以上は口を噤んでしまった。

瑠伊も、黙った。

元々、言葉で語るの二人とも上手くないのである。

だから、彼らには楽器という表現方法がある。

しかし、奏欽は自らそれを封印してしまったのだ。

『二胡は私の心を伝えてしまうから……』

それが、奏欽が二胡を弾かなくなった理由である。

4 深夜の会談

先日、龍王会議は異例の数日持ち越しとなって終わった。

その時の決定事項は、奏欽にとつては憂鬱極まりないものだったが、その決定により、却って自分の腹は決まった。

北海龍王の敖吉ごうきつや、東海龍王の敖坤ごうこんが裏で着々と準備をしているのは確かだろ。

ひとまず『納得はしかねるが、それが決定事項なら従います』というスタンスを守りつつ、奏欽もまた、急遽自分の行動を開始した。

四海龍王はそれぞれ独自の軍事力を持つことが許されている。

奏欽自身は南海龍王となった時に、己の主義主張から自分の部隊を解散させたが、それらは名前を変えて現在も奏欽の手足になっている。

『奏の“ホラちゃんと元通り係”』

と、陽輝はからかってそう呼んでいた。

夫婦喧嘩をする度に、腕力では敵わない奏欽が八つ当たって色んな物を壊すので、それらをササつと片付けたりする要員——という意味だ。

しかし、普段はそんな黒子のような雑務をしても、実態は屈強な龍族の兵士なので、奏欽が命じれば裏の仕事もこなせる者達ばかりである。

奏欽は龍王会議の初日を終えた時、この部隊に召集をかけ、北と東の動静を探るように命じた。

同時に、元夫の戦友である天界軍元帥の所へ、お忍びで『世間話』をしに行った。

間に合わないかもしれない、とも思った。

自分は南海龍王家に引き籠もって、外の動静にあまり注意を払ってこなかったので、敖吉や敖坤のやろうとしていることを知った今となっては、かなり遅れを取っているはずだ。

しかし、彼なら少なくとも帝都が灰になるのを防いでくれるのではないかと、という希望があった。

奏欽は、九雷と特別に親しいわけでもないし、元夫の戦友とは言え、言葉を交

わしたことも数えるほどしかない。

人柄についてはあまり評判も良くない。『天界一切れ者だが、天界一性格が悪い』と言われているくらいだ。

奏欽は、天界軍総司令部に赴いた時はお忍びで、街娘のような格好をしていた。

深夜に現れた九雷はそれを察して、話が外に漏れないように配慮してくれた。奏欽が持ってきた話の質がすぐに分かったのだろう。

「こんなことを相談するのは筋違いかもしれませんが……、私は貴方の天界軍元帥としての才と、一欠けらの良心を信じています。それを最初に言っておきます」

「光荣です、龍王公主」

わざとらしく丁寧に答える九雷もまた、奏欽に対してはある種の連帯感のようなものを感じていた。

それは、言葉で説明するのなら『互いの演奏を聞いたことがある仲』という言い方でしか説明できない。

それだけでなにが分かる、というのが一般の意見だが、それだけでなにもかも分かる、というのが一流の楽師というものだ。

といっても、九雷のほうは『一流の楽師』とは言い難い。

幼い頃から手慰みに笛子や月琴を奏でていただけで、大して努力もしていないし、今も自分のその趣味については、恋人にすら知らせていない。

しかし、九雷の非凡な耳は、超一流の奏者の音を聞き分けることはできた。自分がそれには到底及ばないことも分かる。

だからこそ、拙い自分の趣味は沙龍にも未だに隠しているのである。

更に、そういった雅な趣味を持つことを、軍人としては誉められたことじゃないと思ってもいた。

奏欽はそれすら承知している。

最後にこの二人が会ったのは数年前の玉帝主催の個人的なお茶会の席だった。

その時、楽器を封印している奏欽に、玉帝が「月琴ならば」と強引に弾かせたことがある。

奏欽も、これが一番得意な二胡なら断っていたところだろう。

渋々承知した奏欽は、月琴を奏で始める。

しかし、奏欽は完璧な旋律を奏でながらも、曲を途中でやめてしまったのである。

久しぶりのせいで曲を忘れた、と取り繕ったが、真実はそうではない。そして、そのことに気付いたのはその場では九雷だけだったのだ。

そして、九雷に気付かれたということを、奏欽も理解した。

だからなのか、奏欽は場の口直しという口実で、九雷に曲の続きを弾くように提案した。

意外にも、九雷はそれを承知した。

出来事としては、ただ、それだけのことである。

「内部告発——と思って頂いても結構です。でも、私は告発だけして後は任せら、というつもりもありません」

キツパリそう言い切っておきながら、奏欽は次の言葉をどう言うべきか、しばし迷った。

九雷はそれを見透かし、

「有益情報はいつでも歓迎しますよ。言いくいようでしたら、私のほうから話題提供をしましょう。……北海龍王殿はお元気ですか？」

奏欽は驚いたが、同時に安心もした。天界軍かはどうやら無能ではないらしい。

「ええ、最近は一層お元気そうに見えますわ。なぜか生き生きしていらっしやるようで」

「なるほど。なにか老後の趣味でも見つけたのなら喜ばしいことです。我々はこうして密会現場など持たずに済む」

「ええ……」

「陽輝に見つかれば、あらぬ誤解をされて、俺は殴られるか、殺されるか、どちらかだな……」

急に素の口調に戻って、独り言のように言う九雷は、カマかけのつもりで言ったのだが、奏欽はサラリとかわした。

「第三優先順位の、しかも未練もなにもない元妻のことなんか、記憶に残ってるかどうか怪しいですけど」

「……」

「本題に入らせていただいても？」

「伺いましょう」

「軍部では、目星だけついてるといった段階かしら？」

「残念ながらその通りです。龍王家にはよほどの確証と口実がなければ、こちらから手出しはできない」

「なら、私とその『確証』と『口実』を提供できると思います」

「ホウ……？」

「敖吉様の本当の目的は、自らが玉座に座ること。恐らく、ただそれだけです」
奏欽はずばりそう言った。

「そして、そのために黄龍の力を手にしようとしている。龍族の安泰のため、神獣の力が脅威だから、などというのは全て綺麗事です」

「つまり、『黄龍の保持者』を拉致する計画でも？」

「真っ只中ですわ。明日にでも龍王会議で決定されるでしょう。緑麗様を龍族の『客』として水晶宮に『保護』することが」

九雷は敖吉の器量を知っている。

とてもそんな大それたことを考え、計画に移せるような男ではない。

「思考パターンとしては単純で、らしいと言えらしいが……。沙龍を拉致したところで、黄龍の力を自由にできるわけでもあるまい。沙龍を言いなりにさせるためのアメかムチも用意しているわけか？」

「だと思いますが、ひとつ、嫌な情報があります」

「なんででしょう？」

「私がついさつき得た最新の情報では、水晶宮の改装費用が今期だけでも前年度の三倍以上に跳ね上がってます」

「！ ……まさか」

「その『まさか』だと思います。あれを使うなら緑麗様に黄龍召喚をさせずとも火雲宮を言いなりにできる」

「しかし、水晶宮を敖吉が簡単に私物できるわけでもないでしょう。東海龍王家が黙っていないはずでは？」

「残念ながら、敖坤もグルです」

九雷は驚きこそ見せなかったが、それについては考えが及んでなかった自分を

呪った。

バックボーンだけで東方軍大将となり、東海龍王となった敖坤は、無能とまでは言わないが、毒になるような男でもない。

小者（九雷にとって、の意味だが）の敖吉はともかくとして、東方軍大将としては職務を平均的にこなしてきたあの敖坤がクーデターだと？　と思わずにいられない。

「そこまで狂ったか……。しかし、奏欽殿。俺はどうも腑に落ちない気がする。敖坤のほうは心当たりがなくもないが、あの小心者の敖吉をそこまで『狂わせた』やつが別に居るように思えるのですが……？」

九雷がそう言った時、この密談のために結界を張っていたはずのドアが、簡単に開いた。

「さすが九雷君。もうそこまで辿り着いちゃった？」

西海龍王、敖閏だった。

「敖閏様……、あの……、非常に言いにくいんですが、色っぽい名残が各所に……」

奏欽は視線を落としたままコソツと言ったのだが、この場には三人しか居ない。

当然、九雷にも聞こえた。

「ごめんごめん。欽ちゃんがひとりで妙な場所に向かったって聞いて、心配になつて、急いで来ちやつた♪」

敖閏はとりあえずシャツのボタンを上まで止めて首もとを隠し、乱れた髪は手ぐしで適当にセットした。

どこかの愛人宅から直行した、という感じだが、よっぽど急いだのだろうというのは分かる。

普段ならもつと外見を整えてから来るはずだ。

しかし、九雷はそんなことよりも、自分の張った結界を敖閏がどうやって看破したのが気になっていた。

（確かに、士官学校でも俺の五行術は大したことなかったが、こうも簡単に破ら

れてしまうと、滅入るな)

早急に対策はしなければなるまい。

「そこまで急いで駆けつけて下さったからには、なにか重大事が聞けそうですね」

気を取り直してそう聞くと、敖閏は辺りを一度見渡した。

「まあね。でも、それを話す前に欽チャンは帰ったほうがいいかな」

「私のはけものですか？」

奏欽は敖閏が優しさからそう言っているのを承知しているが、帰る気はなかった。

「お気持ちは嬉しいですが、私も引くわけにはいかないのです」

じつと強い瞳で見返す奏欽に、敖閏はしばらく沈黙した後、折れた。

「そうだね……。ここで君を帰してしまったら南海龍王のプライドを傷つけることになってしまおうね」

「では、敖閏殿。できれば、簡単には破られない強力な結界をお願いします」

九雷がそう言うと、敖閏は首肯して、この殺風景な一室に異空間を造り出し

た。

一瞬にして三人は闇のように黒い空間に包まれる。

「まあ、こんなもんで完全にあの人の目をくらますことができるとも思えないけど……。少なくとも今はまだ大丈夫だろう」

奏欽は、敖閏の言う『あの人』というのが誰なのかは知らない。

ただ、敖閏の様子から、それが敖閏よりも力を持った人物であるのだということとは推測できる。

「誰です？」

「それは、まだ僕の口からは言えない。そのうち分かるよ」

九雷は、思い当たる人物が居ないことはない。

確かに東方天界においては実力も癖もある人物だ。しかし……。

「ただ、その人物に、こちらが勘付いたことを知られるとまずいことになる。だから、用心して。もし分かったとしても、しばらくは気付かない振りをしていて欲しい」

「ハイ……」

奏欽は神妙に頷いた。

「とりあえず、目下の危険人物は敖吉のほうだけだね。今はこれをどうにかしないと、緑麗チャンが危ない」

「その『危険人物』には敖坤も入ります」

奏欽が憂鬱そうに付け足す。

「うん、彼は恋情に縛られてるだけなんだけどね。ヘンなところが父親に似ちやったようだ。あの親子ときたら、溜め込むんだよね、どこまでも」

敖坤の父とは、先代の東海龍王、敖光のことである。

哪咤なた太子に殺されたということになっているが、あの事件も未だに謎が多い。

「伯父は直情型だったけど……」

九雷が言っているのは、先代の青龍、敖広のことである。

九雷にとって、その敖広は、思ったことはすぐ口にする、暑苦しい男というイメージしかない。

「東海龍王家はね、変わり者が多いんだよ」

敖閏がそう説明するも、あまり説得力はなかった。

一番の変わり者は敖閏だと九雷は思うからだ。

その日の会談は朝まで続き、次に生誕祭で会った時は、九雷も奏欽もお互いそ知らぬ振りで挨拶を交わした。

仙界の領土、乾元山である。

標高はそれなりに高い山なので、頂上付近の気温は常に一桁だった。

精密機器にはこれくらいの温度のほうがいいという太乙の考えもあって、こんな場所に洞府を構えているのだが、仙道達はほとんど気温の影響を受けない修行を積んでいるので、気にならない。

しかし、ここを訪れた沙龍は「寒い！」と言ったまま動かなくなった。

心配した飛龍は、カチコチになった沙龍の体を、太乙への挨拶もそこそこに、勝手に庵のストーブの前まで連れて行ったのだが、なかなか冷えた体が温まらない。

「寒いよー、寒いよー」

などとぼそぼそ言いながら、太乙が作ってくれたホットレモンをすすっている。

「ウーン、生身の体にはキツイのかな？　でも、調べてみたけど、東京の冬くらいの気温だよ？」

この庵の主、太乙は黒髪中背のごく普通の男だった。

身体的な特徴はこれと言ってないが、その平凡さを自分で誇っているような人物である。

『仙人は見かけは平凡、中身は非凡であるべし』という彼自身のモットーによるらしい。

九天玄女とは同期入山の仲というが、見た目の年齢は九玄よりかなり上に見えるた。

天界でもそうだが、仙界でも見かけなど当てにはならない。

いや、もしかしたら、人界でもそうかもしれない——と沙龍は思う。

「温度計が狂ってんじゃないの……？　私は東京の冬なら半袖だって平気だったけどな……」

「まあ、沙龍君は、そこで暫く暖まってよ。その間に、これやっちゃうから」と、太乙はさきほど沙龍から預かったビニール袋を持って、奥の部屋に向かっ

た。

例の焼け焦げた紙片が入っているのだが、どうやら太乙には本当にこれを復元できる術があるらしい。

「お願いしまっふ……」

沙龍は自分の体の異変というものを確実に感じていた。

「熱があるわけじゃないよな？」

飛龍が心配そうにウロウロしているが、ただ寒いだけで気分が悪いわけではない。

「うん、ダイジョブ……」

気分は、どちらかと言うといいかもしれない。

これは眠りに入る前の心地よさだ。

健一の詰めてくれた弁当のおかげでお腹もいっぱいだし、普段ならそろそろベッドに入る時間のはずだ。

沙龍はウトウトし始めた。

なんだろう、なんだろう。

この心地よくて、深すぎる眠りは。

寒さも暑さも感じない。

時の流れも感じない。

なにも余計な雑音が入らず、完全に外界をシャットアウトできてるような気がする。

動物にとって、それは結構危険な状態なはずなのに、その危険すらどうでもいいと思えちゃうような、そんな感じだ。

仮死状態とでもいうのかな。

お腹も空かないし、歯磨きしなくてもいいし、もしかして、これって最高じゃ？

ずっとこうして眠ってれば、歳も取らなくて、私はずっとあの人の傍に居られるかもしれないよ？

だって、そうしないと、またあの人、悲しむでしょ？

数千年の中のたった数十年なんて、瞬きするようなものでしょ？

ずっと待っていてくれたのに、『私』がまたすぐ居なくなったら、あの人は今度こそ立ち直れないでしょ？

あ、そうか——。

そうしたら、また別の生まれ変わりを見つければいいのか。

そうして、何度も、『緑麗』の生まれ変わりだけを探して、かつさらってくるのかな。

なんかそれって——。

切ないなあ。

* * *

一休みを兼ねて、太乙が客間の二人の様子を見に戻ったのはほとんど明け方だった。

沙龍は毛布にくるまるようにしてソファア―で、飛龍は豪快に床に四肢を投げ出し、眠っていた。

ストーブの火は消えかかっている、部屋の温度はかなり下がっていたが、凍死するほどではない。

太乙が旧式のストーブに薪を足そうと近寄ると、飛龍がむっくり起き上がった。さすがに気配を感じて起きたらしい。

「……」

飛龍の寝起きは一見、普段の無表情と変わらないのだが、相当ボ―ツとしていることを太乙は知っている。

「飛龍君のほうは最近どうなの？　ちゃんと家に帰ったりしてる？」

太乙はそんな話をしながら薪をくべていた。

しばらく、あー、とか、うん、とか答えていた飛龍だが、ソファア―で寝ている沙龍が一センチも動かないので突付いてみた。

が、沙龍は起きない。

いま突付いた感触がやけに固かった気がしたが、毛布の上からでは分からな

かったので、飛龍は沙龍の顔を覗き込んだ。心なしか青白く見える。

「……？」

「どしたの、飛龍君」

「緑麗が、起きない——」

「まだ寝かせておいてあげたら？」

「いや、おかしい……。少しの刺激があれば起きるはずなのに、体温だって、……!?」

飛龍が触れてみた沙龍の額は、思わず手を離したくなるほどに冷たかった。

人間の体温は三十六度前後のはず。飛龍はそれを知っている。

なのに、今の沙龍の体は零下でカチカチに凍っているようだ。

普通なら、とつくに心肺機能が停止しているような体温である。

「た、太乙！ ど、どうしよう!?! どうすればいいんだっ!?!」

飛龍はパニックになりかけている。

こういう時は、太乙のほうが年の功で冷静だった。

ひとまず、騒ぐ飛龍を手で制して、沙龍の脈と呼吸を確認する。どちらも平常

時よりはるかに回数は少ないが、確認できた。

「飛龍君、その薪をどんどんくべて、部屋の温度を真夏のタヒチくらいにして。僕はお湯の用意をしてくるよ」

「わ、分かった！ い、医者呼びに行かなくていいのか!? 緑麗は大丈夫なのか!？」

「うん、大丈夫、生きてるよ。医者は、仙界に居ないことはないけど、開業してるお医者さんはちよつと遠い所に居るから、ひとまずは一番すぐ来れる人で、一番医学に詳しそうな人を呼んでおこう」

それが誰のことか、仙界に数年住んでいるはずの飛龍は分からなかったが、三十分も経たずに九玄が青鸞せいらんを飛ばしてやって来た時には、半泣きになった。

飛龍はあまり知らなかったのだが、九天玄女は大抵の仙術をマスターしているし、博識だ。

医学も、薬学も、人界の医者並には修めている。

「今日は九玄が本物の仙女に見えるぞ！」

「阿呆！ 元から本物の仙女だ！」

玄関先でそんな短いど突き合いをしながら、足音立てて沙龍の元へやってきた九玄は、一通り太乙の説明を受け、カチコチになっている沙龍の体を診ると、あつさりと言った。

「冬眠だな、こりゃ」

「……は？」

飛龍が間抜けに聞き返す傍らで、太乙は呑気に言った。

「あゝ、やっぱり？ 症状からしてどうもそうじゃないかな、とは思ったんだけど」

「なにを言ってるんだ、九玄。緑麗は今は普通の人間なんだろ？ 冬眠ってのはクマとかヘビがするもんじゃないのか？」

「そう、普通は変温動物がするものだが……。飛龍、お前の一族も昔は冬眠することがあったらしいな」

「!? 俺は知らないぞ、そんな話」

「長年の生活の中で、する必要がなくなったということだろう。興味があればそこから辺は自分で調べてみるといい」

「で、どうするの？ 九玄。このまま体温を上げても目が覚めないうら、やっぱプロのお医者さんに診せたほうがいいよね？」

「ウム……」

九玄は、何人か居る、仙界の医者进行を思い浮かべたが、どいつもこいつも変人ばかりで、あまり当てにならないと思つた。

腕は確かだが、急患と聞いても三日後に腰を上げるようなタイプとか、そもそも所在地が掴めない住所不定とか、患者を研究对象としてしか見ていないマツド系とか、そんな変り種ばかりだ。

ならば、

『貴女が一声呼んで下されば、例えどこに居たって、私はすぐに駆けつけますよ』

と常々言っている天界一の名医が一番早いし确实ではないかと思つた。

6 龍族との因縁

生誕祭の数日後、九雷は未だに水雲宮に戻らない沙龍を心配していたが、方々に連絡するのも憚られたので、なんとなくそのままにしていた。

今回、沙龍は小龍を連れて行かなかったため、直接通話はできないし、沙龍の携帯電話は水雲宮の寝室で埃を被ったままだ。

万一、沙龍が危機的状況に陥れば、（天界の領土内であればという条件がつくが）四方将神にはすぐ分かるし、九雷が保険としてかけている術が発動するはずなので、最悪のケースは免れるはずなのだが、それだけで安心していられるほど、九雷は脳天気ではない。

仕事を放り投げて、一人で探しに行こうかと何度も思ったが、そんなことを周囲に知られたら確実に笑われそうだ。

特に、この目の前で勝手に寛いでいる親友には、さんざんからかわれそうなので、やめた。

「あ、そうそう。笑えるモンが来てたぜ。ホントに俺宛なのか、二回も確認しちまったが」

いつものようにフラツと水雲宮に遊びに来ただけの陽輝は、思い出したように懐かしわくちやになった封筒を取り出して、九雷に渡した。

「なんだ……？」

九雷は、その折れ曲がった封筒の中から金糸で縁取られた洒落た招待状を取り出すと、陽輝と同じように「まさか」と思った。

しかし、宛先はちゃんと西方軍大将執務室宛で、陽輝の長い本名も印字されている。

「いつの間にこんな冗談のセンス磨きやがったんだ。四方軍の敷地内ではカタツ苦しい挨拶しかしねえのによ」

「差出人は敖坤とあるが、『これ』の首謀者は敖吉のほうだろう」

「なに？ 北なのか？ で、なんでお前がそんなこと知ってる？ いや、愚問だったな。四海龍王の動きまで把握しておられるとはさすが元帥閣下」

「からかうなよ。お前だって、それを確認するために来たんだろう」

「まあ、敖坤にそんな冗談の才があるとは思ってなかったけどな。北なら話は分かる。つまり、あれだろ？ 長年の因縁にケリ着きたいか、本気で俺と仲直りしようとしてんのか、どっちかだ」

陽輝に送られてきたその書状は、龍族の催す新年会への招待状で、普段は外部の者は呼ばずに、一族だけで行うのが慣例になっている。

しかし、今年はオープンな催しにしたい、という短い挨拶文が添えてあった。

「よりによって、俺を呼ぶとはイイ度胸してるぜ。来るはずないと思って寄越したのかね？」

冗談のように言っているが、陽輝はその辺りを考えあぐねていた。

さつき陽輝自身が言ったように、「ケリを着ける」つもりで呼んだとしても、華やかな新年会の場で、衆目に晒されながらなにをしようというのか、具体的に思いつかない。

「そもそも発端は、緑麗と敖吉の喧嘩だろうな。挙句、お前に弟まで殺されたとあっちゃや、敖吉にしてみれば恨み百倍だ」

「そんなの、完全に敖吉の逆恨みじゃねーか」

昔の話である。

もともと、北海龍王敖吉は北方軍大将も兼ねていた。

しかし、当時は異民族神魔の侵攻が絶えず、北方軍は敗戦続きだったので、それを見かねた上層部が、人事異動で西方軍大将の副官をしていた緑麗を引き抜き、北方軍大将にしたのである。

それからは、緑麗の才もあって『無敗の北方軍』と賞賛されるまでになったのだが、失墜した敖吉は『無能の龍王』と陰口をたたかれ、輝かしい戦功を上げる緑麗を逆恨みするようになってしまった。

公の場でも、よく陰湿な嫌がらせをしていたので、それにブチ切れた緑麗が喧嘩を売って、力技で黙らせた——という経緯がある。

陽輝のほうは個人的な仇討ちである。

龍王家の若様というだけで傲慢に振舞っていた敖吉の弟が、酒の余興で一市民を斬った。スラムではよくある話である。

斬られたのは、陽輝の育ての親とも言うべき人物だった。

当時、既に札付きの悪ガキだった陽輝は、悲嘆に暮れるようなことはなかった

が、それ以来、特権階級というものを激しく嫌悪した。

いつか、自分の手であるの虫けらにも劣る野郎を殺してやる、と思いつけた。

実際、それを果たせたのはかなり後のことだったが、その時、龍王家の内情を探るために奏欽に近付いたのだ。

「因果は巡るってか……。しかし、俺は自業自得だから受けてたってもいいが、沙龍はなあ……」

「そうだな。巻き込みたくはないな……」

「とりあえず、北の龍王だけマークしてりゃいいんだな？」

「いや、どうやら敖坤も未練があるらしい」

「はあ!? もしかして、アイツ、まだ緑麗を思い続けてんのか!? いやー、ある意味尊敬するわ、そういう執着心って。どこぞの元帥閣下みたいじゃねえか」

九雷は怒る気にもなれず、黙った。

が、嫌味のひとつくらいは返そうと思いなおした。

「もしかしたら、南海龍王も参戦するかもしれないぞ。お前への恨み辛みは一番強いかもしれないからな」

今度は陽輝が黙った。

ムっとしたからでなく、殊勝にも、その通りかもしれない、と思ったからだ。自分の仇討ちに奏欽を利用したのは事実だし、そのせいで辛い思いをさせたはずなのだ。

「最近、会ったのか？」

陽輝は、九雷が急にそんなことを言うので、聞いてみた。

「ああ、この前の生誕祭で会った」

九雷は半分嘘をつく。

それより前に、奏欽が司令部に面会に来たことは言うべきことではない。

「まあ……、あのお嬢ちゃんに殺されんなら本望だが、奏はなあ……、そういうタイプじゃねえのよ」

「……」

「なんつうか、可哀想なくらい、不器用なんだよなー」

その眩きには、九雷も同意する。

不器用でなければ、あんなにも美しい旋律は奏でられないだろう、と。

7 空っぽの部屋

帝都から少し南下した私有地に奏欽の住まいがある。

その自室で、若き龍王公主は掃除をしている。

「……」

なにもかも遅いかもしれない——、奏欽はそう思っていた。

なにせ、自分がそれに気付いたのはつい先日の龍王会議のことだ。

この機会を虎視眈々と狙っていた敖吉は、かなり前の段階から準備を進めていたのだろうし、次の春節まではもう一ヶ月もない。

敖吉が行動を起こすとしたら、その春節シーズンだろう、と奏欽は思っていた。龍族の主だった面々が大手を振ってひとつの場所に集まるのだ。これを逃す手はない。

毎年、天界中の龍族を東の水晶宮に集めて、華やかに新年の宴を催すのは、大昔からの伝統だった。

一時期は時の天帝すら招待していたことがあるらしい。

今は欠席する者も多いし、身内だけの集まりという認識がされているが、この席に呼ばれることを誉れだと考える部外者達も多少は残っているくらいにの権威はあつた。

昔、奏欽が『貴方も身内だから』という理由で陽輝をこの席に連れて行こうとした時はひと悶着あつた。

陽輝が堅苦しい席を嫌ってるのは知っているが、それじゃいつまでたつても父や兄と不仲のままだ、と奏欽は憂いたのである。

が、思うに、陽輝は『嫁さんの親戚と仲良くする』つもりなど端からなかったに違いない。

『住んでる世界が違う』

と、度々冗談のように言っていたし、

『その溝は決して埋められない』

というのが彼の弁だ。

なのに、彼は大事なことはなにも言ってくれなかった――。

「あら……?」

奏欽は、鏡台の下でみっしりと埃をかぶっていた金属の塊を偶然発見し、忌々しいくらい鮮明に当時のことを思い出してしまった。

龍王会議と、それに続く深夜の三者会談、さらに一昨日の生誕祭と、最近人に会いすぎたせいだろう。普段、籠りっきりの生活なので、外部との刺激が過去の記憶と色々結びついてしまうのだ。

そういえばあんなこともあった、こんなこともあった、と治まらない怒りにも似た感情を、黒塗りの調度品にハタキごとぶつけたら、今度は華奢な猫足のそのチェストがひっくり返った。

「……」

この怪力は今に始まったことではない。

天界広しと言えど、チタン製のハタキで『ペッチンデール』を転がすことができる『公主』は自分くらいのもだろう、と奏欽は思っている。

そもそも『公主』は自分で掃除などしないのだ。

このやたら高価なペッチンデールも、どこかの求婚者が勝手に贈りつけてきた

品物だったはずだが、贈り主の顔も名前も覚えていない。

南海龍王を継ぐ前から、いやもつと前、陽輝と結婚する前から、求婚者は掃いて捨てるほど居た。

しかし、それらは全て『龍王家』と結婚したい男だろうと奏欽は思っていた。もし、そうでない者が居たとしたら『よつぽどの物好き』だと。

ひっくり返ったペツチンデルの半分ほど開いてしまった引き出しから、薄紅や橙色の大小の衣が広がって、床を彩ったが、その中から華やかな衣装には到底そぐわない、煤けた紙の箱が転がった。

紙の箱とはいえ、中身はずつしりと重たい。

その重量のせいで、ひっくり返った拍子に一メートル先まで転がったのだろう。

そうだ、確かにこっちはここに仕舞っていたんだった、と奏欽はもう怒るのもやめて、その箱を拾い上げた。

中身は弾薬である。

こんな物騒なもの、結局一度も利用しなかったし、貰ったって迷惑なだけと

思つたはずなのだが、なぜか捨てずに取っておいた。

最期くらい使わせてもらうか、と奏欽はさつき鏡台の下で拾ったハンドガンと併せて、小さな卓の上に置いた。

部屋を見渡せば、そこそこ片付いてきた。

大きな家具や不用品は大体処分できたし、奏欽が自宅にしているこの南海龍王家の別宅には元々そんなに物を置いていない。

世話をする侍女や給仕係も最低限の人数だけで、東の『水晶宮』や、西の『琥珀宮』に比べたら、ここはなんとも簡素な龍王邸ということになるが、奏欽は質素な暮らしが好きでやっているわけではない。

^かし^ず傳 かれて育つた奏欽は贅沢に慣れているし、あれこれ着飾るのも、無駄に広い寝台も、埋もれてしまうような絨毯も本当は好きなのである。

しかし、ある日を境に、奏欽は龍王の本拠を本来の『紅寶宮』^{こうほうきゆう}（注1）から、こちらの小さな別宅に移し、ここに引き籠もることになった。

時期的には南海龍王位を継いだ前後、である。

陽輝との離婚は関係ない。離婚したのは龍王位を継ぐ前の話だ。

南海龍王家には暗澹たる歴史があり、それを一族の長である龍王は代々『南方軍大将』の役職と共に引き継がねばならない。

が、奏欽は部分的にそれを拒んだ。

『龍王にはなる。しかし、軍属にはならない』

父の敖明には一方的にそう言い渡し、また、兄の敖丁が『南方軍大将』を引き受けてくれたことで、なんとか収まった。

しかし、南海龍王家の内情を知ってしまったことで、もう公の場に出ることができなくなった。

恥や、恐怖ではない。

強いて言えば、『なにもかも虚しくなった』のである。

そして、一カ月後。

なにもなくなつた奏欽の自室は綺麗に掃き清められ、その主はいつもより一層華やかな晴れ衣装で、東の『水晶宮』へ向かった。

(注1) 紅寶宮……南海龍王の本宮。尚、紅寶石とは中国語でルビーのこと。

8 水雲宮前の攻防

夕方近くなつて、白亜の外壁を持つ水雲宮にも、オレンジ色の陽が射してきていた。

「え？ ずっと居ねえのか？」

陽輝は、水雲宮の玄関先に出てきたいつもの女性に主の留守を告げられると、怪訝な顔をした。

スタッフの女性はもう一人、かなり若い子が居るのだが、そちらはあまり出てこない。

どうも、見た目がこれなので、陽輝のことを怖がっているらしい。

「これ」というのは、つまりイイ歳過ぎた年齢なのに、どう見ても堅気ではない格好、である。

オレンジ色に染めた髪はいつもボサボサだし、大抵よれよれのTシャツの上に革ジャンか、バイク用の上着をだらしなく羽織っているだけだ。

一応、馴染みの腕章はつけているので軍関係者だろうというのは分かるが、知らない人が見ればまさか軍大将だとは思えない。

「そうなんです。もう一月になりますけど……。崑崙の温泉がお気に召したとかで、しばらく向こうに逗留なさってるそうです」

悠花に押し付けられる形となつて、この訪問客だと必ず自分が出向かなければならなくなる紗衣さいだが、彼女は別に陽輝を怖がってはいない。

以前から何度も口説かれていて、その度に「結婚してますから」と言う結構あつさり引き下がる陽輝のことを却って好意的に見ていた。

「この春節シーズンに、呑気に仙界で温泉旅行ね……。よくまあ、そんなんで九雷が黙ってないな？」

九雷のことだから、一日沙龍の姿が見えなければ三界の隅々まで探し出して、強引に連れ帰ってきそうなのに、と陽輝は思った。

「元帥閣下もお忙しいようで、まあ、当然なんですけど緑麗様がいらっしやらない時はここには来ませんわ」

「フーン……。俺は沙龍が居なくても、アンタが居るなら会いに来るけどな」

「あら、始めました？」

紗衣はいつものことと言わんばかりに、にっこりと笑った。

見た目年齢は三十歳前後くらいの紗衣は、控えめでいて、どこか華がある。妻帯者や老齡の男性からよくモテるらしい。

水雲宮の庶務担当としては申し分なく有能な女性なのだろう、とその雰囲気からも察せられる。

「沙龍が居ねえんだったら、今夜は暇だろ？」

「私、結婚してますから」

二人の挨拶のようになってる会話のかたわらで、陽輝は、その時、黒塗りのリムジンがやや後方の視界に入ったことに注意を払っていた。

水雲宮は帝都の門外、つまり、帝都の敷地内からは少し離れた場所に建っている。

門扉に面した通りには日中もほとんど人通りはないし、あるとしたら、今の主の友人知人が遊びに来るくらいだ。

「……」

陽輝が一瞬険しい顔をしたのを見逃さなかった紗衣は、左手首にはめてある腕時計を右手で一瞬触れた。それは、ほとんど無意識の行動である。

今、自分が携帯しているもので、武器といえるものはこれしかない、と思ったのだろう。

そして、紗衣が無断進入を咎めるために前へ出る間もなく、陽輝が通るために開けたままになっていた鉄製の門扉から、黒塗リリムジンがするすると入ってきた。

「……!?!」

紗衣は警戒の顔を露にして、傍の柱に備え付けられていたインタホーンを取ると、通話相手を確かめもせずに一方向的に言った。

「防御システム、入れてっ!」

「中、入ってる」

陽輝は短くそう言うと、肩にかけてあったアーマライトを手に持ち替えた。

この黒塗リリムジンには嫌というほど見覚えがあった。

四海龍王御用達の『ロールス・ロイス』である。当然、龍王本人か、龍王の命

を受けた者でなければ使えない。

案の定、そこから降りて来た四名は、東海龍王家の私兵を表す（しかも幹部級の）制服を着ていた。黒に近いスーツ姿で、一見、どこぞのマフィアにしか見えない、と陽輝は思っている。

「お迎えにあがりました。陽輝大将」

どうやら東海龍王本人は乗ってなかったようだが、前に出てきた黒スーツの男の意外な言葉にも陽輝はさして動じなかった。

紗衣は玄関の門柱にすばやく隠れたようだ。

「ムサイ野郎と待ち合わせをした記憶はねえが？」

「我々が出した招待状、確かに受け取って頂けたと思うのですが？」

「あゝ、あれか。欠席の返事は出したぜ？ ちゃんと確認してから仕事しろよ」

陽輝の声音からしてあまり想像できないが、かなり緊迫した状況のはずだ。

いま喋っている黒スーツの男は手ぶらだが、左右の二人は車から降りた時から有無を言わず自動小銃を構えているし、もう一人は、もっと威力のありそうな対物火器をリムジンのボンネットに設置していた。

「陽輝大将と緑麗様のお二人は、『主賓』としてお招きしております。我が龍王、敖坤様より、確實にお連れせよ、と」

「ふーん……」

水雲宮の防御システムが一人くらい片付けてくれるのではないか、そして、柱の裏で様子を伺いながら待機している紗衣が一人くらい受け持ってくれるのではないか、と一瞬その可能性は考えたが、期待はしなかった。

（機械や女に頼れるか。四人なら、三秒あればなんとかなる。しかし、あの『ドラゴン』が邪魔だな……）

ボンネットの上にわずか二秒で設置された対物火器——マクドネル・ダグラス M47、通称『ドラゴン』——は、陽輝の知る限り、携行できる武器としての破壊力は天界軍でも一、二を争う。

水雲宮の玄関一帯くらい、すぐ蒸発させられるだけの威力があるのだ。

（敖坤の野郎、大層なもんを私物してやがんな）

といっても、陽輝もあまり人のことを言えた義理ではない。

「武器をお預かりしましょう」

物腰柔らかかに黒スーツの男が言うと、陽輝は舌打ちしながら手にしていたアマライトを彼らのほうへ投げた。

このアマライトだって、西方軍の四半期分の予算を全部つぎ込んで作らせた改造版だ。

用心深く、黒スーツの男達はそのアマライトに触れようとしないが、別にアマライト自体に細工はしていない。

「結構。では、緑麗様を呼んで頂けますか？」

「……水雲宮にも『招待状』を出したのか？」

「さて。出しはしましたが、ご本人に届いているかどうかまでは分かりかねます」

「わりいが、あいつはいま留守だ」

「水雲宮の一角がなくなってからのほうがいいですか？」

黒スーツは陽輝の言葉を聞いていない。

「といっても、ホントに居ねえんだがな……」

その時、玄関より遙か上空の外壁のあたりから、鈍い音と光が迸って、対物火

器を構えていた射手の男の体を貫いた。

声もなく、その男は絶命する。

「……!？」

同時に陽輝も動いた。懐のハンドガンを抜いて、左右の自動小銃を構えた男二人の額の中央を撃ち抜く。

無駄弾を使うつもりはなかったし、一発で黙らせるとしたら、そこしかなかった。

が、その二人を撃った後で、リーダー格の男に対処するのでは遅い。

それも承知で、多少のリスクは覚悟の上だったが、男が自身の武器を取り出して陽輝に発砲した弾は大きく反れた。

といっても、右肩は貫かれた。

心臓から大きく反れた、というだけの話だ。

「紗衣、よくやった」

黒スーツの男は、背後から細いものを首にまきつけられ、今にも泡を吹きそうなほど、締め上げられている。

彼の護身用のハンドガンは、地面に転がっていた。

「殺しますか？」

紗衣は手加減をしていない。

あと、ちよつとの力を入れれば、男はくびり殺されるだろう。

「いや、ちよつと聞きたいことがある」

陽輝がそう言うと、紗衣はほんの少しだけ力を緩めた。

それでも、まだ黒スーツは喋れるような状態ではない。半分飛び出した目で苦しんでいる。

「敖坤は本気で俺達と喧嘩するつもりなのか？ お前らの目的はなんだ」

「……っ」

このままでは喋れないだろうと思ったのか、紗衣が更に力を緩めた。ワイヤーは完全に紗衣の腕時計に納められ、黒スーツは座り込んで咳き込んだ。

しかし、黒スーツは観念したわけではなかった。

酸素の行き渡っていない体で、陽輝の質問に答えるどころか、携帯電話くらいの大さきの機械をポケットから取り出すと、即座になにかのスイッチを押した。

紗衣はそれを、男の手ごと蹴り飛ばしたが、遅かった。

リモコンだったのだろう。対物火器が発射され、水雲宮の一角に着弾すると、白と灰色の煙がたちこめた。

「ゲ……」

陽輝は呆然とその一角を見上げながら、「ハイテクだねえ」などと呟いていた。

幸い、あの辺りには誰も居ないだろうが、もし従業員が巻き込まれていたら、と考えると、紗衣は怒りを覚える。

「待て」

紗衣が、傍に落ちてあった銃を拾い、蹴り技を食らわした、もはや動けない男に留めを刺そうとすると陽輝がそれを制した。

「コイツは西方軍で預かる。俺の部下が来るまで、ここに拘束しておいてくれ」
「はい、分かりました」

宅急便の受け取りをするように返答する紗衣は、やっと溜めていた息をつく。人の生死を嫌というほど見てきた目だな、と陽輝は思った。

ただの庶務担当ではないだろうと思っていたが、ここまで凄腕だとは思わなかった。

「他のスタッフに怪我がなきやいいんだが」

陽輝が、まだもうもうと煙をあげている上空の一角を見ると、インターホンが鳴った。

紗衣がそれを受けると、料理長の怒声がいきなりした。

「コラー！　今の地震で生簀が割れてタコが逃げるわ、バカ弟子はそれを追っかけてすっ転ぶわ、悠花はコーヒーかぶるわ、で、厨房は滅茶苦茶だぞ！」

「ごめんなさい、でも、もう終わりましたから」

紗衣の横顔を見て、陽輝は大丈夫そうだな、と思った。

「ところで、さっきのしよっぱなの一撃な。あれ、本来は衛星用の自動迎撃装置の一部かなんかじゃないか？」

陽輝が転がっている死体を確認しながら紗衣に聞いた。

と言っても、その『しよっぱなの一撃』にやられた男は原型も留めていなかったのだが。

ああも正確に、人体のみを自動で貫けるものは、陽輝とて、南方軍の研究施設のプレゼンでしか見たことはない。

火雲宮の本殿にだって、まだ旧式のものしか設置されていないのが現状だ。

「ええ、まあ……。緑麗様がここに戻ってこられた折に、元帥閣下が最新のシステムを設置してくださったんです。十年分の軍備予算をどうやって回したのか知りませんが……」

紗衣が苦笑気味に言うので、陽輝も笑った。

「アイツもどんだけつぎ込んでんだか……」

ひとまずは肩の止血を先に済ませた。

『ドラゴン』が撃ち込まれた跡は、まだ高く煙を上げている。

これが狼煙になっていることを、陽輝も紗衣も知らなかった。

陽輝と紗衣が水雲宮の門前で灰色の煙を見上げていた頃、四神府の一室から、夜空を紅く焦がす炎を見て、木佐は呟いた。

「火雲宮には花火工場まであったのか」

「それ、冗談なんですか……？ あれは天界軍の火薬倉庫のある方向ですよ！」
曹昌は怯えた様子で言った。

電話は一切不通、部屋の中は真っ暗だし、外は派手な火事になっているし、とても正気ではいられない気分だった。

こんなことは、経験がないのだ。

『超A級の鉄壁の護り』と言われている帝都においては、長い歴史の中、ここまでたどり着けた外敵など居ないし、曹昌は戦争を体験していない。

平和な数千年間を、のんびりとした事務仕事で過ごしてきただけである。

木佐が称した『花火』の如く、帝都上空の夜空には次々に、赤や黄色の炎が上がっている。

「つ、通信網は完全に死んでます。緊急時のラインもつながりません！」

どの行政部門とも連絡が取れないし、組織的に仮の上官となっている元帥位からの指示もない。

なら、ここは独自に行動をするしかないな、と木佐はようやく立ち上がった。

丁度その時、緋色の髪の赤帝君が、微かな『火行』の氣を発光させながら木佐のオフィスにやって来た。

闇の中に、この緋色の光はよく映える。

赤帝君は恐らく木佐と同じ結論になったのだろう。

「真武君、ここでこうしていても埒が明かない。様子を見に行く。一緒に来てくれるか？」

「勿論だ。準備はできているよ」

木佐は、『一文字助宗』と『七星剣』のどちらを持っていくか迷ったが、少し大きめの七星剣のほうを手を取った。

9 歌を忘れた龍

こちらは乾元山の太乙の庵である。

九天玄女に『冬眠中』と診断された沙龍は、その後、ずっと眠り続けていた。

あの後、すぐに天真が来てくれて、あれこれと試したようだったが、一向に起きる気配はない。

「普通、周囲の温度を上げて、体温を上げてあげれば、目覚めるはずなんですけどね……」

天真はそう言いつつ、やはり沙龍の体の異変というものを如実に感じていた。ずっと沙龍の専属医みたいなことをしているので、なにかしら変化があればすぐ分かる。

体重が一キロ増えたとか、貧血気味といった種類のものは言うに及ばず、例えば、昨日なにを食べたとか、本人にとっては知られたくないようなことまで、天真には同じように分かるのだ。

(そういえば……)

天真はとあるシーンを思い出していた。

それは、一年ほど前の火雲宮の宝物殿、玉京宮で、沙龍の死した体を『蘇生』した泰山府君の技である。

あの時、泰山府君はなにかをしたはずなのである。

しかし、目の前で見ていた天真にはそれがなんなのか、分からなかった。

『蘇生』は、誰もが簡単に行えるような技ではない。

天真が知る限り、それが出来るのは、『死』と『生』を司る神たる、泰山府君ただ一人である。

厳しい条件を揃えれば、天真も出来ないことはないが、だとしても、多大な

『代償』が要る。

(『代償』……、もし公主があの時なにかしらの『代償』を払った、または今後払わなければならぬのだとしたら、それは一体なんだ……?)

天真は、青白い顔をしながらもすやすや眠っている沙龍の傍で、そんなことを考えていた。

沙龍の眠るこの一室は、真夏のような気温に設定され、体温も三十六度台を保つように常に天真が気を配っている。

庵の主である太乙は、

「狭いけど、それでいいなら勝手に使って〜」

と、九玄や天真の滞在も快く承知してくれた。

元より、この自称科学者は一日中自分の『研究室』にこもっているのです、来客が居ようが居まいが、あまり関係ないらしい。

太乙が自分で言っていたように、確かにこの庵は狭い。

屋敷とは到底呼べない建物で、太乙がメインに使っている『研究室』を除けば、客間が一つと、物置になっているような部屋が二つしかない。

台所や風呂場もかなりこじんまりしたものが一つずつあるだけだった。

しかし、天真は、その狭い屋根の下での共同生活が楽しくてしょうがない。

初診だけして帰ってもらおうつもりだった九玄は、なぜかそのまま一月も居座ってしまった天真に対し、なんとも言えぬジレンマを感じた。

帰れとも居てくれとも言えないからだ。

こういう場合は一番頼りになる人物であることは間違いないのだが、かといって、口説きタイムが始まるとうんざりしてしまうのである。

狭い庵で飛龍や太乙の目もあるし、そうしよつちゆう口説いてくるわけでもないのだが、にこにこしながらあの五分は終わらない美辞麗句を並べられると、「またか……」となる。

九玄はたまに防衛庁に戻ったりしていたが、基本的には沙龍の傍から離れなかった。

口に出さずとも、一番心配しているのは九玄なのである。

九雷が喧しく沙龍の居場所を問い合わせてきそうな気がしたので、そこら辺は上手く先回りして、水雲宮に連絡だけは入れておいた。

九玄と太乙は、今、狭い台所で四人分の夕飯の用意をしている。

ほとんど料理のできない九玄は、野菜を洗うのを手伝っているだけなのだが、それでも、居候の身なのでこれくらいは文句言わずにしなければ、と思っっている。

「なんか、急に賑やかになっちゃって、哪咤が居た頃を思い出すよー」

太乙が穏やかな顔でそう言うと、九玄は黙った。

「……」

「大丈夫だって。きつと、目覚めるから」

太乙は、九玄が黙ってる理由が、沙龍を心配してのことだろうと思ったが、九玄の胸の内はもう少し複雑だ。

「沙龍がここになにをしに来たのか、知ってるか？」

当然ではないか、本人から『仕事』は請け負ったんだし、と太乙は思ったが、九玄の言葉は『その理由を知ってるか』という意味だった。

「沙龍は、ずっと自分の寿命を気にしている。それを私に言ったことはないが、きつとそうなんだろうと思う」

「それで？」

「だから、仙骨を持たない生身の自分が、他に長寿を得る方法はないか、と一縷の望みをかけてここに来たんだ」

「そうなのか」

「例の焦げた紙片の復元は、できたんだろう？ お前はそれを読んだのか？」

「うん、まあ、一応ね」

「そうか。で、沙龍の望みは叶うのか……？」

「うん、本人が望めばね——と、あのレポートにも書かれてあった」

太乙は、九玄からあのレポートがどういったものかということ聞いていた。

『国家機密』らしいが、科学者にとって政治は関係ないし興味もない。

「ただ、具体的な方法はなにも書いてないんだよね」

「フム……」

二人が話す台所に、天真がやって来て、妙なことを聞いてきた。

「なにか物騒なことでも起こってます？」

「……？ いや？ 別に喧嘩してるわけじゃ……」

「そうじゃなくて。なんかさつきからネットも繋がらなくなっちゃったし、職場への電話も不通になってるし。テレビで仙界チャンネルだけは見れるから、天界だけがおかしいのかな？」

「……？」

九玄はもう職業病のように、自身の端末で天真の言っていることを確認し、崑崙

防衛庁に連絡を入れていた。

「天界側になにか緊急の情報はないか？ 電気系統が全て落ちているらしいが」
部下の返答を聞いている九玄の顔が、段々険しくなっていた。

太乙と天真は、なにごとか、と顔を見合わせる。

同時に、飛龍が客間でなにやら騒いでいるのが聞こえた。

「どうした！ 飛龍、なにがあった!？」

九天玄女が客間に駆けつけると、慌てふためいている飛龍が、ぐるぐると円を描くようにただ走っていた。

「どどどど、どうしよう！ 緑麗が消えた——！」

「はあ!？」

見ると、沙龍の体にかけていたはずの毛布はぺしやんこになっていて、一人一人の体積が確かに見当たらない。

が、九玄は、

「居ないわけないだろう！」

怒鳴りながら、その毛布を勢いよく剥いだ。

その寸前に、なにかが動いた気がしたが、あまり気にしなかった。

「……」

「……」

毛布を剥いだ九玄は、そのまま固まって、それを涙目で覗き込んだ飛龍も同じように動かない。

「ど、どうしたの？ 沙龍君は？」

「目が覚めてトイレにでも行ってるんじゃないですか？」

太乙と天真も、遅れて駆けつけ、二人の後からそこを覗き込む。

「……!?!」

「お前……、どこから入ってきた」

九天玄女が、まさかの可能性を否定しながら毛布を引き剥がした手をそのままに、問う。

「い、いやあ……、『この子』が、沙龍君なんじゃないの……？」

太乙は、誰もが考え、誰もがあまり考えたくないことを口にする。しかし、当然、天真には分かっていた。

どんな姿になろうと、その魂魄の輝きは変わらないのだ。

常に、色にして黄金を放つ沙龍の魂魄は、普段、本人は意識していなくとも、圧倒的な『土行』を撒き散らしている。

「ウキユ？」

沙龍の代わりに、小龍を黄色くしたような小さな龍がそこに居て、四人を不思議そうに見上げていた。

「で、どーすんだよ…… “これ” ……」

九天玄女は、小さな龍が丸テーブルの上でガフガフと肉まんを食べているのを見つめながら、誰にともなく言った。

鈍い黄色の体毛で覆われたその小さな龍は、よくよく見ると、小龍とは形状が違った。

まず、背中には二枚の翼があるのだ。

しかし、妙なことに飛べないらしく、移動する時は二足歩行で歩こうとする。

そして、角がないことも、小龍とは違う特徴だった。

「まあ、元気になったみたいだから、いいんじゃない？」

太乙は呑気にそんなことを言っているが、九玄は気が気ではない。

天真に言わせれば、間違いなくこの小さな龍は沙龍なのだそうだが、言葉が喋れないようなので、九玄は未だ半信半疑だった。



試しに呼んでみる。

「沙龍——」

「ウキユ？」

一応、食べるのをやめ、振り向いたが、九玄が後の言葉を続けないので、また肉まんに顔を突っ込み始めた。

九玄は、また呼んでみた。

「エリザベス——」

「ウキユ？」

同じく、その小さな龍は食べるのをやめ、振り向いた。

「こちらの言葉も理解してないようだな。呼べば振り向くって、動物並じゃないか」

九玄は唸りながら、チラッと横を見た。

騒ぎすぎて疲れたらしい飛龍は、ソファアーに一人ポツンと座って大人しくしているが、この異常事態になにか思うところがあるらしい。

さきほど、九玄が崑崙防衛庁に確かめた情報では、『帝都の全域に渡って停電

中。不穏な火柱の類も確認済み』とのことだった。

天界側の事情はよく分からないのでなんとも言えない段階だが、天真は職場が気になるので帝都に戻る、と、いま準備をしている。

九玄は肉まんをがつついている龍を太乙に任せて、ソファーまで行った。

「どうした、疲れたのか？」

「……」

飛龍は答えない。ただ、遠くの一点をぼんやり見つめている。

「お前も、帝都が気になるんだったら、ついでに天真大夫を送ってやってくれ」

「……」

「沙龍なら心配はない。私と太乙がここでしばらく世話を……」

「いや、戻るなら、緑麗も連れていく」

「しかし……」

「そうしなきゃ、いけない気がする」

「どういう意味だ？」

「分からない。ただ、なにかザワザワしてる。すごく嫌な感じだ」

飛龍は言葉でこういうことを説明できるほど、インテリではない。が、九玄には飛龍がなにかしら帝都の異変を感じ取っているのだろう、ということとは分かった。

「しかし、帝都でなにかが起こっているとしたら、あの状態の沙龍を連れて行くのは危険だろうか？」

「そうかもしれない。だが、俺は帝都に戻らなくちゃいけない気がするし、緑麗をここに残していくことはできない」

「そうか……」

九玄は、すっかり支度を終えた天真が客間に戻ってきたのを見ると、

「なら、私も一緒に行こう」

「いいのか？ 九玄はあまり境界越えのできない身だろうか？」

「口実や言い逃れはなんとでもできるさ」

九玄を乗せた青鸞と、天真を乗せた飛龍が乾元山を後にして、天仙界の境界ラ

インまで来た頃、

「確かに、五行が非常に乱れてる感じがしますね……」

天真がそう呟いた。

東宮であつた頃は、今よりもかなりはつきりとそういうものを感じ取ることができた。

五行の力を全て支配し、行使できる『天帝』。

その候補だった天真には、未だに、微かにだが五行の流れを感じることもできるのだ。

「……？」

懐に納まっている小さな龍が顔を出し、天真の顔を見上げた。

「大丈夫ですよ、公主。ちゃんと元に戻してあげますからね」

天真が慈愛の微笑みでそう言うと、龍は理解したのか、顔を引っ込めた。

「青鸞、無理するな」

飛龍のスピードになんとかついていっている青鸞だが、龍王家のプリンスと霊獣では、やはり格が違う。

遅れがちになる青鸞は、フル稼働でかなり無理をしているようだった。

そして、帝都が遠目で確認できるようになると、九玄も天真も、そして飛龍も息を飲んだ。

夜のこの時間、普段なら、天空の星空のように白い光が密集しているはずなのだが、今は帝都のエリア全体に、禍々しい赤い色が点在していた。

闇に立ち上る赤黒いもの——、あれは、明らかに作為的な火事であろう。

「帝都が攻撃されてるのかっ？ 一体、誰に——」

飛龍は、九玄の『誰に』という言葉にこそ、自分のザワザワ感の答えがあると直感した。

「そうだ。これは『同族』の気配。龍王家が、帝都の敵になっている——!？」

「まさか君の父上が？」

「いや、違う。親父も奏欽も、この悪意の中には居ない……。チツ、敖吉か！」

『敵』の正体が分かったのか、飛龍は更にスピードを上げて、帝都に迫った。

「敖吉……。北海龍王か。確か、ブラックリストに名前も出てこないような小者だったような……。？」

九玄も呟いて、飛龍の後を追った。

夕方近くになって起こった帝都の停電と、それに続く、各所の爆破炎上は、城下町に住む人々を混乱に陥れた。

勿論、それは朱雀門以北の行政エリアと軍事エリアも例外ではなかったが、幸いにして行政エリアは夕方にはもう官吏達は居なくなっているし、軍事エリアに常勤しているスタッフというのは訓練された兵士なので、比較的すばやく対処できた。

陽輝は、九雷を見つけて聞きたいことがたくさんあったが、電話が不通だったのでそれも叶わず、五行稼働のバイクで帝都の様子を見に来た所だった。

南門前は火事から逃げてきた市民達で溢れている。

バイクのスピードを落として、逃げてくる人の流れとは逆行しながら進む陽輝

に、南門をくぐった先の大通りが見えてきた。

「おいおい……、なんだありや？」

そこには、奇妙な風景が広がっている。

停電の中の暗闇——とはいえ、あちこちの火事のせいで視界はいつもより明るいくらいだ——を、黒いロボットのようなものがぞろぞろと、幾つかの部隊を成して、徘徊しているのだ。

分厚い甲冑を着込んだ人——に見えなくはないが、その直線的でスローな動きはどこかぎこちない。

その甲冑の一部隊の前に、一般兵らしき若い男が立ちふさがって、背後の市民を逃がそうとしている。

が、明らかにその兵士は腰が引けていた。

軽く二メートルは越える甲冑が、兵士に向かって腕を振り上げる。

「チッ！」

陽輝はバイクを一気に加速させ、そのまま前輪を持ち上げると、鈍い動きで兵士を殴りつけようとした甲冑を十メートルほど吹き飛ばした。

「……っ？」

「迷ってる場合か！」

兵士はやや短身のライフルを握り締めながら、それを敵に向けようとしていないのだ。

陽輝は自分のアーマライトでもう二体の甲冑も吹っ飛ばしていた。

「た——、大将!？」

陽輝の知らない顔だった。だが、北方軍の徽章きしよろを着けたその年若い一般兵のほうは、陽輝の階級章を確認するまでもなく、すぐに敬礼した。

良くも悪くも陽輝は有名人なので、すぐに誰だか分かったのだろう。

「その自動小銃は飾りか!？」

「まずいな、と陽輝は思った。

通信手段を絶たれるというのは、こういうことである。

『命令』がなければ、彼ら一般の兵士達は帝都内では容易に発砲できないのだらう。

他の四方軍ではその辺りの教育は徹底しているらしい。

「全く。誰だ、俺の許可なくキャンプ・ファイヤーやってんのは。いや、今はそんなことどうでもいい。非常ラインを復活させるのが先だな。おい、その――」

「ハッ、自分は北方軍第三部隊所属、董仲とうちゆうであります！」

「名前なんて聞いてねえよ。だが、俺が今から言うことに答えられたら、覚えてやってもいい」

「は、はい」

「現在、帝都は全域に渡って停電中。さらに各所でテロ行為を行っている正体不明の甲冑軍団を確認。無線はどうやら五行術の妨害により、使えない。こういう場合は、どうするんだ？」

「え、えーと……、まずは通信手段の確保。上官に指示を仰ぐことが不可能であれば、各自の最良と思える判断の元に行動せよ。場合によっては発砲も――あ」
言うてから、若者は気付いたらしい。

自分がそのどれもしていないことに。

「ま、ギリギリか。俺んところなら、そんだけじゃ失格だが、王霊君おうれいくん（北方軍大

將)に後で嫌味言われるのもご免なんで、勘弁してやるよ。とりあえず今は俺が指示を出す。いいか、よく聞け、董仲」

「ハッ、ハイ！」

「甲冑は頭を狙え。多分、それ以外じゃ倒せねえ。しかし、お前のその制式採用銃じゃ威力が心許ないな。倒せなかったら、無理に倒す必要はない」

「はい」

「第一目標は、『市民を無事に帝都の外に誘導すること』だ。それで、お前もなにをすべきか大体分かるだろう」

「わ、分かりました！」

「俺はこれから軍部内だけでも通信ができるようにしに行く。まあ、期待しないで待っててくれ。上官と連絡が取れるようになったら、その上官の指示に従え。」

「それで、生きてたら、後日、それを知らせに来てくれ。じゃあな」

「それだけ言って、陽輝は大通りを北上して行った。」

途中で何度か黒い甲冑に邪魔されたが、それをバイクでど突きつつ、なんとか朱雀門までたどり着くと、そこには知った顔が二つあった。

「真武君!? それに、赤帝君か」

「陽輝大将——」

木佐の端整な顔が振り向く。

「なにしてんだ? 花火見物か?」

「……なわけないでしょう。こっから先、なぜか急に入れなくなっただんですよ」
木佐は、コンコンと、朱雀門の門柱を叩いた。

「やっぱな。『八方結界』か」

陽輝は嘆息した。

『敵』が誰なのかまだ分からないが、帝都に奇襲をかけたというのなら、敵の狙いは帝都でも一番重要な場所であり、重要な人物ということになる。それは、この朱雀門の先にある、火雲宮本殿、玉座の間であり、天帝その人——だろう。だから、この緊急事態に、誰かが、恐らく火雲宮守護のために『八方結界』を敷いたのは、最終的な、やむなしの判断だったに違いない。

この結界は、諸刃なのだ。

対象物を強固に護りはするものの、外部からの五行の力を全て受け付けられないの

で、五行の素養を高く持つ者にとっては、余計、分厚い壁となってしまう。

火雲宮の敷地内にある四神府から、城下町の様子を見に来ていた木佐と赤帝君が、火雲宮の敷地に戻れなくなってしまったのは、そういうわけである。

「まあ、逆に考えれば、本殿は無事ってことか……」

しかし、現在、帝都は、この朱雀門を境にして、北側の火雲宮と南側の城下町が、完全に分離してしまったことになる。

これでは、司令部からの命令は届かない。

状況は最悪である。

「完璧な防御システムを誇る帝都が、こうも簡単に攻撃されるということは、これは内部の犯行ということですか？」

「だろろうな」

赤帝君の問いに素っ気なく答える陽輝は、自身の愛銃であるS & W M 29に弾を装填している。

8インチという長い銃身を持つこの銃は、素人にはかなり使いにくそうに見えるし、今時、自動装填のできないこの旧式のリボルバーを、なぜ陽輝が使い続け

ているのか、赤帝君はずっと不思議に思っている。おそらくは、そのデメリットを覆すだけのメリットがあるのだろうか……。

「あの甲冑には見覚えがあります。南方軍の研究施設が関係しているのでは？ 貴方はなにか御存知でしょう、陽輝大将」

「ほー。そりゃいいこと聞いた。ラボが絡んでるのか。俺は初めて見たぜ？」

「軍部の動きくらい、大将として把握しておられないのか」

「って言っても、四方軍は完全に独立してるからなー。全軍把握してんのは、九雷だけ——って、そういや、アイツはなにしてた。こういう時のためのハラグロ元帥だろうが。あの役立たずめ」

と、陽輝が言った時、頭上に、ふよふよと漂うように小龍が着地し、いいタイミングで九雷の声がした。

「悪かったな、腹黒の役立たずで」

どこかで聞いてたんじゃないか、と、思えるような展開である。

陽輝が面倒臭そうに小龍の首根っこを掴んで、自分の目の高さまで持ってくる。と、その小龍の口からまた九雷の声が聞こえる。

「時間がない、陽輝、よく聞け。敵は予定を繰り上げたらしい。北と東の間でなにかあったのかもしれない。向こうも多少混乱しているようだ」

電話や無線が使えなくても、唯一の連絡手段として、小龍はこういう時に役に立つ。

「仲間割れか？ それに、どうも南も絡んでるな？ 今、ラボの実権握ってんのは先代だろ？」

「恐らくな」

「龍王達の目的は一体なんなんだ。まさかとは思うが、クーデターか？」

「そのままさかだ。ついさきほど、北海龍王敖吉からの宣戦布告があった。四十八時間以内に、今上帝の退位と主権奉還を要求する——とな」

「チツ、小者が大それた夢見てんじゃねえよ。それで？ お前のプランはどうなってる？」

「陛下も火雲宮も無事だが、八方結界を敷いたせいで、城下町側に兵力を送れなくなってしまった。今、城下町側に居るスタッフだけで鎮圧をしてもらうしかない。俺の読んだ所、数えるくらいしか居ない気もするが、なんとかやってみてく

れ」

「おいおい、笑えねえよ。『数えるほどしか居ない兵力』で、停電をなんとかして、あの甲冑どもを撃退しろってことか」

「お前ならできるだろう。たまには本気を出して、給料分の仕事くらいしてくれ」

九雷が珍しく自分を褒めるので、陽輝は苦笑した。

このおだてに乗せられて、何度死地に行かされたことやら。

「給料分じゃ足りねえな。危険手当、出るんだろうな？」

「西方軍には、来年度の特別予算も回してやる」

「もう一声欲しいな」

「強欲は身を滅ぼすぞ。……まあ、次に生きて会えたら、お前が欲しがってた、パイソンをやってもいい」

九雷がそう言った時、小龍の目が激しく瞬いた。

そろそろ、限界のようだ。

「分かった。それで手を打ってやる。……いいんだな？ 俺に任せると、鎮圧は

できても、帝都の半分なくなるかもしれないぜ？」

「ああ、任せる」

そこで通話が切れた。

木佐と赤帝君は、この朱雀門を目指してゾロゾロと集まってくる甲冑を各個撃退していたが、同時に顔を上げた。

上空にかなり大きな羽音がしたのである。

「真武君！ お揃いか」

「九玄さん!？」

青鸞に乗った九玄が朱雀門前に降りて来た。

「天真大夫も一緒だったんだが、この惨状を見て職場を開放しに行った。怪我人の収容を始めている」

九玄が軽く説明すると、陽輝は一回頷いてから、思い出したように聞いた。

「沙龍は？ 一緒じゃないのか？ 俺はてつきり九玄姐さんと温泉ツアーでもしてんのかと思ってたが」

「あゝ、えーと。まあ、居るには居るんだが……」

珍しく歯切れの悪い物言いをする九玄を不思議に思ったが、悠長に会話をしている時間はあまりなかった。

さつきから、続々と鈍い動きで迫ってくる甲冑部隊を相手にしながらのやりとりだ。

「キリがないな。元を断たなきゃ駄目ってことか」

七星剣で甲冑を薙ぎ倒した木佐が呟くと、また遠くで火の手が上がった。

「火事を消すのが先か。いや、しかし、そうすると真の闇になってしまふ——」
皮肉なことに、この停電の帝都で唯一、灯りとなっているのがこの各所の火事なのである。

「城下町側には、九雷の言う通り、ほとんど兵力はないだろう。が、皆無ってわけでもない」

陽輝はさきほど会った一般兵の若者や、大通りを北上する間に何度か見かけた天界軍の軍服を思い出した。

四方軍のスタッフというのは非常時でない限りほとんどは帝都に詰めている。

しかし、現在の勢力関係を考えると、敖坤率いる東方軍は敵とみなさなければならぬだろうし、敖丁率いる南方軍も『どちら側』なのかはつきりしない。そもそも、敖丁自身は帝都に居ないはずだ。

そして、王霊君の北方軍は、唯一、四方軍の中でも『帝都に常駐していない部隊』なので、休暇中や留守番のスタッフくらいしか居ないだろう。

残るは、『愚連隊』と称されている陽輝の西方軍だが、これも大多数が火雲宮の八方結界の中に閉じ込められているとしたら、あまり期待はできない。

しかし、陽輝は、結界内に残ってる部下はほとんど居ないだろうと踏んでいた。

夕方にもなれば、すぐ歓楽街に出向くような輩ばかりなのである。

これらのスタッフをかき集めて、指揮さえできれば、甲冑軍団はすぐ撃退できる——、そう考えた陽輝は、もう自分の行動を決めていた。

「真武君、赤帝君、九玄姐さん！ 力を貸してくれ。まず、この厄介な無線妨害をクリアにする」

叫びつつ、陽輝は、一体の甲冑を蹴飛ばしてバイクに乗り込んだ。

「どうやって？」

赤帝君が慌ててそれを引き止めるように言った。

「簡単だ。帝都を囲んで、『相剋フィールド』を作ってる奴らが居る。そいつらを潰すだけよ。俺は、西へ行く。あとの三方は頼むぜ——」

残された三人は、しばし啞然としたが、

「なら、私は東に行こう」

九玄が残った木佐と赤帝君の顔を見てすぐに青鸞に乗り込んだ。

その判断は正しい。

「なるほど。私に南に行け、ということか。道理に適ってる。……しかし、真武君は時間がかかりそうだな」

赤帝君がそう言うのも、火雲宮の北に向かうには、この八方結界を迂回して北上しなければならぬからだ。

が、木佐は赤帝君よりも理論的な見方をしていた。

「いや、行く必要はないと思うね。『相剋フィールド』はもともと城下町側にか作用していない。でなければ、火雲宮以北に『八方結界』は張れない。元々、大極殿を越えて北上するリスクは犯してないんだろう」

帝都の北端とは、つまり火雲宮の北端でもあり、『玄武門』という重厚な門で半永久的に閉ざされている。

平時でもそこに辿り着くことは相当難しい。

なぜなら、本殿以北は皇族のプライベート・エリアであり、警備は帝都一厳重であるからだ。

勿論、帝都の外壁を迂回して、玄武門に到達するだけなら簡単だが、この重厚

な玄武門を北から南へ通過することのできる者は、ただ一人しか居ない。

北の守護者たる黒帝玄武佑君——、木佐小次郎だけである。

天帝は、この玄武門を南側から北に抜けることはできる。しかし、それは火雲宮の放棄と逃走を意味するのだ。

「だから『相剋フィールド』の北端は自動的にこの朱雀門ということになる」

一見『南の第一正門』として有名な朱雀門がなぜ『北端』になるのか、と調べていては、方位学を学ぶ資格はない。

立つ位置によって北が南になり、東が西になる、そういう柔軟さが必要なのである。

「日が浅いのに、大したもんだ」

赤帝君はそんな木佐を賞賛し、自分は『南の第二正門』——通称、帝都の南門——に向かった。

その緋色の後姿を見送りながらも、木佐はさて次にどうしようか、と思った。

「といっても、どこにどんな媒介が隠されてるのか、見当もつかないんだがな…

…」

改めて、十メートルはある門柱を見上げながら、呟く。

四方将神としての自分は、まだまだ未熟だ。

前世の記憶も知識もないし、最近やっと『水行』を自由に扱えるようになったものの、陽輝が言っていた『相剋フィールドを作ってる奴』は、少なくともここには居ない。

なら、『媒介アイテム』があるはずだ、と思うのだが、それがどこにあるのか分からない。

「まあ、ダメ元でやってみるか」

七星剣を大地に突き刺す。そこに自分の持つ『水行』の力を全て解放させた。

「雨——？」

九玄が振り返った時、朱雀門付近に巨大な水柱が立っていた。

それが降りしきる水滴となって、火事を幾つか鎮火させていたが、九玄はそれを誰がやったのか、すぐに理解した。

(真武君か——)

どうせ使えないだろう、と、切ってあった無線機のヘッドセットのスイッチを入れると、作動音がする。

天界軍の周波数に合わせると、雑音混じりだったが、声のようなものも拾えた。

『相剋フィールド』の一角が崩れたことで成果が出始めたようだ。

(もう一角落せばかなり使えるようになるな……)

青鸞を帝都の東端、春明門しゅんめいもんに向かわせた九玄は、そこにあるものがなんなのか、おおまかに察していた。

九玄は、この帝都騒乱の全容を知らない。

誰がなんのためにやってているのか、といえば、『どこかの馬鹿』が『くだらない目的のために』という理解でしかない。

しかし、飛龍の様子から、龍王家が絡んでいるのだろうということとは分かっていた。

なら、東に居る可能性が高いのは東海龍王本人だろう。

それは、西の金光門きんこうもんに向かう陽輝にも理解はできた。

要注意は北と東——、という当初からの了解事項である。

しかし、誰が東海龍王と直接対決をするにしても、あの気弱な敖坤に相当の変心がない限り、自分達が負けるはずはないと思えた。

「西は空からか——」

煌びやかな金光門の辺りには、人影はなかった。それも当然かもしれない。

西と南は無関係——。それが九雷と自分の理解だ。

といっても『南』に関してはそうとも言いきれないな、とあの甲冑軍団を見て思う。

「さてと。媒介アイテム探すのも面倒くせえな」

陽輝は木佐と同じように、『相剋フィールドを作り出している媒介よりも上位の力でそれを消し去る』という方法を選んだが、具体的なやり方は全く違った。

改造アーマライトの、五行術撃破用の弾丸を装填して、ぶっ放したのである。

当然、門自体がなくなった。

赤帝君は、最後になった。

朱雀門で迸る『水行』を感じ、さらに、西では物騒な爆発があり、東は静かに解除されたようだったが、これでほとんど『相剋フィールド』は崩れたようなものだ。

つながった通信で、陽輝は『そっちは放って置いてもいい』と言ったが、自分に課せられた仕事はまっとうしなればなるまい、と赤帝君は生真面目に思った。

が、帝都の南門は押しかける市民達で溢れていたし、甲冑軍団も多く徘徊しており、それを退治しつつ近付くにはかなり時間がかかった。

「……？」

赤帝君は、途中、この甲冑達がなにかを探しているのだと気付いた。

彼らは、逃げ惑う市民達を襲いながらも、目当ての人物じゃないと分かると、

それを打ち捨て、すぐに別の場所へ行こうとする。

結果として、命を落す者も、助かる者も居たが、すなわち『目標以外を殺傷するな』というプログラムはされていないようだ。

(あの技術力を誇るラボが、こんな雑な機械を作るのか……?)

赤帝君はそう思った。

賛否両論あれ、南方軍の研究施設はずっとその高い技術力を評価されてきた。

その責任者を兼ねる南方軍大將は代々その技術力を各軍に提供してきたのだが、当然、一番優れたものは自軍で使用する。

こんな無差別殺人しか能のないロボット兵を投入する意図はなんだ、と思わずにいられなかった。

そこに見え隠れするのは、やはり『狂気』なのだろうか。

南門の真下まで来ると、赤帝君は自身の五行力の高さですぐに媒介アイテムの場所が分かった。

脇の地中に気配がある。そう深くはない場所だ。掘る必要もなかった。

「こちら赤帝君。任務完了した」

見つけた呪符を手のひらで灰にした赤帝君は、そう報告を入れた。

九天玄女が春明門に着いた時、そこには予想を遥かに超えたシーンが展開されていた。

「……っ!？」

一人の男が血まみれの大きな刀を持ち、足元に倒れている男をじっと見下ろしているという風景である。

九玄はその二人を知らない。

が、冷たい瞳のまま立ち竦んでいるその男こそ、東海龍王敖坤であろう、と思った。

東海龍王家の者は、皆、『木行』のスペシャリストと言っている。

その男からもマイスター・クラスの光彩が感じられた。

「崑崙の防衛隊長殿——ですね」

意外にも声を発したのは男のほうからだ。こちらを見もせずと言う。

九玄は一度息を飲んでから、やや顎を上げて言った。

「いかにも。そちらは東海龍王敖坤殿とお見受けする。帝都がテロ攻撃を受けている最中、一大将でもある貴方は、一体ここでなにをしておられるのか——。場合によっては、仙界の外交使節としてでなく、私個人の義の下に、貴方を拘束する」

九玄が自分の大刀に手をかけ構えると、敖坤はやつとまともに九玄のほうを向いた。

しかし、その憂いを帯びた動作は、とても友好的には見えない。

「ご心配には及びませんよ、九玄殿。私はこの裏切り者を始末しただけです」
敖坤が足元の死体を一蹴すると、うつ伏せだった男の体が一転して、仰向けになった。

白目を剥いたその顔は、驚愕の表情を貼り付けたまま死んでいる。

「龍王として最も恥ずべき男——、厚顔無恥な北海龍王も、こうなってしまうえば、ただの哀れな中年に過ぎませんね」

ゾツとするほど静かなその言い方には一片の同情もない。

九玄は注意深く身構えたままである。

「ああ、『相剋フィールド』を解除されに来たのでしょうか？　どうぞ、この霊符が媒介です」

敖坤が差し出した札を、九玄は素直に受け取ることはできなかった。

それを見てとった敖坤は、フワつとした手つきで九玄のほうに霊符を投げた。

そして、九玄がそれを拾うのも確認せずに、去っていったのである。春明門をくぐって、東へと。

(どういうことだ……。単なる仲間割れか……。?)

不可解だった。

しかし、九玄はひとまず、東端の媒介になっているその霊符を大刀で串刺しにして、自分の仕事を終えた。

晴れて無線が開通した城下町エリアは、それまでの混乱が嘘のように統率されていった。

陽輝は自分のバイクに、小型モニターとCPU（中央演算処理装置）を積んである。

それを通して、各地域でバラバラに行動していたはずの軍属を全て自分の手足にしているのである。

陽輝の第一声は、こうだった。

「帝都内の全ての軍属に告げる。こちら、西方軍大将、陽輝。非常事態タイプA勃発の判断の下に、『リミテッド・コール』をかける」

『リミテッド・コール』とは、大規模なテロや反乱が起こって現場が混乱し、司令部からの指示が出せないような時に、その許可を持つ将官が天界軍全軍を動かすことのできる発令である。

勿論、その目的は、帝都防衛などの公益保護に限られているし、本部の指示ラインが再び確保できれば、その権限は返上するようになっていく。

「現在、帝都内を徘徊して叛逆行為を行っている者を即刻排除せよ。これらに対する一切の戦闘行動を許可する。その他、敵対行動を取る者に対しても、同様と解する。各部隊の小隊長は順次、現状を報告しつつ――」

陽輝のよく通る声を聞きながら、木佐は、あの人でもこういう喋り方ができるのか、と感心していた。

しかし、その数秒後には、

「祥倫しょうりん、由基ゆうき！ 呑んでくれてねえで、早く来い！」

そんな怒声もイヤホンから聞こえてきた。

木佐は、自分は正式には『軍属』ではないが、現在の四神府は暫定的に天界軍預かりになっているので、ここは陽輝の指示に従おうと思った。

「陽輝大将、ひとつ嫌な情報を提供します」

木佐は、自分から直接、陽輝に呼び掛けた。

「なんだ？」

「さつき、赤帝君も言っていたように、僕達はあの甲冑に一度だけ遭遇したことがあります。その時、甲冑は追い詰められて自爆したという話ですが……」

「『自爆』だと？」

「いま徘徊してる者達にも、同じ機能がついてると考えたほうがいいでしょうね」

「そうか。ありがとよ。……恐らく、高見の見物してる奴が居るな……」
その時、九玄の硬い声が無線に割り込んできた。

「こちらら九天玄女。北海龍王敖吉の死亡は確認した」

天真の診療所では、重症の怪我人が次々に運び込まれていた。

あまり大きくはない病院なので、ベッドはすぐに埋まってしまった。廊下に座り込んでいる者も居るし、血を流したまま玄関先で呻き声をあげている者も居る。

「こっちは今は輸血だけして、後で診ます！ 次は!？」

看護師が「こっち、お願いします！」と、廊下の奥から悲鳴に近い声を上げる。

天真が大股で駆けて行くと、そこには目を覆いたくなるような患者が横たわっていた。

しかし、微かに動いているということまで生きていることが分かる。

「意識なし、心音あり。数分はもちます。こちらも後で」

天真は軍医を経験しているので、こんな修羅場には慣れているのだが、こういう時に優先順位をつけなければいけないのは、いつも憂鬱だった。

与えられた時間を最大限に使って、救える命は救わなければならない。

どんなに手を施しても助かりそうもない患者は放置しなければならないのだ。

では、大事なのは『数』なのか？ と天真は何度も思ったことがある。

しかし、それは平時に考えることであって、今はとにかく、できることをするしかない。

「……っ？」

開けたままにしてある診療所の窓から、二つの不気味な光が見えて、天真はギョツとした。

それが、今、帝都を我が物顔でウロウロしている甲冑の眼光だと気付いたが、それと同時に、その甲冑の頭がもげるように真横に飛んで行く。

遅れてその場に着地した飛龍が、動かなくなった胴体を確認すると、『大丈夫だ』という顔を窓越しに天真に見せて、また空へ飛び上がった。行った。

「し、心臓に悪いですね、もう……」

こんな危険地帯の中で治療しなければならぬのだが、天真の心配事はもうひとつある。

ほつたらかしにしている沙龍は、この診療所のどこかに居るはずなのだが、あの無力な幼龍の状態で、あんな敵に発見されればひとたまりもないだろう。

飛龍はこの診療所の周囲に甲冑達が近付かないよう、さきほどから忙しく立ち回っているし、診療所のスタッフ達はみな自分と同じで戦闘に関しては素人である。

沙龍には勝手に出歩かないように言い含めてはきたが、言葉が通じているのかどうかはよく分からない。

(まあ、公主になにかあれば、私でも分かるでしょう……)

天真はそう思うことにして、治療に専念した。

八方結界の中の火雲宮エリアと、無線の復旧した城下町は完全に切り離されて

いる。

双方で連絡を取る手段は、今の所、小龍を通じての向こうからの一方的なアクセスしかない。

陽輝から九雷に通話を入れることはできないのだ。

「おめーも、もうちよつと役に立つといいんだけどな」

陽輝がそう言うと、小龍はブツブツ文句をこぼしていたが、それでも離れようとはしなかった。

バイクを流しながら、次々に入る報告を捌いて各所に指示を出し、陽輝は朱雀門と南門を結ぶ大通りの、丁度中間辺りにさしかかっていた。

九玄の一報によりますます分からなくなってきたこの状況だが、少なくとも黒い甲冑は敵だし、『自分の前に立ちふさがるもの』も敵である。

陽輝はそう思っている。

だから、その人影を見た時、陽輝はバイクを減速させ、小龍を上空へと逃がした。

「庚……、誰の命令で、そこでなにしてんだか知らねえが、俺の邪魔をする

な。死にてえのか」

陽輝の進行方向を塞ぐように立っている呉謙ごけんは、長いサーベルさーべるを持っている。が、特に身構えているわけでもないし、好戦的な目を向けているわけでもない。

陽輝は停車させたバイクから降りた。

「なるほど……、まだ貴方が居ましたか。とつくに水晶宮へ行かれたと思ってましたが。なぜ、急に軍部の動きが活発になったのか、やっとな理解できましたよ」
呉謙の表情は読めない。昔から、感情の乏しい男だったと記憶している。

「まあ、いいでしょう。『彼ら』も、もう用済みです」

呉謙がサーベルを持つ反対側の手でなにかをした時、連続的な爆発音が聞こえた。
た。

そのひとつは、陽輝のすぐ近くで起こった。

呉謙の背後を護るように立っていた甲冑の一部隊が、まるごと炎と煙に包まれたのだ。

「自爆させたのか！」

「せめてもの、侘びですよ。あなた方に掃除させるのも気が引けますのでね」
城下町に散らばっているはずの甲冑ロボが、今ので全て自爆したのだとしたら、また被害が出たはずだ。

「だったら、原子レベルまで粉碎してくれねーか。残骸残すような自爆じゃ、ロボの看板が泣いてるぜ」

「所詮、三流技術者の作る代物ですよ。安かっただけはある」

「おめーが買ったわけじゃないだろう。敖吉が金を惜しんだってだけの話じゃねーのかい」

「さあ……、どうでしょう」

その言い方が九雷にそっくりだったので、陽輝は思わず鼻を鳴らした。

「なんの真似だ、庚。一体、なにがしたいんだ、おめーらは」

皇族を護るべき近衛府、そして、なによりも、天帝を命に代えても護る使命を負っているはずの呉謙が、なぜ敖吉の下で働いているのか、陽輝は理解していない。

屈折した政治思想、とでも言えば、無理矢理にでも納得できるが、そんなのは

今する話でもなかった。

呉謙も自分の言動を説明するつもりなどないらしい。

陽輝がずっと向けているアーマライトに動じることもなく、直立不動で立っている。

「私など、いつそ殺されたほうがいいかもしれませんが、無理でしょう。貴方では私は殺せない」

「言ってくれるな。お前の『誰かの真似っこ神速剣技』が通じるのはザコだけだと思えよ」

「……試してみますか？」

静かに煽るような口調で、呉謙は一度目を閉じた。そして、僅かに身構える。

陽輝は、アーマライトを捨てた。呉謙の挑発に乗ったわけではない。

実は、こちらは最初から弾切れなのだ。

「——ッ！」

自信はあったはずだ。

しかし、陽輝が懐のM29を抜いた時、既に呉謙の白刃が目前に迫っていた。

(早い——っ!?)

次の瞬間には、背中から右肩にかけて強烈な痛みが走った。

一発は確かに撃ったはずだ。手応えもあった。

が、それが呉謙のどこに命中したのかは、陽輝には分からなかった。

「残念ですね。その肩の怪我がなければ、もしかしたら、やられていたのは私だったかもしれません」

「——」

遠くなる意識の中で、陽輝は、辞世の句ぐらい作っておくんだった、と思っ
た。

14 欽チャンとジローさん

水晶宮――。

天界領土の東にあり、東海を一望する、優美な宮殿である。

その敷地面積の広さでは火雲宮に及ばないものの、美しさでは圧倒的に勝るかもしれない。

紺碧の東海がよく映える空色の外壁を持っており、無色透明の水晶がふんだんに使われている内装は、見る者を魅了してやまない。

初代の東海龍王から数えて十数代、今尚、ここは龍族の本拠地として知られている。

龍族が、ここから東西南北に別れたのは、四海の防衛をより強固なものにするためだったと聞く。

帝都は内陸にあるために、ある程度、海上からの敵に関しては龍王達に任せなければならぬという事情があった。

まだ四方将神も居なかったし、天界軍も四方軍に分かれていなかった太古の時代の話だ。

今、四海龍王達が独自の軍事力を持ち、自由な振る舞いが許されているのは、そういった歴史の積み重ねによる。

ある時は異民族を撃退し、ある時は時の天帝から庇護や援助を受け、この関係を築いてきたのだ。

「お帰りなさいませ」

水晶宮のスタッフ達は、ここを龍族全ての『家』であると思っているので、龍王が帰還する時は、誰であろうとそう言って出迎える。

年若い奏欽に対しても、それは変わりはなかった。

「あら？ その子は……」

女官の一人が、奏欽が腕に抱いているぬいぐるみのようなものを見て、目を輝かせた。

「帝都で迷子になってたのよ。気の毒だったから拾ってきちやったわ」

「そうですか。珍しい幼龍ですね。翼がありますわ」

「翼を持つ龍は、吉兆と言うでしょ」

「では、私どもがお世話を——」

と、女官が奏欽の手から、その黄色い龍を取り上げようとするのを、奏欽はやんわりと断った。

「いえ、ここでの私の話相手になってもらおうと思ってるの」

奏欽はそのまま勝手知ったる水晶宮を奥へと進んだ。

明日からは、ここで龍族主催の新年会が開催される。

奏欽にとっては憂鬱な『お見合いパーティー』も兼ねたイベントである。

今回は兄の敖丁も来ないし、西海龍王敖閏も欠席届けを出しているはずなので、奏欽はなんとなく寂しい気分だったのだ。

そこに、フラフラと現れたこの幼龍は、奏欽にとって大袈裟に言うなら『同志』にも思えた。

水晶宮の奥殿にある一室が、奏欽の部屋になっている。

一般用の豪華な客室とは違って、親族用の味気ない部屋なのだが、奏欽好みにレイアウトがされていた。

水晶宮のスタッフの配慮だろう。

ビロードの深紅のカーテンに、同色の絨毯、調度品には全てアンティーク風の装飾が施されており、大きな天蓋付きのベッドは薄いピンク色のシーツでまとめられている。

少女趣味だと自分でも思うが、やはりこういった雰囲気が一番寛げるのだ。

本家の『紅寶宮』にはもう数百年帰ってないが、やはりここと同じような雰囲気の自室がある。

猫足テーブルの上に小さな黄色い龍を降ろしてやると、その龍がじっと見上げてくる。

思うところがあつたのか、奏欽は自分の髪飾りから一本のリボンを解いて、龍の首に巻いてやった。

「もしかして、あなた、喋れるんじゃない……？ このリボン、どうかしら？」
奏欽には、『二行マイスター』という才があつた。

五行の力のうち『火行』と『木行』を極めており、且つ、最高位の五行合体技が使えるのである。

それにより、普段の神通力も通常のマイスターより遥かに強い。

この幼龍はなにか秘めた力を持っているのではないかと感じたのもそのせいである。

しかし、それゆえにとんでもない事態になってしまった。

「……プハ」

龍は急に少し変わった鳴き声を発したかと思うと、のべつまくなしに喋り始めたのだ。

「カハっ……、あー、もう、べっくらしたよ。……あり？　あり？　喋れる？

どうして？」

「……!？」

「あ、欽チャン！　だよね？　いやー、ありがとありがと。もう、あそこでドクターとはぐれた時は、さすがに誰かの食糧になる覚悟をしたね。陽輝もよく言うてるし。小龍は丸焼きにすると美味いかも、とか、全く、人のペットをなんだと思ってるのよネー」

「……ちよ、ちよっと待って？」

「ふいー、しかし、いやはや、悪運強し、沙龍チャン！ あんな危険地帯でこんな美人に拾われるとは、まさに地獄に焔？ あ、分かんないか。あれ？ ホタテ、だったかな」

「……」

「ホタテといえは、やっぱ私は炊き込みご飯に入れちやうのが好きなんだけど、キサさんは照り焼きが好きでさー。一度それで家を半壊させる大喧嘩をしたことが……。あ、お腹すいてるの思い出した。なんか食べるもの、ない？ 肉まんよりも、薄く切った春巻きとかがいいな。この短い手だと、食べにくいんだよねー」

「だから……、ちよつと……、待ってってば……！」

奏欽はたまらず、喋り捲る幼龍に「待った」の両手を広げる。

が、機関銃のような沙龍の喋りは止まらない。

なぜか、普段よりも饒舌で、どこか喋り方がおかしいのも、この姿のせいなのだろうか。

「あとねあとね、元帥が無事なのかどうか、チョー気になってんだけど、なんか

帝都の様子、おかしかったジャン？ 欽チャン、なにか知らないの？ この前、天ちゃんのお誕生日会の時、妙なこと言ってたから、きつとなにか関係あると思うんだけどサー」

奏欽はたまらず、龍の首に巻いたりボンを、シユルつと解いた。すると、途端に、人語を忘れたかのように龍が黙った。

「……ウキユ？ ……ク？」

「なるほど……、これによって喋れるようになってちやうわけね」
勿論、普通のリボンだところからはならないだろう。

奏欽の神通力があつてこそそのマジックだ。

「どうしたものかしら……。この子……、多分、緑麗よね……」

「ウギユ」

恨めしそうな顔をしているので、恐る恐るもう一度、赤いリボンを巻いてやると、幼龍はまるで咳払いするかのような仕草をした。

「あー、できれば『沙龍』と呼んでクダサイ。『緑麗』は前世の名前なんで」

「そう。分かったわ。じゃあ、沙龍さん。ひとつ、重大なお知らせがあるんだけど

ど、よく聞いて。今、ここはもしかしたら、帝都よりも、貴女にとっては危険な場所かもしれない」

「どうして？ ……って、ここはどこなの？」

「水晶宮。東海龍王家の本家よ」

「へー」

「…：ホントに分かってる？ 貴女は明日からここで行われる『新年会』に、主賓として招かれた後、監禁される予定だったはずよ。少なくとも、敖坤のプランでは」

「なんで？」

「なんでって、えーと、つまり…：」

「ああ、もしかして、その合コンで、女の子が足りないから呼ばれたとか、そんなん？」

「ちよっと違うけど…：」

「でも、今の私はこんな姿だしサー？ パーティーに招待された所で、踏み潰されるのがオチだし、そこら辺はテキトーに欽チャンがなんとかしてよ。お見合い

も合コンも、私達には必要ないわけじゃん？ それよりも、北の龍王が――」

「……。どうして？」

奏欽は、妙なことを言い出す沙龍の言葉を遮って、『必要ない』と言った言葉の意味を確認しようとした。

が、沙龍はキョトンとして、当然だ、と言わんばかりに、

「私には最愛のカレシが居るし、欽チャンが再婚したら陽輝が悲しむから」

「……」

奏欽は絶句した。

まるで脈絡のない、噛み合わない会話をしているようで、その実、この龍はなにもかも知っているのではないか、と思えたのだ。

「それは……、今はひとまず置いておいて、貴女の正体がバレないようにしないと――」

「そだね。合コンの強制出席ほど虚しいものはないよネー。この飲み食いだけで三千円？ ふざけんなって感じだもんネー。出ないでいいなら、それに越したことはナイシー」

「だから、それは違うって……」

厄介なものを拾ってしまったかもしれない、と奏欽は思ったが、鏡台に映っていた自分の顔をチラッと見て、驚いた。

ここ数百年、こんな顔をした記憶はない。

キリッと吊り上がっているはずのいつもの眉毛が、情けないくらいに下がっていて、口元はずっと開いたままになっている。

これは、子供の顔ではないか、と思う。

「どしたの？ 欽ちゃん」

奏欽は、なぜこの龍が敖閏と同じ呼び方をするのかが、気になった。

なにか接点があるのか、それとも、単なる偶然なのか――。

しかし、兄や敖閏以外の者に気安くそう呼ばれることを、不快だと思わない自分に奏欽は一番驚いていた。

この小さな龍の姿だからかもしれない。

「これは好機かもしれない……。沙龍さん、いえ、今からバレないように『ジローさん』とでも呼ぶわ。私に協力してくれる？ 帝都の存亡は、多分、私達に

かかってる」

「なぬ？ そんな重大事なの？ ……って言っても、私は帝都がどうなるうが、知ったこっちゃないっていうか、別にどーでもいいっていうか……」

「……。ジローさん、九雷元帥も帝都に居るのよ？」

「協力シマス！」

にわかにはビシツと立ち上がって敬礼する龍が、その反動でそっくり返った。

（こんなん、大丈夫かしら……）

奏欽はそう思ったが、鏡台に映った自分の顔に、もう驚くことはなかった。

払暁。

結局、朝日を迎えるまで帝都の停電が復旧することはなかったが、主に西方軍の活躍により、甲冑軍団は殲滅できた。

木佐や赤帝君の働きも大きかったが、こういう時は、数を統率できなければ意味がない。

無線が復旧してからは、九玄は天真の診療所に手伝いに行った。

火雲宮側からの声明を聞いたのも、呻く患者の最期を看取った時だった。

北海龍王の犯行——という、帝都の市民にとっては驚きの事実と、本人は同族の手により『始末』されたという話だ。

それを聞いていた飛龍は、いつもの無表情を更に硬くしていた。

「九玄、なにかがおかしい。俺は確かに敖吉の悪意と狂気を感じた。しかし、それを敖坤が成敗したのなら、なぜ、事態が収まらない？」

「うむ。色々気になることばかりだな……」

九玄は昨夜見た、敖坤の冷たい瞳を思い出していた。

昔、敖閏と同棲生活をし、ここ数年、飛龍と一緒に暮らしていて分かることと言え、龍族というのはやはり普通の天界住民達とは違うということだ。

まず、同族意識というものが強いのは、すぐに理解できる。

それは『同族愛』と単純には言えないもので、飛龍などは、先代の東海龍王である敖光を毛嫌いしていたし、父親への激しい敵対心も結局はその『同族意識』の強さ故、ということになるのではないかと九玄は思っている。

九玄が、今さっきまで苦しんでいた患者の体全てにシーツを掛けてやると、疲れた顔をした天真が廊下から顔を出した。

「彼も駄目でしたか……」

「ああ。最期は意識がなかったようなので、それだけが救いだな」

「……そうですね。飛龍君、君もお疲れ様」

飛龍は少しだけ頷いて応えた。

「まだ戒厳令が解かれてないので、二人とも気をつけて下さいね。九玄殿、貴女

も、ここはもう大丈夫ですから、軍部の支援に行ってあげて下さい」

九玄は、胸の内を言い当てられてしまった気がして、黙った。

確かに、いくら医療の知識があっても、今自分のすべきことはここにはないと感じている。

「……緑麗は？」

ふと、飛龍が顔を上げて聞いた。

「それが……、昨夜から見てないんですが、多分どこかの部屋に居ると……」

天真がそう言った時、廊下から看護師の女性が小走りで駆けてきた。

「大変です！ あの幼龍が居ないんです！ ケージの中に入れておいたはずなのに！」

火雲宮の本殿、すぐ脇の控え室に急遽設置された『緊急対策本部』には、次々と情報が入ってきていた。

昨夜の第一報は、『帝都全域に数件の火災発生』だった。

火雲宮エリアの被害は幸い火薬庫だけで済んだが、物が物だけに、こちらでもかなりの死傷者が出た。

そして、二報目は北海龍王敖吉による『宣戦布告』である。

これは、各龍王が確保している直通回線によってもたらされた。

その直後に、帝都全域に渡る停電と、甲冑部隊による暴動が起こったのである。

九雷が事前に掴んでいた情報によれば、『決行』は水晶宮での新年会当日——つまり、本日——だったはずなのだが、敖吉の先走りか、もしくは敖坤の造反によつて、半日早まってしまったようだ。

「どうぞ」

馬^ば霊^{れい}が差し出したコーヒ^いーを無言で受け取つて、九雷はまだ目の前に置かれた二つの銃を悄然と眺めていた。

さきほど本部に届けられた、アサルト・ライフル、アーマライトM16A4カスタムと、使い込まれたハンドガン、S&WM29である。

それがなにを意味するのか、分からない九雷ではない。

陽輝は最悪もうこの世には居ないか、居たとしても、虫の息で敵の手に落ちて
いる状態だろう。

無抵抗のまま拉致されるような男ではないからだ。

（本当の敵は敖坤だったのか……？）

九雷は、未だにそこが引つ掛かっている。

都合良く解釈するならば、裏切り者の北海龍王を、軍事職に就いている敖坤が始
末してくれた、ということになるが、その敖坤は義務を負っているながら連絡をど
こにも入れていない。

仮眠から覚めたらしい西海龍王敖閏がむっくりと起き上がって伸びをした。

そして、九雷が渋い顔をしているのと、その目の前の机に置かれたものを見
て、顔をしかめた。

「第二段階か。やっぱり敖坤は『アレ』を使う気かな」

「『五行砲』ですか」

九雷は頬杖をついたまま言う。疲労のためか、普段の形ばかりの龍王に対する
敬意もおざなりだ。

「しかし、あれを起動、発射するための切り札は、こちらにある。まさかラボが陛下抜きであれを起動できる方法を発明したとも思えない」

「九雷君、どうして君が『それ』を忘れるの。緑麗チャンが居るじゃない」

「沙龍は、今は仙界に居るはずです。なにがあるうはずが——」
しかし、九雷はそこまで言っただけで急に立ち上がった。

そして、目を閉じ、小龍の気配を探す。

陽輝の下へ遣いにやってから、小龍は戻ってきていない。

ここに陽輝のアーマライトがあるということは、小龍も一緒に掴まったか、殺された可能性もあるが、抜け目のないあの小さな龍は、どこかへ身を隠した可能性の方が高い。

案の定、割とすぐに小龍の意識を、城下町の一角に感じた。

そこに意識を合わせると、薄く視界が見えてくる。

(天真……!?)

小龍の視界を通じて見えるその景色には、青ざめた顔をした天真が居た。

「天真！ なにが起こった!? 沙龍はどこに居る!？」

なんの前触れもせず小龍の意識を全て奪って、九雷はその場に話しかけた。すると、天真が「やばい」という顔をしたことすら、ばっちり分かってしまった。

「あゝ、生きてましたか。お互い。それは重畳重畳」

「沙龍はどこだ、と聞いている！」

九雷の余裕のない声音にすぐ観念したのか、天真は一度深く息を吐いた。

「すみません、行方不明です。昨夜までは一緒だったんですが——」

「敖坤にさらわれたのか!？」

「いえ……、それはまだ分かりません。実はですね、九雷。いい情報と悪い情報があります。どっちを先に聞きたいですか？」

「今はお前のアメリカン・ジョークを聞いている余裕はないぞ」

「まあ、そうでしょうけど。じゃあ、悪い方から行きます。公主は、今、小龍みたいな幼龍形態になってます」

「……!?!? どういう意味だ？」

「私達も誰一人として、その原因は分かってません。が、なぜかそうなってるん

ですよ」

「……」

「で、いい情報なんですけど、そのせいで、最悪水晶宮に連れて行かれたとしても、本人が主張しない限り、敵にはバレないでしょうね。主張したとしても、あれじゃ、信じてもらえないかもしれません」

「状況は分かった。また連絡する」

そう言って、九雷は一度通話を切った。

敖閏がなにか言いたそうにしているし、モニターに新しい情報が入ってきたからだ。

「九雷君、これは僕の推測だけど、もしかしたら、緑麗ちゃんは欽ちゃんと一緒かもしれない」

「なぜそう思うんです？」

「科学的には説明できないんだけど、僕ら龍族というのは、自ら思考を閉ざさない限り、互いの気配や感情といったものをかなり遠くに居ても感じることができるとだよ。多分、四方将神と黄龍の関係と、似たようなものだと思う。で、今、

欽ちゃんの状態を感じると、そういう結論になるんだよね」

九雷は半信半疑といった表情をしているが、感情の部分では今、敖閏が言ったことを信じたい、という顔だ。

「とりあえず、この八方結界は解除しよう。そろそろ僕も限界だ」

疲労を滲ませた顔で敖閏がそう言うと、九雷も承知せざるを得ない。

ほとんど、己の神通力の全てを使って、この『八方結界』を敷いたのは、他ならぬ敖閏である。

これを一人で持続するのは、一晩が限界だった。

後は物理的な防御網で火雲宮を護るしかないのだが、とりあえず甲冑部隊は殲滅できたし、停電も復旧しつつあるので問題ないだろうと敖閏も九雷も思った。

「敖坤はどう動くと思われませんか？」

九雷がそう聞くと、敖閏は嘆息して、暫し考え込んだ。

「彼こそ、ずっと思考を閉ざしている。なにか思う所があるんだらうけど……。

そうだ。僕も聞きたいことがあった。近衛の隊長はどうなの？ 近衛府は当てにしない方がいいんだよね？」

それを聞かれて、九雷は一層渋い顔をした。

恐らく、呉謙は自分への私怨で動いているのだろう、と思う。

北海龍王と結託していたのは間違いないが、もしかしたら敖吉を操っていたのは呉謙のほうなのかもしれない。

「近衛府は、隊長が行方不明の現在、副長が指揮しています。本来の仕事をしてくれると思いますが……」

本殿の奥の間で休んでもらっている秦帝の警護をしているのは、その近衛府のスタッフである。

九雷も近衛府に任せることに不安はあったが、同じ数の特務のスタッフが目を光らせているので、最悪の事態にはならないはずだった。

なにより、副長のじゅんしょう順章は、呉謙と反目していた実直な男である。「君が罪なことをするから……」

と、敖閏が苦笑しながら言うので、九雷も素直に恐縮してみせた。

先日、蟠桃会で呉謙と再会した時、九雷が呉謙を煽ったのも事実である。

随分前に、呉謙との刹那的な関係は解消したつもりだったが、そう思っていた

のは自分だけだったと気付いた上での、挑発である。

「今、お前がやっていることが、俺への個人的な当てつけなら、止めた方がいいぞ」

闘技場の石畳の上で、九雷はそう言った。

呉謙は、その言葉すら、喜んでいたようだ。

「相変わらず大した自信ですね。その答えは、『こんなことをしてもなんとも思わないから』ですか」

「そうだ」

「では、理想と信念に基く行動なら、どうだと言うのです？」

「もつと止めた方がいいな。……これは、なぜ分かるか？」

「……いえ」

「小者が理想を語ると、ロクな結果にならないからだ」

そんな短い会話を、闘技場で、しかも、試合前に交わしたのである。

「問題はやはり水晶宮か——」

何杯目かのブラック・コーヒーを咽に流し込んで、九雷がそう言う傍ら、西海龍王敖閏は、緩めていたネクタイを締めなおして出掛ける支度を始めていた。

「九雷君、君の腕は信用してるけど、『起家』^{チーチャ}（注1）を侮らない方がいいと思う。僕なんか、尻尾を掴むだけで二世紀かかってしまった」

敖閏は念のためにその符牒を使った。

「敖坤も、その人物に洗脳されている、とお考えですか？」

「いや、それはないだろうな。敖吉は洗脳できても、敖坤の方は無理じゃないかな。彼は腐っても東海龍王家の直系だ。あそこはちよつと特殊だからね」

「敖吉の死亡は、『起家』の想定内だと思われませんが」

「そうかもね。純粹な敖坤を使って、用済みになった敖吉を始末させたってことかな……」

「当面は、敖坤の出方に注意を払って、ことを進めます。……と言っても、『こ

れ』を見ればもう疑いようはないですが」

九雷が示したモニターには、水晶宮に設置された巨大な砲門が——本来、海側を向いていなければならぬその『五行砲』が——、内陸へ向きを変えつつある、という報告と共に、その画像が貼り付けられていた。

敖閏はそれを確認すると、頷いて言った。

「僕は予定通り、観測所の方に行ってみるよ。誰かひとり優秀なスタッフを貸してもらえるかな？」

「そう言われても、特務のスタッフや、四方軍の軍属をつけるわけにはいかな
い。」

敖閏はあくまでも民間の協力者なのだ。

九雷は、帝都に居るはずの同僚二人の顔を思い浮かべた。

「堅物で忠実な男がいいですか？ それとも、インテリの美人がいいですか？」

「そりゃ、美人の方がいいに決まって……」

「そう言うと思った、という顔で、九雷は言った。

「では、真武君をお連れ下さい」

(注1) 起家……本来は、麻雀用語で「親」のこと。

さっきまでボンヤリとしていた視界が、だいぶ輪郭を持って陽輝の目の前に現れた。

(まだ、生きてる——?)

それがはっきり分かったのは、右肩に痛みが戻ってきた時だった。

「ッ……!!」

苦痛から声を上げそうになったが、それを華奢な白い指が塞いだ。

「……!?!」

「声は立てないで」

女性の小声がした。

寝起きで見えるものとしては、これ以上ないというくらいの清楚な美女が、自分の肩の傷に包帯を巻いているのだ、ということは理解した。

(なんで、奏がここに……!?)

陽輝はそう思った。そして、こんなにもはっきりと痛みを感じているのに、「ああ、死んだからか……」ともう一度思い直した。

「言っておくが、天国じゃないゾー」

今度は、明らかに別の、なにやら不遜な声が聞こえる。

聞き覚えはあるような、ないような、そんな感じだった。

「全く、マヌケだネー。あつさり敵に捕まっちゃって、愚連隊の大將が聞いて呆れるワ」

言い返す気力もなく、陽輝はぼやけた思考の中で、なぜ自分がここに居て、元妻に介抱されているのか、思い出そうとした。

水雲宮前の攻防で負った銃創を、呉謙は迷うことなく狙ってきた。

手負いの者を更に弱らせるといふ戦法は正しすぎて、それを外道だと批難する気はないが、どうせなら殺せばよかったものを、なぜ生かしたままにしておいたのか、陽輝には分からない。

「奏……？」

胸いっぱい広がる桂花の香りが、自然となにかを刺激する。

何年のブランクがあるのか覚えてもいないが、陽輝は動く方の左手で、何度も抱いたことのある奏欽の体を引き寄せた。

「ちよ、ちよつと……？」

そう言いながらも、重症の怪我人相手に奏欽は強く出ることができない。

しばらく駄々ツ子を言い聞かせるように、なすがままにされていた。

「おめーら、なにやってんだヨー。早くしないと、誰か来ちゃうゾー」

その偉そうな声と物言い、更に、奏欽の唇の感触や自分の右肩の痛み、この倉庫のような暗い部屋の様子——、全てがひとつに繋がって、陽輝は今置かれている状況の八割方を理解した。

「わりい、ちよつと、本能のままに行動しちまった。……ここは、水晶宮だな？」

「ご名答」

答えたのは、奏欽の胸元に埋まっている小さな龍である。

陽輝は、初めて見るはずのその龍をじっと見たが、もう分かっているようだった。

嘔き出しそうになる口元を押さえながら、ビシツと龍にデコピンを食らわす。

「痛ッ」

「なんでお前がそんな愉快的な姿で、俺の元女房と一緒に居るのかは知らねえが、助けに来たんなら、早くここから出してくれ」

「この子は『ジローさん』よ。貴方の知ってる名前では呼ばないで。色々あるんだから」

奏欽は短くそう言って、にこりともせず立ち上がった。

「ハイヨ……」

沙龍がオーバーに無い肩をすくめる。

「残念ながら、助けに来たわけじゃないんですノヨ。まあ、自力で脱出できるなら、どうぞ、なんだけどさ。とりあえず、止血はしたから、後は大人しくしてナー」

「おい、待てよ、お前ら——、ツ！」

陽輝は呼び止めようと体を起こしたが、一瞬、苦痛に顔を歪ませた。

「もうちよい説明はしていけ！　なんで俺は生きてままだここにとっ捕まってるん

だ？ 敵は呉謙以外に、あと誰が居る？ それに、帝都はどうなった？ 九雷は

その名を出せば、沙龍が動揺するだろうと分かったの聞き方だ。

我ながら卑怯だとも思うが、陽輝も必死なのだ。

足を止めた奏欽は振り向かなかつたが、沙龍はポンッと奏欽の胸元から飛び降りて、陽輝の元へチョロチョロとやって来た。

かなり険しい顔をしながら、である。

「〃説明しろ〃だ？ ダーティー・ハリーが泣いてるぜ、オツサン。ここは敵地で、陽輝は今のところ利用価値があるから生かされてるんだよ。頼もしい女性陣に任せる度胸があるなら、ここで大人しく寝てろって言ってんだヨ。ダアホめ」

「そんな度胸なら、俺は要らないぜ、沙龍」

負けずに言い返す陽輝は、気力だけで立ち上がった。

今までに流れた血だろうか、足元のコンクリートは黒く染まっている。

「足手まといも、要らないぜ？」

沙龍は短い両手を組んだままふんぞり返って言った。が、どうもバランスが上手く取れないらしく、後ろにそっくり返った。

「アホはどっちだよ。そんなナリの『ジロー』と、争いごとが大嫌いな奏が二人でタツグ組んだって、大したことできねーだろうが」

すってん転んだ沙龍の体を掬い上げて、陽輝は鉄製のドアの前で立ち止まったままの奏の方へ向かう。

しかし、その時、ドア向こうで物音がした。

「……!？」

三人——いや、二人と一匹は、同時にそれに気付いた。

一番素早く行動できたのは奏である。

陽輝の手から沙龍の小さな体をひったくるようにして奪うと、腰を沈めて、陽輝の腹を容赦なく殴り飛ばした。

「——っ!？」

咄嗟のことだったので防御もできず、陽輝はまともに背後の壁まで吹っ飛んだ。

それと同時に、いや、その直前くらいに、鉄製の重い扉がギツと開いた。

「おやおや、これはどういった趣向で……？」

そう言ったのは、様子を見に来たらしい呉謙だった。

呉謙の背後には、二人の龍族の若い男が控えている。

「この男には、積年の恨みがありますから。その鬱憤晴らしをしていた所ですわ」

奏欽が傲然と陽輝を見下ろす。

「ほう……、まだ未練でも？」

呉謙が面白そうな顔で聞いてくる。

「未練がないから、手負いの元夫を痛めつけているのだということがお分かりにならない？」

「ひでえ女だぜ……」

陽輝がボソツと言ったのに対し、奏欽が即座に睨み返した。

「今まで、さんざん不貞を働いたツケです」

「そりゃあないぜ。……ま、多少浮気もしたし、あんまり家に帰らなかつたこと

もあつたかもしんねえが」

「“多少”ですって？」

奏欽が怒りを顕わにした。

ツカツカと、わざと足音をさせて陽輝の胸倉を掴みに来る。

「よく言えるわ……！ 新婚生活二日目にして遊里に出入りされた恨みは、一日たりとも忘れたことはありませんから！」

「だから……、何度も言ったが、あれはダチが祝い酒をふるまってくれるっつーから……」

「そんな言い訳が通用すると思ってるのが、男の身勝手なのよ！」
痴話喧嘩が始まってしまった。

奏欽の袖の中に押し込められた沙龍も、オロオロしながらその喧嘩を見守っている龍族の男二人も、どうすればいいのか分からない。

しばらく成り行きを見守るしかなかった。

「大体、その後だって、一週間に一回帰ってくればいい方だったじゃないのよ！」

「そりや、戰場行つてんのに毎日家に帰れるわけねーだろ？ たまにまともな時間間に帰つてくりや、キャンキャン文句しか言わねーし」

「どこに血まみれで帰ってくる夫を、笑顔で迎える妻が居るつてのよ！」

本気にしか思えないような痴話喧嘩を聞きながら、沙龍はポリポリと頭を掻いていた。

「貴方みたいなゴロツキは、ロクな死に方をしないと生きていたけど、まさにその通りになりそうね！」

「……どうせ死ぬなら、『三つ目』の腕の中で死にてえな」

陽輝は笑いながら言つて、奏欽がなにかを思い出すのを待った。

しかし、奏欽は今まで怒鳴っていたのをピタリと止め、冷酷な瞳で睨みつける。

「一番大事なお酒でも抱いて死んだら？」

「別にあれは、優先順位じゃなくて——」

陽輝の言葉を待たずに、奏欽は踵を返して部屋を出て行った。

呉謙は場にそぐわぬ微笑を湛えたままだったが、

「どこまでが芝居なんでしょうね？」

と、誰にもなく呟いた。

「手加減なしで男を殴り飛ばす女に芝居もクソもあるもんか」

血痰を吐きながら、忌々しそうに言う陽輝だったが、さつき、手のひらに感じた感触が間違っていないのなら、もうひと頑張りしなければならぬだろう、と思った。

いや、本番はここからだ。

「き、欽チャン、ちよつと落ち着いて——」

奏欽の袖口の中で激しく揺られながら、沙龍は何度も小声でたしなめた。

「大丈夫よ、ジローさん、私は冷静よ」

しかし、そう言う奏欽は、さきほどの勢いのままに廊下を歩き続け、この水晶宮の主の部屋へと向かっている。

奥殿の、広い廊下の突き当たりがその部屋である。

護衛の兵士などは居ない。

「敖坤！」

ノックもせず、怒り顔のまま両開きのそのドアを開ける。敖坤は大きな窓の前で東海を見ていたようだった。

「どういうこと!? なんで部外者がでかい顔で水晶宮を歩いているのよ!？」

「呉謙隊長のことですか？」

ゆっくりと振り向いた敖坤は、手にグラスを持っている。

午前中から自室で酒を煽ってるなど、どういう了見だ、と奏欽は唾棄したい思
いだった。

「名前なんて知らないわよ。近衛の制服なんて、私は見るのも嫌なのに！」

「彼は私の友人で、新年会の招待客です。大目に見て下さい」

「大目に見たって、あの態度は目に余るわ！」

「でも、西方軍大将を連れてきてくれた人なのですよ？」

と、敖坤は恩着せがましい。

それに対し、奏欽は居丈高に言った。

「私がいつそんなことをお願いしたのかしら……？　そもそも、なぜあんな愚連
隊の大將が『主賓』になったのか、私はまだ教えてもらっていないような気がす
るけど？」

「必要悪ですよ、欽姫。緑麗様が万一いうことを聞いて下さらない場合の『餌』
です。……ああ、失礼。言葉が悪かったですね」

わざとそんな言い方をして、奏欽の感情を揺さぶるつもりなのか、それとも、

敖坤は多少酔っているだけかもしれない。

「緑麗をおびき出すためなら、もつと適任者が居たはずよ？」

「だから貴女は世間知らずと言うんですよ。九雷元帥は簡単には落ちません。長年の上官の力量くらい、私が知ってます」

「西方軍の大將なら、簡単に挑発に乗るとでも？ それこそが、九雷元帥の策略だとは思わないの？ あの人は友人すら手駒に使う人よ」

「ああ、そういう可能性もありましたか。欽姫、意外に、参謀に向いてますね」
嘲笑するように言う敖坤に、奏欽はもうなにを言っても無駄だ、と思った。

「私は貴女のためにも、陽輝大將を連れてくるように頼んだのですがね」

「未練のある元夫に逢わせてあげようという同情？ それとも、恨みを晴らさせてあげようって余計なお世話かしら？ ……いずれにしても、飛んだ思い違いだけど」

奏欽が部屋を出て行くとしたので、敖坤はその背中に言った。

「もうすぐ、会が始まります。美しき龍王公主の隣に立ちたい方々が、お待ちかねですよ」

「五分だけ顔を出して帰るわ。馬鹿馬鹿しい——」

奏欽の苛立ちと怒りは収まらない。

自室に戻ると、『お見合いパーティー』のために奏欽の衣装の準備をする侍女達が右往左往していたので、それにも八つ当たりした。

「着替えくらい一人です」と一喝すると、侍女達は大人しく下がった。そして、ガツチリと部屋に鍵をかける。

「……」

しかめっ面で鏡台の前に立ち、器用に衣を重ねていく奏欽を眺めながら、沙龍は黙々と春巻きを食べている。

昨日の晩、奏欽がササッと作ってくれたものの残りである。

沙龍は、このお姫様は随分変わっている、と思った。

仙界で出会った竜吉公主など、日常生活のことは一人じやなにもできない感じがしたが、奏欽は料理も掃除もなんでも一人で出来そうである。

加えて、かなり頭が切れるのだろう、というのはここ数時間の出来事ですぐ分かった。

今も、侍女達を下がらせたのは、二人きりになるために怒った振りをしたただけだろう、と沙龍は分かっていた。

「ジローさん、大体分かったわ。まず、陽輝を『主賓』にしたのは敖吉じゃない。敖吉の仕業と見せかけて、私に釘を刺すために、敖坤が命じて連れて来たのよ」

「なんで……?」

「最初から、敖坤は私を信用してないってことよ。この分だと、『五行砲』のコントロール・ルームにも簡単に近付けそうにないわね……」

「陽輝は人質か」

「あんなゴロツキ、どうなったって知らないわ」

「プ……」

と、沙龍が笑うと、奏欽が怖い顔で睨んだので、春巻きに集中した。

「とりあえず、私は会に出席して時間を稼ぐから、ジローさんは『五行砲』のほ

うをお願い。今も砲門は少しずつ回頭してるはずよ」

「うん、分かった。でも、この体だとなー。百メートル歩くのに一日かかりそう……」

「ひとり、協力してくれる人が居るかもしれない。私の幼馴染みで、溜伊っていうんだけど、これを見せたら力を貸してくれると思う」

と、奏欽は、耳を飾っていた真珠を一粒、沙龍に渡した。

真珠——なのだが、今の沙龍にとっては、巨大な野球のボールくらいはある。

「どんな人？ 背格好とか、どこに居るとか」

「背格好はごく普通の龍族で……。多分、ここでは給仕みたいなことをさせられてるんじゃないかしら。来ているのは間違いないと思うけど、正確にどこに居るのかは、私には分からないわ」

「欽ちゃんの味方なんだね？」

「そうね。唯一の私の味方かも……」

その言い方が、妙に寂しげだった。

沙龍が口の周りを春巻きの皮だらけにしているのを、奏欽が拭ってくれる。

これは、母親とか姉のような仕草だな、と沙龍は思った。

奏欽自身は末っ子で、一見、母性とは無関係のような人物に見えるが、こういう端々にその性質というのは現れるものだ。

「ねえねえ、北海龍王は死んだんでしょ？ だったら、なんで敖坤さんはそれを発表しないんだろ？ 罪を北海龍王になすりつけて、元の日常に戻りやいだけの話ジャン？」

「敖坤の本当の狙いは私にもよく分からないの。でも、『五行砲』が動いてるってことは、やっぱり、帝都への脅迫に使うつもりなんだと思うわ」

「うーん……、そこがよく分からないんだけど。だって、敖坤さんは別に玉座に座りたいわけじゃないんでしょ？」

「それもよく分からないの……」

敖坤の狙いは、沙龍本人ではないか、という奏欽の推測も聞いたが、だとすれば、敖坤は味方とまで言わずとも、敵にはならないはずなのに、この水晶宮全体の空気を考えれば、それも怪しい。

「確認シマース。怪我人の陽輝はとりあえず放って置いて、私は、厄介な『五行

砲』を使えなくすればいいんだよね？」

「そう。そして、敖坤が持つてるはずの龍王剣を奪うこと。それが、私の役目ね」

「その『龍王剣』が、『五行砲』の起動スイッチになってるんだね？」

「ええ。でも『龍王剣』があつたとしても、最終的に『五行行使者』が居なければ起動と発射はできないはずで……、だから、ジローさんは正体がバレちゃまずいのよ」

「〃五行行使者〃？」

「五行の力を同時に全て行使できる人——、つまり、秦帝陛下か、ジローさんか、ってこと」

「む……？ 私にそんな力はないけど？」

「いえ、あるはずよ。『黄龍の保持者』ですもの」

「だって、私は五行術なんか使えないよ？」

「五行術は関係ないの。潜在的に五行の全てを使えれば、理論上は可能なの」

「そ、そういうものなのか……。まあ、今はこの姿だし、バレようもないと思う

けど」

「敖坤の部下達は、今も、血眼になって貴女を探しているはずよ。多分、随分と見当違いの所でね」

「うん……、そこら辺は充分気をつけるよ。というか、欽チャンも気をつけてね」

「ええ、ありがとう」

すっかり着替えを終えた奏欽は、沙龍が息を飲むほど、綺麗だった。

何度か見た薄紅色の着物よりも、更に鮮やかな珊瑚の色の上衣は、奏欽の華やかな顔立ちを一層引き立たせていたし、黄金色の冠も漆黒の髪を美しく見せるのに充分役立っていた。

「うわー、欽チャン、キレー……」

「な、なに言ってるの？ ジローさんまでそんなおべっか言わないで」

「え？ だって、キレーだけど？」

「どこが？ と、鏡を覗いて思う奏欽だったが、沙龍の言葉に嘘はないのだから、と思った。」

この龍は、『龍王家を利用したい求婚者』ではないのだから。

帝都の戒嚴令はそのままに、九雷は密かに東へ向かった。

勿論、水晶宮包囲のためである。

そこまで漕ぎ着けるのに、たった数時間しか掛からなかったのは、彼の根回しと手腕にもよる。

途中で公務員に出会ったのは僥倖だったかもしれない。

普段、地下の薄暗い泰山府の本部事務所か、冥府の最下層で現場仕事をしている彼は、滅多に地表に出てくることはないのだが、今日は非番とかで、買い物が出てきたのだそうだ。

そもそも、上でさんざんドンパチやっていたのに、この緊張感のない様子は腹立たしくもあるのだが、泰山府という省庁が、誰の、なんの影響力も受けない（もしくは受け付けない）^{カオルン} というのは、今に始まったことではない。

「お、あんた、確か九龍^{カオルン}（注1）の情人だったな」

しかも、彼らには階級や官位など、なんの意味も持っていない。

普通に考えれば、ヒラ公務員が元帥位にこんな口がきけるはずはないのだが、これも泰山府職員の特性だった。

「公務員、暇なら、沙龍に代わって一仕事頼みたいんだが」

「どんな仕事だ？」

「単なるデリバリーさ。これを——」

と、九雷は、もう断る余地も与えず、アーマライトとS&W M29を公務員に渡した。

「水晶宮で寝ている男に届けてくれ」

「……なんか、すごい嫌な予感がするんだが」

「そうか？ 簡単な仕事だぞ」

「なんだ、このやたら使い込まれたりボルバーは。こんな旧式なのに、俺のイーグルより威力がありそーじゃねえか。一体、誰だよ。こんなすげー銃を必要としてるのは」

「西方軍大将の陽輝という男だ。顔を知ってるか？」

「あー、ちよい待ち……」

と、公務員は携帯電話を取り出して、検索した。

大抵の要人なら、データベースに入っている。

陽輝の経歴と顔写真などをざっと見て、公務員は溜息をついた。

ついでに、帝都でなにが起こっているのかも、ニュースサイトにアクセスして
ほぼ理解した。

「分かった。かなりヤバイ仕事だったのも大体分かった。そそくさと断って、
バックりたい所だが……」

「水晶宮には恐らく沙龍も居る。できれば、こちらを救出したいのが俺の本音
だ」

「なんで、あんたが自分で行かない？ 立場上無理ってことか？」

「いや、五行的な理由さ」

「……？」

「あそこは、最新の防衛システムを導入している。今は自動的に『八方結界』が
かかっている」

「ああ……、五行の素養を持つ者は通り抜けられないっていう、アレか。なるほど」

公務員は、九雷がなぜこんな大仕事を自分に頼んできたのか、その理由が分かった。

天界の住民達は力の大小はあれ、皆、五行のいずれかの属性を持っている。だから、基本的にそういった属性を持たない人間や、公務員のような『元人間』でない限り、水晶宮に入ることはできないのだ。

「九龍もその水晶宮に捕まってるのか？」

公務員は、沙龍のことをそう呼ぶ。

特別な意味はほとんどない。ただ、『九龍』という無敵を表すその言葉が、彼女には似合っている、とは思っていた。中国大陸における『九』という聖数、『龍』という王者の象徴――。

「可能性がある、というくらいだな」

「そうか……」

公務員はアーマライトを担いで、腹を決めた。

「まあ、アイツには色々借りがある。適当に行ってくるぜ。成功報酬は弾んでくれ」

「軍部からは出せないな。四神府から出そう」

「どっちでもいいさ。じゃあな」

「頼んだぞ——」

実際、九雷はそれほど公務員に期待をしていたわけではない。

自分は公務員の腕を知らないし、どれほどの人物なのかも、まだよく分かっていない。

しかし、冥府探検から戻ってきた沙龍は、『やる気がない所が一番買える』という評をしていた。それは、能力があっても性格的にやらない、という意味ではない。これは、どちらかというところと陽輝のことである。

が、能力がないからやらない、という意味でもなかった。それは、公務員が『冥府最下層』という危険地帯を任されていることから窺える。元々、そこそこの能力はあるのだ。

つまり、沙龍が言いたかったのは『自分の能力を把握している』ということな

のだろう。

結構、これは難しいことである。

誰もが自分を過小評価し、過大評価する。冷静に自分を評価することはなかなかできないものだ。

陽が落ちるのを待って水晶宮の手前数キロ地点に布陣した九雷は、飛龍をなだめている九玄を見つけると、公務員に頼んだのと同じことを九玄にも頼んだ。

しかし、言い方は全く違う。

「あの結界を抜けられるのは九玄殿しか居ない。単独での内部工作を依頼したい」

九玄は、仙界の外交使節でもある。

今回、この『水晶宮包囲部隊』に参加したのも、口実としては『公式調査』という名目で通していたが、実態は飛龍のお目付け役であり、沙龍のことが心配だという本音があるだけである。

「八方結界の自動生成装置を破壊して、部隊の進入経路を確保しろ、と？」

九雷は頷いて、指先サイズのデータチップを渡した。

天仙界で一番よく使われている規格である。九玄の所持している小型端末にも挿せるスタンダードだ。

「現時点で軍部が把握している水晶宮の見取り図だが、今回のことで色々変更が加えられているかもしれん」

「……」

九玄は、早速そのデータを読み取っていた。

「敖閏殿の話では、沙龍は奏欽殿と一緒に行動しているようだ」

「……あの、美姫か。味方なのか？」

「九割はな」

「あとの一割は？」

「陽輝次第といったところか」

「……？」

そのもつたいぶつた言い方に、九玄は口元をかすかに歪ませた。

これだから、こいつは……、と思っっている。

「分かった。やってみよう」

「『女性に先鋒をさせるな』と、うるさい男が来ないうちに、行って貰えると有り難い」

九雷が夕闇の迫る木々の間に赤帝君の姿を見つけてそう言うと、九玄も頷いた。

「歯向かう龍族は斬ってもいいんだな？」

「任せる」

「龍王でも、か？」

「ああ」

「了解した。……ところで、敖坤の弱点はなんだ？」

「『良心』だろう。四角四面な男でね」

「……」

九玄は、九雷の言葉がよく理解できなかったが、後でなにかの参考になるかもしれない、と、覚えておくことにした。

(注1) 公務員は過去のトラウマから「沙龍」とは呼びたくないのので、沙龍の日本名である『馨』の音が似ているということから、「九龍(カオルン)」と呼んでいる。

昼間から始まった水晶宮の新年会は、異様な盛り上がりを見せていた。

野球場くらいあろうかという、水晶宮でも一番大きな広間に、着飾った男女が集まって談笑している。

今年は北と西の龍王を欠いているし、北海龍王に至ってはつい昨日、なにものかによって殺されたというのに、皆、まるでなにごともしなかつたかのように振舞っているところが、却って奏欽には異常に見えた。

招待客達も、一族も、全員がもしかして敖坤の味方なのだろうか、と思った奏欽は背筋が冷える想いをした。

が、それならそれで『我儘で高飛車な龍王公主』を演じればいいだけの話である。

幸い、それだけの下地は作ってきたつもりだ。

(ジローさん、大丈夫かしら……)

奏欽はそれを心配していた。

あの小さい体ではドアひとつ開けられそうにないのに、沙龍はあっさり「任せろ」と言った。

不思議とその言葉には説得力があり、思わず協力を頼んでしまったのだが、よくよく考えてみれば、『五行砲』のコントロール・ルームは蟻の子一匹入れぬ厳重さで守られているに違いない。

それをどうやって突破し、破壊するつもりなのか――。

配線のひとつでも引きちぎればOKというものでもないはずだが、沙龍にはなにかいい考えがあるのだろう、と奏欽は思うことにした。

尤も、それは奏欽の大間違いなのだが。

水晶宮の狭い倉庫に押し込められたままの陽輝は、ここがどの辺りかも分からなかった。

数時間前に奇妙なコンビがやって来て、さんざんな目に合ったが、それでも奏

欽が素早く治療してくれたおかげで、肩の痛みはだいぶ引いた。

しかし、その時やってきた呉謙に手錠をはめられてしまったので、結果を見ればやはり事態は悪くなっている一方だ。

今、両手を封じてあるこの手錠さえどうにかできれば、自力で脱出もできそうだったが、丸一日飲み食いしてないし、血はだいぶ流れたので、体力もかなり低下しているはずだった。

（一体、奏と沙龍はなにをしようとしてるんだ……？）

普通に考えれば、ここが水晶宮で、敖坤が敵だとしたら、一番の脅威は『五行砲』である。

とすれば、あの二人はそれをどうにかしたいのだろう。

『五行砲』は本来、帝都防衛のために作られたものである。

東海から侵攻してくる外敵を一掃できる破壊力を持った、恐らく天界最大の武器である。

これを実際に起動し、発射できるのは五行行使者である天帝ただ一人——ときれてきた。

勿論、それほど実用性があつたわけではない。太古の帝政時代に、権威の象徴として作つたとも言われている。

しかし、現在の天界においてはもう一人『五行行使者』が居る。沙龍だ。

(分からねえのは、敖坤の目的だ)

陽輝も、結局、そこに行き着いた。

九雷が疑問を呈し、沙龍も不思議に思った、敖坤の本当の目的である。

奏欽が言うように、敖坤の目的が沙龍本人であるのなら、別にクーデターなど起こす必要はない。

九雷に恨まれ、邪魔されようが、個人的に決行すればいいだけの話である。

(まあ、狂ったヤツの思考なんぞ、分かるはずもないんだが……)

陽輝は大体の体内時計で、今は夕方近くだろうと思つた。

そして、今日が龍族の新年会の初日であることも知っていた。

ならば夜を待った方がいい。酒宴は夜になればなるほど、弾けてくるものだ。

陽輝が背にしているコンテナの奥、暗い影を落とした一角に、ゴソっという物音がした。

ネズミが通れるくらいの排水溝の蓋が開いたようだったが、陽輝はそれに驚くことはなかった。

「遅かったな、沙……、いや、ジローだっけ？」

「ウゲー、なにこの悪臭満載のヘドロ・ロード。こんな所に住んでたら、そりゃ、性格悪くなるワ〜」

真っ黒になった小さな龍が排水溝から出てきて、陽輝の背後に回った。

昼間来た時、沙龍の目が「心配すんな。後で来る」と言っていたのを、陽輝は見逃してはいなかった。

それは、おそらく戦場で心を許した者同士でなければ分からないような、信頼の上に成り立つ視線会話なのだが、沙龍自身は陽輝と共に戦場を渡り歩いた経験はない。

つまり、これは緑麗の経験なのだ、と思うことは、沙龍にとってはあまり歓迎できないはずのものだが、不思議と嫌な気分はなかった。

相手が陽輝だからだろう、とも思う。

これが九雷なら、暗澹たる嫉妬心を覚えるところなのだ。

「鍵探すの大変だったんだからネー。後で絶対なんか貰う。陽輝が大事に隠し持ってる仙酒『名月』は絶対貰う」

「ぼるな……。あれを手に入れるために俺がどんだけ苦労したか……。って、なんでお前がそれを知ってたんだよ？」

以前、陽輝の宿舎に立ち寄ったとき、こっそり見つけていたのだ。

「酒飲みが酒を隠す場所なんて知れてんのよ。……はい、できたよ」

と、幼龍の小さな手でなんとか手錠の鍵を外すと、陽輝はやっと自由になった。両手を前に持ってきて、嘆息した。

「わりーな。色々借りができちゃった」

「気にスンナ。『名月』と『TAIZAN』がタダで手に入ると思えば、なんのこれしき」

「……なんで増えてんだよ。強欲は身を滅ぼすぜ」

そう言って、陽輝はそれが九雷に言われた言葉だったと気づいて笑った。なぜ笑ったのか、沙龍には分からない。

「よし、ミッション・スタートだ」

陽輝は黒い龍の体を掴み上げると、まずは革ジャンの中に突っ込み、ファスナーをかなり上の方まで上げる。

その扱いは、奏欽とは百八十度違って、ほとんど物扱いだ。

「ごるあ！ 欽チャンを見習エー」

そんな文句をこぼす沙龍を無視して、ベルトの裏側から二センチ角ほどの消しゴムのようなものを取り出し、鉄製の扉の開閉部分に塗りこむように貼り付けた。

身体検査をした奴が素人でよかった、と陽輝は思った。

このプラスチック爆弾もそうだが、陽輝はこういった物騒なものを複数隠し持っている。

破壊工作部隊に居た頃の名残でもあるのだが、大将自らこういうものを持ち歩いているのは陽輝くらいのもんだろう。

「三秒後に爆発がくる。身構えておけ」

腹に収めている沙龍にそう言うと、陽輝はコンテナの影に身を伏せて、その瞬間を待った。

しかし、

(やべえ、ちよつと量を間違えたか……?)

そう思った時は既に時は遅く、鉄扉どころか、倉庫のほとんどを爆破させるような大きな爆音が轟いた。

「ゲホ」

爆発の余波にやられたものの、陽輝は無傷だった。

全身が煤けることくらい、却って暗闇に紛られてラッキーくらいに思っているはずだ。

「……どーしてもっとスマートにできんだ、スマートに」

頭だけ出した沙龍がぼやくのと同時に、陽輝はその幼龍の頭をはたくように、革ジャンの中に押し込んだ。

誰かが——それもかなりの人数が——やって来る気配がしたからである。

爆発を聞きつけた龍族の兵士だろうが、足音を立てない彼らはこの水晶宮では

一番厄介な存在かもしれない。

倉庫の暗闇がなくなつて、開けた先の視界は、広い踊り場のようになっていた。上下に続く階段が見える。

いかにも軍事施設の一角のような雰囲気だ。

水晶宮は華やかな『表』とは違つて、軍事要塞としての『裏』がある。

当然、配電室や管制塔みたいなエリアもあつた。ここもそういつた『裏』の一角だろう。

大きな柱に隠れて、逃走経路を目で探しながら、陽輝は小声で沙龍に聞いた。

「ここがどこらへんかつての、分かるな？ どっち方面へ行けばいい？」

「うーん、排水路は頭に叩き込んだけど、普通サイズでの地図はあんまし……」

「役に立たねえな！ 小龍の方がまだ道案内になるぜ!？」

「もしもし？ こんな騒ぎにしちやつて、敵を呼び寄せたのは誰なの？」

「……すみマセン、俺でした」

その時、「居たぞ！ こつちだ！」という声が出て、柱に弾着があつた。

思わず、無意識に応戦しようとした陽輝は懐に手を突っ込んだが、そこに、い

つもあるはずのM29はない。

「チツ……!!」

「武器にタヨルナー」

「黙ってる!」

もう二、三発の銃声が出て、陽輝は首を引っ込めながら、革ジャンの襟の後ろに手を入れた。

これも無事だ。

小さなパチンコ玉のような、銀色の弾である。目くらまし程度にしかならない照明弾だが、少しの刺激で炸裂するのが便利である。

視線の先、銃を撃ってくる龍族の兵士達の横手に、開放されたままの出口があるのを確認すると、陽輝はそのパチンコ玉を彼らに向けて指で弾いた。

「……っ!」

途端に、辺り一帯が、強烈な光に満ちた。

視界を奪われた兵士達は、闇雲に銃を乱射する者も居たが、そんなものが当たるはずがない。

陽輝は目を伏せたまま、兵士達の脇を素早くすり抜けた。

ズウン、という腹に響くような爆音が遠くで聞こえた。

「はて……」

九玄は足元でまだ少し動いていた男の手を踏みつけながら、顔を上げる。

水晶宮の本殿にあたる建物の勝手口、厨房と連結した業者用の出入り口から堂々と変装もせずに入ってきた九玄は、厨房で忙しく立ち回る料理人達の手を止めるほどに目立っていたが、料理人達のそれは別に不審人物に向ける視線ではない。

いきなり現れたこの美女に皆、ボーツとなっただけである。

しかし、そんな彼らにニコニコと笑顔を返しながら、大広間のほうに抜けようとする九玄を、さすがに巡回途中の龍族の兵士が呼び止めた。

東海龍王家の私兵である。

そして、いつしかわらわらとその私兵達が寄って来たので、力技で黙らせたの

だった。

「今の爆発はなんだ？ 爆竹でも鳴らしてるのか？」

まだ意識がありそうな、手を踏みつけている男に聞くと、「知りません」という息も絶え絶えな答えが聞こえる。

「なら、寝てろ」

と、大刀の柄で思いっきりその男の頭を殴った。男は気絶する。

「とりあえず、管制室に向かうのが先だな」

九玄は本来、密かに工作ができるような要員ではないのである。

『八方結界』を作り出しているはずの管制室にたどり着くまでに、こんな立ち回りを何度も繰り返していれば、すぐに大部隊が押し寄せてきてしまうだろう。

九雷から預かったこのヘッドホンタイプの無線機は、『八方結界』の中では使えるが、外部との連絡はできない。

帝都での状況と同じである。

念のために、ずっとオンにしてあるが、声らしき声は今のところ拾えていない。

「あー、あー、本日はお日柄も良く……、じゃなかった、本日は曇天なり」
とりあえず、定期的にこちらからの発信は続けよう、と思った。

同じ頃、地下の運搬口からの潜入を試みて成功した公務員は、九玄とは正反対で、こういう裏仕事には慣れていた。

元々、人界に居た頃も、こんな人知れずの仕事しかしてこなかったのである。

「なんだ、今の爆音は？ 俺以外にも誰か忍び込んでる奴が居るのか？」

人一人がやっと通れるほどの、簡素な鉄棒だけの階段を昇っていくと、薄暗い小部屋に出た。部屋とも言えないほどの、単なる配線スペースである。

地図は既に頭に入っている。

丁度、この真上が水晶宮の幾つかあるエレベーターの最下層にあたるはずだった。

途中、アーマライトが邪魔で、何度も捨てようかと思ったが、そんなことをすれば、報酬は半減する。なんとか我慢した。

重量は四キロ程度で、それほど重いわけではないのだが、一緒に預かったS&WM 29と共に、こんな厄介な銃を常に携帯している酔狂な男に会ってみたいとも思ったのだ。

公務員は一応自分もガンマンであるので（ハンドガン・オンリーではあるが）、この二つの銃がかなりの改造をされていることが分かる。

とても、素人には扱えない代物に見えた。

「なっ……!? 誰だ、お前は」

廊下に出た途端、黒いスーツを着た男にバツタリ遭遇して、公務員は「あちやー」という顔をした。

しかし、日々、冥府最下層のクリーチャーや亡者を相手にしている分、かなり度胸もあるようだ。

「宅急便です」

そう言いながら、龍族の急所はどこだったつけ、と思いつく。次に、首の骨を折るほどの力で手刀を食らわした。

声もなく崩れる男に、公務員はいま繰り出した右手をブンブンと振った。

「痛え……。新しい手は、大事に使わなくちゃな」

一方、こちらは未だに自分達がどこに居るのか分かっていない二人である。

私兵に見つかっては逃走——の繰り返しで、今は客室のような部屋に入り込んでいた。

「そういや、沙龍、お前、何ヶ国語か喋れるようだが……」

こそこそと箆笥を物色している陽輝が急にそんなことを言い出した。

「ジローです」

「ああ、そうだったな。……つうか、もうどうでもいーじやねえか。バレちや困る時期は過ぎたんだろ？ 無敵の俺様がついてんだから」

「ほー、無敵ねー。ホー。丸腰のくせに、よー言うワ」

「うるせえよ。……で、どうなんだ？」

「ああ、一応、中国語と日本語なら分かるけど……、なんで？」

「おめーには軍用の符牒が通じないだろうから、なにか共通言語を作っておいた

方がいいと思つて」

「なるほど」

「ドイツ語とか、喋れるか？」

「ハンバーガー？ フランクフルト？」

「……。フランス語は？」

「えーと……。エスカルゴ？」

「……。イタリア語は？」

「アイスクリーム？」

陽輝は頭を抱えた。

「それは、イタリア語ですらねえ！ 要するに喋れないんだな。……。じゃあ、ロシア語は？」

「ムリ。つーか、日本語でいいじゃんよ。いや、それよりも、そんなことしても無駄なんじゃ？ 天界住民は、皆、外国語だろうが分かるって話だし……」

「ああ、結界内は例外なんだ。今、水晶宮には『八方結界』が掛かってるからな。俺達がいま外国語で喋ってれば、龍族の奴らはほとんど分からねえだろう。」

勤勉な奴じゃない限り」

「へー、そうなのか。陽輝はいま言った言葉、全部喋れるの？」

「まあ、しばらく人界をブラブラしてたこともあるからな」

「ホホウ。ちよつと意外な一面を知ってしまった」

「んじや、なにかあったら日本語だな」

「ラジヤ。……ところで、第一目標分かってる？ 『五行砲』のコントロール・

ルームだよ？」

「ああ、分かってる。……いいモン見つけた」

陽輝がニンマリと笑うので、沙龍はなにか武器でも見つけたのかと思ったが、陽輝が箆笥の奥から引っ張り出してきたのは酒瓶だった。

「あのナー……、どっかのアル中じゃあるまいし、この事態に酒って、なにになるんだよ」

「アルコールは利用価値が高いんだぜ？ 別に飲むつもりじや……」
と言いながら、全く正反対のことをしている。

味見のつもりで一口、咽に浸透していく液体が、陽輝の活力にもなった。

丸一昼夜、なにも口にしていなかったの、その幸福感は言い様がない。

「酒に十の徳あり——か」

昔、緑麗がよくそう言っていたのを思い出して、陽輝はふと呟いた。

「なあ、沙龍。なにかを成したいのに、その方法が分からない時って、お前、どうする？」

同じく、小さな体で箆笥に頭を突っ込み、なにやら物色している沙龍は、あまり陽輝の言葉を聞いていない。

「んー？ 方法を探せばいいんじゃない？」

「だから……、その方法が見つからない時だよ」

「手当たり次第やってみる……とか？ あ、私もイイモノ発見したぞ！ なんだ、ここの住人、もしかして軍関係者？」

沙龍が引っ張り出してきたのは、天界軍が制式採用している無線のヘッドセットだった。

「貸してみる。これには大抵IDが入ってる」

陽輝はそれを奪うようにすると、イヤホンの外側を覆ってる部分を見た。

「やはりな。この番号は、東方軍の士官用だ」

「一般招待客かな？ だったら、欽チャンのお婿さん候補だね」

「なんだそりゃ」

「知らないの？ 今やってる『新年会』って、欽チャンの『お見合いパーティー』らしいよ？」

「ふーん……」

「気になる？」

ズバリ、沙龍がそう聞いても、陽輝は苦笑しただけだった。

奪ったヘッドセットをつけて、一応、ダメ元で自分専用の周波数に合わせてみた。

「……!?!」

録音されたような機械音声が繰り返し聞こえる。

それは、もしこのチャンネルにアクセスできたら、特定の周波数に切り替える、という指示を含んだアナウンスだった。

その通りにしてみると、馴染みの声が拾えた。

陽輝は思わず、ガッツ・ポーズをした。
「九玄姐さん！ 今どこに居る!？」

赤帝君は夕闇に浮かぶ水晶宮をただ、じつと見ていた。

ライトアップされたその優美な宮殿は、彼にとっても馴染みの深い場所である。

先代の青龍、敖広に師事していた頃は、よくここにも通ったものだ。

敖広の双子の弟である敖光ともよく顔を合わせた。

顔はそっくりなのに、性格はまるで違う二人だ、と赤帝君は思っていた。

敖広——青帝青龍広君——は、大らかな熱血漢だった。

そして、東海龍王敖光の方は、典型的な沈思黙考の実直な龍王だった。

二人とも人望が高く、能力もズバ抜けていたので、敖光の息子、敖坤はよく『親の七光り』と陰口を言われてきた。

平均的に見れば、敖坤も有能な軍人であり、有能な龍王なのだが、親や伯父が素晴らしすぎると、『普通の優秀さ』は霞んでしまうものだ。

それで卑屈になるほど狭量な男でもなかったはずだが、赤帝君が知っている限り、敖坤が心の底から笑っているところなどは見たことはなかった。

「まだ、止まる気配はなさそうですね」

赤帝君が双眼鏡から目を離すと、隣の特務の軍人、五雷ごらいが言った。

九雷の直属の部下ということになるが、今は『水晶宮包囲部隊』のスタッフの一人である。

赤帝君は客員参加のような形になっているが、同じ部隊に列を成している以上、全てのスタッフが同志である。

しかも、数千年ぶりのクーデターという非常事態にあっては、普段は全く違う組織に与しながら、結束のようなものも感じる。

「あれが帝都に完全に向いてしまえば、敖坤も言い逃れはできんだろうに……」
「するつもりはないんでしょね」

五雷が、報告のためか、自分の端末を取り出す。

二人は斥候という役目で、仮説本営の場所からやや前進してここまでやって来たのである。

「……」

赤帝君は、もう一度、今度は直視で水晶宮を見た。

海側を向いていたはずの巨大な砲門は、既に九十度以上回頭している。

中央の砲塔に付随する左右の尖塔も、同時に少しづつ回転しているようだった。

「敖坤は敵じゃないぞ」

もう一人、斥候役を買って出た飛龍が、呟いた。

九玄から、やかましく『勝手に行動するな。一人で突っ走るな』と念を押されたので、今のところは大人しく九雷の命令に従っているが、いつ風火輪でひとつ飛びしてしまうか、分からぬ危うさがある。

といっても『八方結界』が解除されない限り、飛龍もあの宮殿の中に入ることには出来ないのだが。

「どういう意味です？ あれを見れば明白でしょう？」

赤帝君がそう聞いても、飛龍は上手く答えられない。

ただ、そう思うだけなのだ。

「むしろ、奏欽の方が妙な感じがする」

「……？」

九玄は相変わらず身奇麗なスタイルで、洒落た戦闘服姿がよく似合っている。対して、陽輝は着ているものもボロボロで、煤だらけで血だらけだ。

更に、ヨレヨレになった革ジャンから顔だけ出している沙龍は、汚れたぬいぐるみにしか見えなかった。

あまりにも違いすぎる双方のいでたちに、思わず九玄は笑いそうになった。いや、既に口元を押さえて笑っていた。

「……ナンダヨ。なにがおかしいんだよ。これこそ、歴戦のツワモノの姿なんダゾー」

「お前、その姿でも喋れるのか」

「うん、欽チャンがこれを巻いてくれたら、喋れるようになった」

沙龍は、もはや元の色が分からなくなった赤いリボンを示した。

「それで？ 姐さんのほうはどんな状況なんだ？」

陽輝が九玄に端末を借りて、目を通した水晶宮の見取り図では、『五行砲』のコントロール・ルームは中央砲塔の最上階にある。

九玄が目指している『八方結界』の管制室は、それとは別で、恐らくどこかの地下だろう、と陽輝は言った。

「かなりの私兵が徘徊してるんで、時間がかかりそうだが、なんとかなるだろう」

「どちらも中ボスが陣取ってそうだな……」

いま三人が居るのは、望楼に当たる建造物の中層である。

幸い九玄の居た厨房付近と、陽輝の居た客室は距離が近かったのもあって、すぐ合流できたが、陽輝はまだ丸腰のままだし、九玄は目的を達していないし、あまり進展はないということになる。

しかし、やはり心強さは格段に違った。

「今後、この周波数で連絡は取れるな。俺はコントロール・ルームへ向かう。沙龍は姐さんに預けたほうがいいかもしれねえな」

「いや、連れて行ってくれ。欽チャンとの約束がある。あれを阻止するのは私の役目だ」

「しかし……」

陽輝は渋った。

沙龍を五行砲の発射装置に近付けるのは、リスクを伴う。万一のことがあるからだ。

「陽輝は『無敵』なんだろう？」

そう言われても陽輝は引き下がらなかった。

「もし、お前が普段の姿で、俺が十時間惰眠を貪って、さんざん飲み食いした後、の万全の状態なら、お前の言うことは百パーセント聞いてやる。しかし、ここは、お前が俺の言うことを聞く場面だ」

「フーン……」

と、沙龍は笑みとも怒りともつかぬ顔でつまらなさそうに言うのと、九玄をじつと見た。

そして、「娘々、頼む」と短く言った。

九玄はやれやれ、と苦笑したが、沙龍の意図を汲んでやった。

「陽輝大将、だったら、役目を交換しよう。私が沙龍を連れて、コントロール・ルームへ行く。貴方は『八方結界』の解除だけをしてくれ」

「どうしてそうなるんだ」

「私は沙龍の味方だからな」

「俺だって味方だぜ？」

両手を広げて誇示する陽輝は、心外な、とでも言いたげだ。

「そうか？ 貴方には沙龍の志を護る意思はないだろう？ 親友のために、その

恋人を無事にここから連れ出すことばかり考えている」

「……!？」

「かつての貴方は違ったはずだ。緑麗を唯一の、命を預けられる戦友としていた貴方は、そんな打算はしなかったはずだ。それが、貴方の、『緑麗』と『沙龍』を別個に見ている結果だと言うのなら私はなにも言わないが、そうではないはずだ」

九玄がビシッと語る姿を、沙龍はポカンと口を開けたまま見ていた。

「参ったね、こりや……」

陽輝もまた、完全に九玄の言葉に毒気を抜かれていた。

「確かに、姐さんの言う通りだ。どうも、俺は、色んな大事なことを忘れてたよ
うだ」

「長年生きてると、たまに忘れるさ。私だって、よく忘れる。だから、それを思い
出させてくれる存在が必要なんだろう？」

「娘々、カツコイ……」

沙龍が呆けたまま言った。

「茶化すなよ。じゃ、当初の予定通りだな。後で落ち合おう」

そう言って、時間合わせをした二人と一匹は、別々の方向へ向かった。

奏欽はずっと新年会の席に居たわけではない。

途中『お色直し』や『休憩』と称して何度も席を立ったし、身代わりの侍女を御簾の中に座らせたりもした。

こういう時、顔の半分が隠れる龍王の冠や、ほとんど外側からは見えない御簾は便利なのである。

やっと午後の部が解散という時間になって、奏欽は身軽な衣装に着替えると、水晶宮の天守閣とも言える中央砲塔の地下エリアに向かった。

確か、この先の直通エレベーターで砲塔の最上階まで行けるはずである。

奏欽は、ずっと東海龍王家の宝刀である『龍王剣』を探していた。小さな物ではないのですが見つかるはずなのだが、普段納められているはずの宝物庫にはなかった。

だとしたら敖坤が確保しているのだろうが、見た限り帯刀はしていない。

奏欽が常に持っている懐剣は伸縮自在だが、龍王剣にはそういった機能はないはずである。

最後の望みというか、『龍王剣』がそこにあっては困るのだが、もうコントロール・ルームに設置されてしまっているのではないか、と思い、ここまでやって来たのである。

「……？」

冷たい廊下の先に、なにものかの気配がした。

光熱関係のパイプや配線が剥き出しになったその廊下は、作業用のもので、下働きの者ですらほとんど通らないような場所だ。

「誰——」

奏欽は、威厳をたたえた声を放った。

「ここでなにをしている——」

暗がりの中に投げた奏欽の言葉は、別人のように鋭い。

誰だか分かっていたわけではない。もしかしたら水晶宮の従業員かもしれない、と思った。

だが、姿を現したのは、奏欽にとって唾棄すべき男の一人だった。

「貴女の狙いは、やはり『五行砲の阻止』ですか」

近衛隊長の呉謙が両手を挙げて出てきた。

敵意はありません、という意味だろうが、その全身から発する緊張感と態度を裏切っている。

「貴様、いい加減にこの水晶宮から出て行け。私は滞在を許可した覚えはない」
普段こんな物言いをしない奏欽が、この龍王モードで喋る時には相当の迫力がある。

険しい瞳と、全身から発する『火行』の激しい奔流にあっては、小者ならば腰を抜かすだろう。

「これは異なることを。ここの主は敖坤様ではありませんか」

「腑抜けた男に龍族の安住の地を守る資格などない」

「勇ましいことですが……、敖坤様は腑抜けたわけじゃありませんよ」

「貴様と話す時間などない。とつとと去れ」

「そうはいきません。貴女の行動は、我々にとって最大の障害になる——」

呉謙はそう言い終わらないうちに仕掛けた。一瞬光ったサーベルが、奏欽に素早く迫る。

しかし、奏欽はそれを完全に読んでいた。

ガツ

重い金属音がして、閃光が走った。

呉謙は奏欽の横手に回りこんだ上でサーベルを振り下ろしていたが、奏欽は肩口にかざした懐剣でそれを受けていたのだ。

右手には懐剣の柄を、左手には鞘を握り締めた奏欽は、この鞘すらも武器として使う。

奏欽は呉謙のサーベルを瞬時に跳ね上げ、踊るように身体を捻って、呉謙の腹部に、全体重にプラスした『火行』の氣を送り込んだ懐剣の鞘を押し込んだ。

重量の軽い奏欽ならではの攻撃法である。

そのまま後ろの壁に激突した呉謙だったが、ダメージは致命傷には至らないようだった。

「あまり龍王を舐めるなよ。たかが近衛隊長に遅れを取る私ではない」

「これは、失礼を……」

呉謙は咳き込みながらも笑顔を作った。まだ自分が優位だと思ったのだろう。純粹な物理攻撃では、女性の奏欽に負けるはずがないと思っっている。しかも、奏欽の技はほとんどが保身用の受動的なものだと推測される。

さらに、呉謙は奏欽と同じく『火行』の属性を持っている。『火行』の五行術ではあまりダメージを受けないのだ。

しかし、それだけでは呉謙の計算ミスである。奏欽には『二行マイスター』としての特殊能力があるのだ。

「では、本気でお相手しましょう」

「笑止。貴様の『本気』など、龍王の足元にも及ばぬことを教えてやる」

奏欽が右手に炎の塊を、左手に『木行』を濃縮させた空気を掲げた時だった。「その必要はねえな」

割って入ってきたその声に、二人とも視線だけを向けた。

十字路になったその通路の北側である。オレンジ色の髪が、まず目に入った。

陽輝が、スタスタと奏欽の傍にやって来て、両手を軽く広げて見せた。

「……？」

なにも持ってない、という意味なのは分かったが、なぜ陽輝がわざわざ呉謙にもそれをばらしてしまうのか理解できなかった。

「コイツは俺が殺る。お前が手を汚すまでもねえ」

「勝手なことを！ ……っ？」

奏欽が抗議しようとして目を剥いた時、体勢を立て直した呉謙が陽輝の背後に迫っていた。

そのサーベルを鏢元で止めたのは、陽輝の左手である。

右はほとんど動かないらしく、添えているだけだ。

「お前の技は、結局、九雷のコピーなんだよ！」

しゅくちほう縮地法（注1）を使つて、瞬時に移動しつつ繰り出すこの剣技はオリジナルでない限り陽輝には見切れる。

呉謙の素早い剣さばきも、全てオリジナルである九雷の技法を真似ているだけなのだ。

「コピーにはコピーの意地もあるんですよ、先輩！」

奏欽は迂闊には動けない。自分の鼻先にあるサーベルの切っ先は、二人の力の均衡が崩れてしまえば、すぐにでも動き出すはずだ。

「そんなに俺に蜂の巣にされてえのか……！」

「丸腰でよく言いますね」

わずかに、呉謙の押し込む力が勝ってきた。振り下ろしている格好の呉謙の方が、それを下から持ち上げている陽輝よりも、確かに有利である。

しかし、そのギリギリの均衡を破ったのは、陽輝の腹から顔を出した黒いものだった。

「バーカ。だから小者だって元帥に言われるんだよ」

「……っ!？」

呉謙が沙龍に気を取られた隙に、陽輝は肘で呉謙の腹を強く突いて、その体を数メートル吹き飛ばした。

反動で手から離れたサーベルは、明後日の方に飛んでいく。

「ちよつと……！　なにす……！」

奏欽はその一瞬の攻防を理解する間もなく、陽輝が自分の着物の裾を乱暴に捲

るので面食らった。こんな非常時になにをしようというのか、この男は！
露になった奏欽の白い脚が、沙龍の目を奪った。

「わおー」

が、陽輝の狙いは勿論、白い脚線美ではない。

奏欽が太腿に装着しているガードベルトに、陽輝の欲しいものがあるのだ。
そこに小振りのホルスターが挟んであり、五百グラム程度の金属が納まっているであろうことは、昼間抱き寄せた時に気付いた。

「……！」

ホルスターから抜いて発砲までがわずか一秒にも満たない。どんな達人でも、
二倍以上の時間がかかるその動作で、勝敗が決した。

陽輝が撃った一発は、吹き飛んだ呉謙の右肩を貫いた。

これで、帝都での借りはまず返した、ということだろう。

「おー、さすがー」

呑気に感想を漏らしている沙龍は、腰を抜かしている奏欽にお茶目目配せをした。

「FNブローニングM1910。威力は並だが、野郎一人始末するにや充分だ」
陽輝が手にした銃をしげしげと眺めながら言う。

「ふーん。女性用の護身銃ね」

「……とって、俺が大昔、奏にやったものなんだが、まさか未だに持ってるとは思わなかったぜ。しかも収納場所まで俺のリクエスト通りって、健気過ぎて泣けてくるな」

「……！」

奏はなにか言いたげに息を飲んだが、腰が抜けているので声も満足に出ないらしい。

「それが欽ちゃんのいいところじゃないか。陽輝なんかすぐなくしそう」
「フフン、おめーんところは逆だな」

そんな会話をしつつも、陽輝も沙龍も、表情は半分怒っている。この近衛隊長が、諸悪の根源の一人であることを思い出したかのようだ。

右肩を押さえて座り込んでいる呉謙に近付きながら、陽輝はもう二発、両脚を撃った。逃げられないようにという措置だろう。

「外道だワ……」

「九雷だったら、自害させるぜ？ どっちが外道だよ」

「陽輝大将、少し貴方を甘くみていたようですね」

苦しそうな顔の呉謙に対しては、陽輝よりも沙龍が目を吊り上げていた。

「呉謙隊長、前に言ったことは嘘だったのか？ 平和な治世を望んでるヤツがなぜ龍王家に漬け込んでクーデターなど起こした」

「まさか……、緑麗様？」

息を切らす呉謙の視界はそろそろぼやけていることだろう。

しかし、この黒っぽい小さな動物が元将神であるということは分かったようだ。

「フ……、嘘ではありませんよ。陛下に誓った忠誠も、平穩を望む私の心も、全て嘘偽りなどありません」

「では、なぜだ。原理主義とやらか？」

「そうですね……。陛下以外に『特別』はあつてはならない。貴女の存在は、私の公私にとって最も忌むべきものですから……」

「だったら、お前一人で私を殺してくれればいいだけの話だろう」

「そんなに単純なものでもないのですよ。貴女はまだ敖坤様のお心を知らない……。『五行砲』は……、必ず発射されなければならぬ——！」

そこまで言つて、呉謙は近衛府に許された自害の方法を選んだ。

本来、神に自刃は許されない。しかし、皇室の機密を握る近衛府だけはこの限りではない。彼らは、白い制服の内側にそれを包む全ての有機物を蒸発させることのできる自爆装置を仕込んでいるのだ。

「……」

沙龍は暫くその自爆の余波をやりすごし、陽輝を見上げた。

その目が『欽チャンのところに行つてあげて』と言っているのが分かったので、陽輝は沙龍の体をその場に下ろした。

沙龍は見事になにもなくなつた床の一角を見つめる。

(どういうことだ……。呉謙は最初から敖吉ではなく、敖坤に同調していたということか……。?)

そこに、

「あー、もしかして、あんた？ 西方軍の大將っての——」
公務員がやっと到着した。

(注1) 縮地法……元は仙人の術とされている、瞬間移動の技。

陽輝にアーマライトとM29を渡す公務員に、ミニ黄龍ならぬミニ黒龍のような沙龍がブツブツ言い始めた。

「なんで公務員がここに？ 誰がお前に仕事を頼んだんだよ。お前のボスはここに居るってのに」

「……？ いや、俺のボスはこんなラブリーなぬいぐるみじゃなくて、もつと偉そうでガキみてえな、胸のない女——」

と、最後まで言い終わらないうちに、ガシツと短足の蹴りが公務員のもさもさ頭に入った。

「オノレはく！ 心の目すら死んでるのか！」

そのど突き合いを余所に、陽輝はやっと自分の手足が戻ってきたような感覚でアーマライトを担ぎ、M29をホルスターに納めた。

「立てるか……？」



腰の抜けたままになっていた奏欽は、無言で陽輝の手を取って立ち上がったが、表情は険しいままだった。

呉謙の自爆シーンを見てしまったからではない。陽輝や沙龍が余計なことをしたからでもない。ただ、こういう時、己の無力を感じるのだ。

それに、陽輝に対する感情だって、まだ整理がついているわけではない。

さんざんうなされ、怒りを重ね、最後は修復不可能な所まで来てしまったから離婚したのである。年月が経ったからといって、そういったものが全て清算されるわけではない。

「一応、お礼を言っておくわ、ありがとう」

「……」

陽輝も、なんと言っているのか分からなくなった。

ただ、気丈に振舞う奏欽を諦め半分に見守るしかない。

奏欽は乱れた衣装を数秒で直して、沙龍に言った。

「ジローさん、この先のエレベーターでコントロールルームに行けるわ」

「ラジヤ。公務員、ツイでだ。お前も来い」

「えー、なんでだよ。俺の仕事はここまでだろ？」

「んじや、新たな仕事だ。私の脚になれ」

「へいへい……、人使いの荒いこつて……」

地下の管制室にたどり着いた九玄は、ここまで来るのに相当数のザコを薙ぎ倒してきたので、さすがに疲れを感じていた。

「あー、シンド……。もう歳か……。い、いや、そんなことは断じてあつてはならない！ 気のせいだな、きつと！」

そんな独り言を言いながら、この先に中ボスクラスの敵が待ち構えているのを覚悟してドアを開けたのだが、そこは意外にも無人だった。

「これか」

九玄の目の前に、直系三メートルはある球体のようなものが浮かんでいる。

装飾なのか、それ自体が術の効果を発しているのか分からないが、太極図が描かれていた。

そして、その太極図を囲むようにして、東西南北に加えた四方、すなわち、八方に円筒形の装置が設置されている。

それぞれの装置から、薄く黄色い光が立ち昇っており、中心の球体を守っているような幻想的な空間を造り出していた。

「フム……」

九玄の仕事はこの装置をオフにすることなのだが、壁一面のコンソール・パネルや、部屋の隅に設置されたキーボードを見ても、どこをどういじればいいのかサッパリ分からない。

試しに、チョイっと、大刀の先で円筒形の装置を突付いてみると、案外脆く倒れた。

すると、一筋の光が消え、なにかがガクンと上下するような振動があった。

「まあ、要するに、オフにするってことは、この装置自体がなくなれば同じことだよな……?」

飛龍のことを言えない論理展開である。

「ン……？」

高いカラマツの木の上で水晶宮の様子を見ていた飛龍が、なにかに気付いた。その木の根元、野外にわずか数分で作られたテント型の『司令部』では忙しくキーを叩くオペレーターが数人、各所から情報を集め、それを各スタッフに送っている。

「解除されました！ 侵入可能です！」

オペレーターの一人が叫ぶと、九雷は半分だけ腰掛けていた簡易デスクから地に脚を下ろした。

「よし、作戦開始だ——」

九雷の合図で、水晶宮を三百六十度包囲、待機していた部隊が突入を始める。

「各員に告げる。人質一名、及び協力者四名の救出と生存確認までは威嚇以外の戦闘行動を禁止する。先行第一部隊は速やかに行動せよ。以上、健闘を祈る」

飛龍はその号令を聞かずに、もう空へ飛び出していた。

「夜逃げしちやっただって感じ？」

公務員の肩に乗った沙龍は、その『元コントロール・ルーム』を見て、そう言った。

いかにも引越しの直後というのが分かる、なにもない部屋なのである。重たい機械があったであろう場所には、くつきりとその跡が残っていた。

「やっぱり、内緒でどこかにそっくり移動させたんだわ」

奏欽が憂鬱そうに呟いた時、急に、甲高い電子音がした。

「……？」

「あ、俺の携帯か」

公務員が言いながら画面を確認していたが、大した情報ではなかったのだろう。すぐに切ったようだ。

「待てよ？ 八方結界は解除されたってことか……？ おい、九玄姐さん、聞こえるか？」

陽輝が無線で呼び掛ける。

と、同時に、ほぼ全景が見渡せる『元コントロール・ルーム』の広い窓に飛龍がへばりついてきた。

「緑麗、無事だな！」

「……！」

奏欽はなにかに閃いたように、急いで窓を全開にし、飛龍に叫ぶ。

「敖開！　お願い、私を連れて行って！　五行砲のコントロール・ルームよ！」

敖坤の居る場所！　分かるでしょう!？」

飛龍は戸惑うように奏欽を見て、次に、公務員の肩に乗ってる沙龍を見た。

そこに敏く気付いた奏欽は、沙龍の体を公務員からひったくると、

「沙龍さんも一緒なら、いいのね!？」

沙龍もわけが分からなかったが、奏欽の様子が必死なので、なにかあるのだろうと任せることにした。

それに、いつもは「敖開」と呼ばれたら言い返す飛龍の決まり文句がない。ということは、奏欽に対してはそれを許している、ということなのだろう。

「飛龍、欽チャンの言う通りに——」

「分かった」

奏欽の体を抱きかかえるようにして、飛龍が一旦、建物から離れた。

残された陽輝と公務員は啞然としていたが、奏欽がなぜ必死なのかは大体分かった。

開け放った窓から見える『五行砲』の砲門が、既に西に向いていたからである。

もはや新年会どころの騒ぎではなかった。

昼の部が終わって、ホスト役である敖坤も奏欽も会場から姿を消し、思い思いに会場に残る者、部屋へ引きあげる者達も居たが、突然、天界軍の部隊がこの水晶宮に押し寄せてきたのだ。

ただ単に奏欽の『見合い相手』として呼ばれただけの者はわけの分からぬままに拘束され、敖坤の意を汲んだ者達は多少抵抗したが、すぐに無条件降伏をせざるを得なかった。

『水晶宮包囲部隊』の敵は、あくまでも『東海龍王家の私兵』である。

これは、数にすれば、四方軍の一個中隊くらいは居るはずだが、統率が取れていないだけ、包囲部隊の方に分があった。

統率すべき敖坤が半分行方不明で、なんの指示もないからである。

しかし、敖坤は自分が行方不明だという自覚はなかっただろう。なにせ、本人

は自室で酒を飲んでいただけなのだから。

飛龍はその気配を探って、奏欽を龍王の私室に連れて来た。窓をぶち破つての、いささか乱暴な訪問である。

その拍子に、奏欽が腕に抱いていた沙龍も転がって、机の脚にぶつかっていた。

「敖開、ここは敖坤の部屋じゃないの——」

文句を言おうとした奏欽も、ただまんじりとそこでグラスを煽る敖坤の姿を認めると、キツと唇を噛み締めた。

「色々、骨を折られたようで、欽姫。お探し物は見つかりましたか？」

「……！」

敖坤の座る一人掛けのソファーには、奏欽が探していたもののひとつが立てかけられていた。

代々の東海龍王が己の武器としてきた『龍王剣』である。

全体的に薄い青みを帯びた、美しさよりも、実用性を追求したような豪剣。

抜き身の刃も例外なく青い色を放っているので、一見、金属には見え、潰す

ことはできても斬ることはできないのではないかと思えるのだが、奏欽は一度、この剣で敖坤が太い松の木を一刀両断しているところを見たことがある。

「なにを……、していたのよ、あなたは！」

怒りに震える想いで奏欽は詰った。

「別に高みの見物をしていたわけじゃありませんよ。五行砲は最初から脅しでもなんでもなく、敖吉殿とは関係のないところで一射する予定なのです」

「なによ、それ……、一体どういうことよ。貴方の目的は、なんなのよ!？」

「言ったじゃないですか。叛逆罪になろうとも、僕はもう自分の行動を決めている、と。それを、貴女に邪魔されないようにするために多少の細工はしました
が」

「その『細工』のひとつが陽輝の拉致？」

「そうです」

「そして、敖吉をその気にさせて、帝都の混乱の最中に殺したのも、貴方の計画通りというわけ？」

「そうです」

「近衛の隊長をそそのかしたのも？」

「それは……、ちよつと違います、結果を見れば同じでしょうかね」

「……」

奏欽は拳を握った。

龍王会議で敖坤が言っていた言葉には、全て『信』などなかったということである。

「少しだけ、期待しましたが……。やはり、欽姫には僕を止めることはできなかったわけですね」

奏欽がさらにギョツと拳を握るのを、飛龍は黙って見守っていた。飛龍にはなぜか、敖坤の悪意というものが見えない。だから、飛龍にとって敖坤は敵にはならないのだろう。

「僕の勝ちですよ、欽姫」

「それはまだ分からんぞ、東海龍王」

机の下からそんな声が聞こえて、三人ともがそちらを見た。

今まで目を回していた沙龍がむっくりと起き上がる。

「ジローさ……、え……？」

沙龍は百四十五センチの身長を得て、薄汚れた姿のまま、そこに居た。一月前、水雲宮から出掛けた時のままの格好である。

どうして人間の姿に戻ったのかは自分でも分からなかったが、まさか、机の脚に頭をぶつけたのが原因だとしたら、切ない。

「もし、私がここに居るのも貴様の計画通りだとしたら誉めてやろう。その腹黒さは私の情人の上に行く。……が、それは違うな」

「緑麗様……」

敖坤は、驚愕の瞳をかるうじて抑えている。

「貴様は、私がここに居るのを知らなかった。なら、『五行行使者』抜きで、どうやって『五行砲』を撃つつもりだったんだ？」

その自信に満ちた沙龍の声が、今、この場を支配している。

奏欽はそれに気付かず、ただ、沙龍の言葉を反芻した。

「そうよ、結局、敖坤は沙龍さんを見つけられていなかったのに……、どうやって……」

「東海龍王は、最初から『五行砲』を撃つつもりなんか、これっぽっちもなかった。ただのパフォーマンスさ」

「……えっ!？」

奏欽は驚き、敖坤は目を伏せた。

「北海龍王を始末したいために追従する振りをして、そして、北海龍王が用意した筋書きを一部借りて、帝都に混乱を招き、秦帝すら欺いて——」

「……」

「そして、その実、ただ一人、宿敵とも言える——」

「緑麗様！」

沙龍の言葉を、敖坤は立ち上がってまで止めた。

手にしたグラスも、床に放り投げられ、割れた。

「それ以上は言わないで下さい。貴女の身が危うくなる」

「……」

「大した御方だ。貴女の洞察力といい、直感といい、ちっとも変わっていない。

なぜです……?」

「生憎と、私に緑麗の記憶はないが、どうしても消えない『景色』というのがこの魂魄には刻まれているのでね」

「その『景色』の中に、『彼』ははっきり写っている、と？」

沙龍は首を横に振った。

「いや、はっきりとは見えない。ただ、緑麗にとってのその宿敵が東海龍王にとっての宿敵だった……、と今はっきり分かった」

奏欽は二人の会話に混乱しながらも、以前、西海龍王が深夜の三者会談で言っていた話を思い出した。

敖閏は『あの人』と言っていた。

それが、今、沙龍が言った『緑麗の宿敵』と同一人物かもしれない、と思ったのである。

「そして、『そいつ』はおそらく私の敵にもなる」

「無謀ですよ、それは……」

「フン、玉帝ですら敵とした私に、その言葉は意味がないな」

敖坤は再びソファーに沈み込んで、顔を半分、手で覆った。

「そうならないように……、『彼』が貴女に再び注意を向けてしまわないように……、そうなってしまえば、全てがまた、あの悲劇の繰り返しだから、なんとかこの平穩を保ちたかったのに……、貴女ときたら、それを台無しにしてしまわれ
ましたね……」

「どういう……」

奏欽が聞こうとした時、飛龍が奏欽の袖を引っ張って、首を横に振った。

敖坤がまともに行動できたのは、ここまでだっただろう。

全ての糸が切れ、傍らの龍王剣を驚掴んだ敖坤は、飛龍と沙龍が動く間もなく、奏欽にそれを突きつけた。

「もはや、これが最後の道！ 緑麗様、貴女には五行砲を撃って頂きますよ。欽姫の無残な死体を見たくなければ、私の言うことを聞いて下さい」

敖坤の瞳は既に尋常ではない光の中にある。

「たった一人の宿敵を葬るために、大勢を巻き添えにすることが、貴様の龍王としての選択か！」

沙龍は怒鳴った。

「そうです。欽姫は私の心を知りながら、結局、止めて下さらなかった。でも貴女はどうです？ 緑麗様。私を止められますか？」

「止めて欲しいのならそう言え。全力で止めてやる！ だが、その前に欽チャンを離せ！ こんなことをする最低野郎が東海龍王だと!？」

龍王剣の刃をつきつけられた奏欽は、強い瞳で敖坤を睨んでいる。隙あらば反撃してやる、という姿勢だ。それに、隣では飛龍も身構えている。一瞬さえあれば、形勢は逆転できるはずだ。

「最低でもなんでも構いませんよ。私の願いは貴女の平穏ですから」

その言葉が矛盾していることに、気付いていないのは本人だけである。

「この美しい顔に、傷を付けるのは忍びませぬね。まだ手足の方がいい——」
敖坤は、青色に光る龍王剣の先を、奏欽の二の腕あたりにずらした。

『木行』の氣を加えることにより、更に攻撃力を増すこの剣は、既に最高値の状態にあるようだ。

奏欽の薄紅色の着物の袖の部分が切っ先にわずかに触れると、繊維が焦げるような音がした。いや、溶けるといった方がいいかもしれない。

「こんなことをしても……っ」

奏欽は初めて恐怖を感じた。

心優しかった従兄弟は、もうどこにも居ない。

「そう。なんにもなりません。ただ、僕の自己満足ですよ、欽姫」

「緑麗」

飛龍が短く呼び掛けたが、それは「どうしよう」という意味だ。

こんな場面においては、飛龍の力技などなんにもならない。

「敖開、君も欽姫が好きだろう？ 女の子にはどこまでも優しいのは血筋なんだ

ね」

「その名で俺を呼ぶな……。なぜだ、敖坤。俺はずっと、お前が必死になにかをしようとしているのを感じていた。それは、クーデターでも敖吉殺しでもない。なのに、なぜだ——？」

「“なぜ”……？　そうだね。どうしても成しえないものの前では、誰もが無力なんだよ」

奏欽の片袖が、完全に溶けてなくなってしまった。

白く華奢な腕にまだ傷はないが、敖坤の虚ろな視線はその二の腕に止まっている。

沙龍は短く「待て」と言っつて、その注意をこちらに向けた。

「分かった。『五行砲』の起動スイッチはどこにある」

飛龍も奏欽も目を見張ったが、その沙龍の腹は読めなかった。

「その本棚の脇に、続き部屋への開閉スイッチがあります。まずはそれをどうぞ

——」

敖坤は普段と変わらぬ口調なのだが、やはりどこかタガが緩んでいるのを奏欽

は感じていた。

沙龍が、言われた通りのスイッチを押すと、本棚を背にした壁一面がゆつくりと横にずれていって、壁そのものがなくなつた。その先に、暗い機械室が見える。これこそが、本物の五行砲のコントロール・ルームなのだろう。

中央に台座のようなものがあつて、丁度、鍵穴のような、大きな縦長の穴が開いている。ここに龍王剣を刺すのだろう、ということはずぐに分かつた。

沙龍は、ぐるりと、その二十畳はあるコントロール・ルームを見渡し、敖坤に振り返つた。

「その剣が必要なんだろ？ それを貸してもらわないと起動ができないが？」
さすがに異常なテンションの敖坤も、この命綱を渡してしまえば終わりだと気が付いたららしい。

しかし、敖坤は右手に持った龍王剣をそのままにして、左手で懐からハンドガンを取り出すと、それを奏欽に向けた。

そして、ガラン、という鈍い音を立てて、龍王剣が沙龍の足元に落とされる。

敖坤の手から離れたその剣は、発光していた青色がただの鈍い青に戻る。

(……)

沙龍は舌打ちしたい気分だった。自分の身長以上あるような、その大きな龍王剣を拾い上げる。

敖坤のあの様子では、奏欽の命よりも『五行砲の発射』の方が大事なのだろう。迷っていれば、威嚇の一発や二発、すぐに引き金を引きそうさ。

「重い剣だな」

そう言いながらも、片手で龍王剣を持ち上げた。

「剣が重いのは、命の奪い合いの道具としては当然だと言うが、この剣にはそれ以外の重さがある」

「……」

「それがなんなのか、分からん輩にとっては、やはりただの人殺しの道具だろうがな」

時間稼ぎなのか、そんなことを言う沙龍の挙動を、敖坤は注意深く気配だけで追っていた。視線は、ずっと奏欽に向けているのだ。

「ここに刺せばいいんだな？」

「ええ、お願いします」

と、敖坤が視線をわずかに台座に向けた時だった。

「……………」

奏欽が頭一つ分姿勢を低くして、帯の中から取り出した懐剣の鞘で、敖坤の咽喉——やや、下にずれたが——を打った。抜いている暇はなかったのだ。

が、そこを打てば一瞬、呼吸は止まり、打撃の強さによっては致命傷となる。「グッ……………」

しかし、奏欽はやはり無意識に手加減をしてしまった。

この不意打ちは、一瞬だけ、敖坤の挙動を遅らせるだけの効果しかなかった。飛龍は金磚きんせんを撃とうとしたが、視界に奏欽が入ったために躊躇ちゅうちゆしてしまった。が、次の瞬間、ドアが勢いよく開き、乾いた銃声が立て続けにした。

沙龍はその若者は知らない。

ごく普通の龍族の若者で、これといった特徴もない。

とても屈強な兵士には見えないし、どちらかというところ、役所で事務仕事をしているタイプである。

その若者が、敖坤に向けて立て続けに発砲したのだ。

「欽姫を、離せ——っ！」

おそらく全ての弾を使い切るまで撃つただろう。あのサイズのオートマチックなら、大体、七発から九発程度である。

しかし、その弾丸は一発目しか当たらなかった。

「瑠伊!? 駄目……ッ！」

奏欽が叫んだのは、この後どうなるのかほぼ分かったからだ。

よろめく敖坤。だが——。

瑠伊が撃つた弾は敖坤の腹部を抉っていたが、それくらいで即死はできない。

遅れて引き金を引いた敖坤のほうが、瑠伊に致命傷を与えた。

「——っ！」

瑠伊が崩れ落ちるように倒れた。

言葉にならない叫び声を上げた奏欽の目の前で、飛龍が敖坤の手を掴んで銃をはたき落とし、さらに床に伏せさせるようにして、後ろ手にねじ上げた。

沙龍は台座の前に居たので、この時点でやっと飛龍に並んだ。

「溜伊！ 溜伊！ 死んじや駄目——っ！」

奏欽は這うようにして、倒れた溜伊の所まで行く。

こんな時に被弾した体を揺さぶってはいけないのに、それすらも忘れ、溜伊の体にすがった。

「ごめん、なさい……、欽姫……、最後まで、お役に立てなくて——」

そんな掠れた言葉が、沙龍にも聞こえた。

腹から血を流し、後ろ手に飛龍に拘束されている敖坤をチラッと見てから、沙龍は首にかけてあった真珠を外した。龍の姿をしていた時、奏欽に渡された、耳飾の真珠である。

沙龍は、その真珠を若者の手に握らせた。

この若者が、奏欽の言っていた人物だと分かったからだ。

「これ……は？」

溜伊が手の中のものを見ようとしているので、それを目の位置に持っていったら、やると、彼の瞳から涙が流れた。

「ハハ……、懐かしいなあ……、これ、僕が子供の頃、欽姫にあげた……」

「喋っっちゃ駄目！ 今、止血するから！」

奏欽はそう言いながら髪飾りを全て解いて、縛るものを探したが、もうこの若者が助からないであろうことは誰の目にも明らかだった。

「こんな安物……、ずっと持っていてくれたんですか……」

「そうよ、だって、これは溜伊が、働いて貯めたお金を全部使って、買ってきてくれたものだったじゃない！」

「……もつといいものを、あげたかったのに……もつと、大きな真珠だったら、きつと、欽姫に似合うのに……」

「大ききなんて、どうだって……！ もう、喋らないで！」

「ごめん、……いつも、怒らせてばかりで……、ホントに、ごめん……。……」

「……溜伊！」

その体が動かなくなってしまうことが分かると、奏欽は数秒間、力が抜けたように座り込んでいた。

「……」

そして、顔を上げ、さきほど、飛龍がはたき落とした敖坤の銃を、怒りに染

まった瞳で拾おうとした。

「欽チャン……！」

それを体ごと掴んで阻止したのは沙龍である。

「離してよ、沙龍さん！ 瑠伊の仇も取らせてもらえないの!？」

そう言われて、沙龍は少々後ろめたさを感じた。

たとえば、これが九玄だったら、沙龍も止めなかつただろう。

しかし、奏欽は、戦場に身を置く人ではないのだ。となれば、やはりこの場面では止めなければなるまい。

「離してよ——っ！」

「欽チャン、貴女が手を下さずとも、東海龍王はもう死んでる……」

「……っ？」

飛龍が、うずくまるようにして体を折った敖坤の手を離した。

ドサリ、と床に音を立て、また一人の龍王が死んだ。

奏欽の涙に濡れた瞳には、もうなにも映らない。

なにかの糸が切れたのは、奏欽も同じだったかもしれない。

「やべー……、全世界の敵になるのは、私かもしれん……」

アラームのようなたまたましいサイレンが鳴り響いた時、沙龍は、そういえば、自分は龍王剣を台座にブツ刺してからここに来たんだった、と思い出した。

陽輝と公務員、そして九玄が同じタイミングでこの部屋に現れたが、部屋の内
部はかなり異様な風景だった。

二つの死体と、安心して座り込んでいる奏欽、そして、溜息ついて天井を仰いでいる沙龍、バックグラウンドは嫌な予感しかしないこのサイレン——である。

飛龍だけは冷静だったが、なにも動かないのは、どうしていいか分からないだけかもしれない。

「なにがあった!? いや、どうした、沙龍、奏欽殿!？」

九玄がズカズカと入ってきて、沙龍の両肩を掴んだが、沙龍は苦い顔をしているだけである。

「奏……!?」

陽輝が片膝ついて、同じように奏欽の肩に触れようとしたが、奏欽は物凄い剣幕でそれを振り払った。

「触らないで！」

「……!?」

こんなにも切羽詰った、壊れそうな奏欽は初めてだった。

そもそも、奏欽は今、普通の状態ではないのだ。にわか立ち上がって台座の前まで歩いていくと、奏欽は突き刺さったままの龍王剣をそのまま深々と最奥まで差し込んだ。それをガチツと九十度左回転させる。

すると、サイレンのような音は止まったが、代わりに、暗かった辺りがパツと明るくなった。壁一面のモニターが点いたのだ。

そして、様々な凶形や文字、数字などが、各モニターにせり上がってきて、重たい機械音が断続的に鳴り響き始めた。

「やべー、ネーサーン、陽輝ー、ゴメーン」

まだあっちの世界に行ってるような沙龍はぶつぶつ呟いているが、

「すぐ説明しろ。簡単に説明しろ。なにがあつて、どういう状況なんだ!？」

九玄がビタツと両頬を左右から挟むように叩くと、我に返って頭を振った。

「東海龍王が欽チャンの幼馴染みを撃つて、相撃ちになったんだ。んで、もしかしたら、五行砲が起動しちゃったかもしんなくて、欽チャンはちよつとイッちやつてる」

「なるほど、よく分かった」

「分かるのか、それで」

陽輝はそう言ったが、自分もその説明でほとんどの状況を理解した。

だから、忙しそうにキーを叩いて作業をしている奏欽が、なにをしようとしているのかも、奏欽の性格を考えればなんとなく分かる。

「……」

「……」

「……」

沙龍と九玄と陽輝は、同時に奏欽を見た。そして、三人で顔を見合わせた。

その三人に、奏欽が短く告げる。

「ここは自爆させます。逃げるなら今のうちにどうぞ」

「ジ、自爆？」

沙龍の反芻にも、奏欽は説明をしようとしなない。

しかし、陽輝は分かっただらしい。

「天界軍に制圧された後では、処理ができねえってことか……」

敖坤の死も、クーデターの本旨も、水晶宮と共に永遠に葬ろうという、奏欽の覚悟、いや、自棄なのかもしれない。

「じゃ、急いで逃げなきゃ？」

沙龍は、別に水晶宮がなくなるのが、どうでもいいようだ。

しかし、そう言ったところで、誰も動こうとしない。

「……」（もしかして、欽ちゃん——）

「……」（ありうる、っーか、そのつもりだ）

という、沙龍と陽輝の『視線会話』を、九玄はいち早く察した。

虚ろな目で、早く仕事終わんねえーかな、と思ってるのは公務員だけである。

「説得シロ」

九玄は、陽輝を見て、親指で奏欽を指す。

「……九玄姐さん、俺はここ数日、撃たれたり殴られたり、文字通り踏んだり蹴ったりでな——」

「イイカラ、早く説得しろ」

九玄の言葉には、有無を言わせぬ迫力があつた。

陽輝も、九玄の背後に恐ろしげな般若面がチラついているので、それを無視することはできない。

「どうせ、また一発喰らうんだぜえ？ ヤレヤレ……」

陽輝は色々なスイッチを跳ね上げながら『自爆準備』をする奏欽に近付いた。

「なあ、それは放っておいて、さっさとここを出ようぜ？」

「私に構わないで！ 貴方達はさっさと脱出して言ってるでしょ！」

「じゃ、終わるの待ってるから、一緒に行こうぜ」

「二度も言わせないで！」

「なあ、奏——」

陽輝は、モニターに張り付いていた奏欽の二の腕を掴んでこちらを向かせる。

「お前がそこまでする必要はないだろ？」

「自爆スイッチは龍王剣でしか作動しないのよ。これをするのは龍王の最後の勤めです！」

それを聞いて、もしかして、と沙龍は思った。

奏欽は最初からそのつもりで『龍王剣』を探していたのではないか。

五行砲のスイッチというよりも、自爆装置のスイッチとして――。

「早く脱出してよ！ 瑠伊の死を無駄にしないで！」

憤る奏欽に対して、陽輝はわざとゆっくり腕を組んでみせた。

「瑠伊？ ……ああ、あの男か。やっと思ひ出した。お前の周りをウロチヨロシていたニーチャンか」

奏欽は、陽輝をキッと睨んだ。

「瑠伊は最後まで私の味方だったのよ。ただ一人、私の……。だから、その死を無駄にしないでよ！」

「そりゃ、お門違いってmondaze、奏。あのニーチャンは別に俺達を助けるために死んだんじゃない。お前を生かすために命を懸けたんだろ。だったら、お前が

「ここで水晶宮と一緒に心中するのは矛盾してる」

「……」

「まあ、それでも、ずっと傍に居ながら好きな女をモノにできなかつた男も、最期は、その女に忘れられない死に様を見せ付けられたなら、よかつたんじゃないか？」

ビシッ

と、奏欽の平手が陽輝を打つ。その目は怒りの涙で濡れている。

陽輝は平手覚悟で言ったのだが、それを見ていた三人、いや四人は、

「……」（駄目だこりや……。陽輝、説得任務、向いてないな……）

「……」（なんて女心の分からん説得の仕方だ。朴念仁め）

「……」（これじゃ完全に超過勤務だよな？ 請求額、一桁上げてみるか……）

「……」（……）

そうこうしているうちに奏欽が陽輝を押しつけて、中央の龍王剣に手をかけると、それを更に左回りに九十度回転させた。

「私の邪魔をしないで！ もうたくさんなのよ！ 無意味な争いも！ 誰かの血

が流れるのも！ 名前だけの龍王も！
奏欽の叫びは、全てを拒絶していた。」

奏欽の回した龍王剣により自爆装置が入って、カウント・ダウンが始まってしまった。部屋中の機器が明滅を始める。

「陽輝大将……オノレハ……」

九玄に睨まれて、陽輝はバツが悪そうに視線を外した。

「貴方ともあろう人が、なぜ今回に限ってそう及び腰なんだ！」

「うーん……」

「女を乗りこなすのは得意じゃなかったのか!？」

「まあ、自棄で結婚した元夫の言うことなんか、聞いちゃくれねえだろうな。フツー」

「アホかーッ！ そんなんで、結婚する女が居るかっ！」

その二人のやりとりを黙って聞いていたのか、それとも、なにか考えごとをしていたのか、それまで目を閉じて腕組をしていた沙龍が腕を解き、目を開けた。

そして、

「公務員、お前、左の命中率ってどれくらいなんだ？」

急にそんなことを言い出す。

「ああ？　一応俺もプロなんで、九十九はマークしてる」

「チツ……、気が利かねーな。嘘でも百とか言っておけよ。……まあ、いい。とりあえず、頼む」

なにをすればいいんだ？　という公務員の表情には、沙龍はニヤツと笑っただけだ。

沙龍は陽輝にも同じ顔をして見せてから、

「陽輝、私がなににしても驚かないでくれ」

と、日本語で言った。

「あ？　ああ、分かった……、分かったが！　沙龍！　鉄拳だけはヤメロツ！」

ズンズンと奏欽に歩み寄っていく沙龍はその言葉を受け入れ、握っていた拳を開いた。

パシイーン！

奏欽の頬を打った力は、沙龍にしてみれば、蚊を潰すくらいにまで抑えたつもりだ。

「……目、覚めたか」

「こんなことをしなくとも、目は最初から覚めてます！」

奏欽は少々驚いているようだったが、さすがに育ちのせいか、やり返すようなことはしない。

「どうか。開いている目は、時として、なにも映さないよ」

沙龍は、微笑んでいるのだ。

それが、誰の目にも、ひどく不可解である。

「……ッ？」

「なあ、欽チャン、今度、一緒に呑まないか？」

「私はお酒は呑みません」

「じゃ、麻雀でも」

「博打もやりません！」

「……うーん、人生の半分は損してるな」

「どこかのゴロツキと同じことを言わないで下さい！ 私を説得しようとしても無駄ですから」

「……じゃあ、温泉旅行とかは？」

「……」

「欽チャン、龍王が辛いならやめちまえ」

「な——ッ？」

意表をつく言葉だった。

「過去になにがあつて、どういう経緯で龍王になったのかは知らんが、おそろく、それが欽チャンのターニング・ポイントだ。そして、今、しかめっ面をしている欽チャンは、全然龍王であることを楽しんでない。飛龍の親父さんを見てみる。あつちはあんなに楽しんでるのに」

「……」

「別に、そんなご大層な地位なんか貴女には必要ないじゃないか。むしろ、枷にしかなくてないだろう」

「勝手なこと言わないで……！ なにも知らないくせに……！」

「ああ、なにも知らないね。でも、だからこそ、分かることがひとつだけある」
そう言つて公務員の所までやつて来ると、勝手にその懐に手をつ突っ込んで
「ちよつと貸してね」とだけ言つた。

沙龍が抜いたのは、左側のホルスターの——つまり、公務員の右手用の——デザート・イーグルである。

「欽ちゃんの憂いは、結局、コイツが元凶だつてことだ」
そして、笑みを浮かべたまま、そのデザート・イーグルを陽輝に向けたのだ。

九玄も飛龍も、黙つてことの成り行きを見ていた。誰も言葉を発しない。コン
トロール・ルームには、重たい機械音と、断続的な電子音だけが響いていた。
沙龍は、左手のみでデザート・イーグルを構えている。それに対して、公務員
が言つた。

「九龍、ソレは本来両手撃ちだ」

「お前だつて、片手で撃つてるだろ」

「俺の握力があって初めて片手で撃てるんだ」

「……幾つ？」

「七十だ」

「昔の数字だが、私は百二十あるはずだ」

「……シツレイシマシタ」

続けて下さい、と言わんばかりに、公務員は口を嚙む。

沙龍の視線はずっと、奏欽ではなく、獲物である陽輝のほうに向いている。

「それは弾が入ってません。私にもそれくらい分かります」

奏欽の声は微かに震えていた。冷静になろうと、自分を律しているのがよく分かる言い方だった。

沙龍は特に動じずに、公務員のほうに右手を向ける。それでも、視線は陽輝から外さなかった。

「公務員、マガジン（※弾倉のこと）寄越せ」

公務員は言われた通りにそれを投げ、沙龍は見もせずを受け取ると、慣れた手つきで装填した。さらに、スライドバーを引く。

これで、いつでも発砲できるようにしたのは、奏欽にも分かった。

「な、なぜ……？ その人は貴女の戦友でしょう……？」

「それは前世の話だ。今の私は甲斐馨。緑麗とは関係ない」

「嘘よ！ なら、なぜ貴女は九雷元帥を選んだの!？」

「よく言われるが、私が一目惚れしただけなんで、緑麗は関係ない。そもそも、緑麗が本当に愛していたのは別の男だ」

「……!？」

奏欽はその辺りの事情を知らないのです、これにはまんまと騙された。

陽輝が「嘘つけ……」という目をしたので、沙龍は「黙ってる」とたしなめた。

「欽チャン、貴女はこの男に人生狂わされたんだ。貴女の苦しみを断ち切るためには、こんな男、さっさと殺した方がよかったものを、慈悲をかけたせいで、なりたくもない龍王になり、したくもない仕事をする羽目になった——」

沙龍が言っているのは半分以上推測であり、ハツタリなのだが、陽輝は「それも間違っていない」と思っていた。

「だったら、今からでも遅くはない。生きてる限り、物事には遅すぎるってことはない」

「……………」

奏欽は、いつだったか陽輝に同じことを言われたのを思い出した。

その昔の記憶と、この数時間の激しい出来事のせいで、もう自棄を通り越して、悄然としてしまった。

「どうして…………、『あなた達』は同じこと言うのよ…………、どうして…………」

「陽輝さえ死ねば、欽チャンはこの呪縛からは逃れられる。龍王でいる必要もないし、水晶宮と一緒に心中する必要もない。楽になれるぞ？」

沙龍が悪魔の囁きを紡ぎつつ、笑みを浮かべている。

九玄が、周囲には分からぬように溜息をついた。やれやれ、という意味だろう。

が、隣の公務員には聞こえてしまったらしい。

「相変わらず、外道なボスだな…………。極道っぷりに磨きがかかってやがる…………」
呟く公務員に、九玄が応えた。

「将神つてのはああいうもんさ」

奏欽が、虚ろな瞳で見つめる『悪魔』は、着々と準備をしていた。

「悪いな、陽輝。そういうわけだから死んでくれ。……本望だろ？」

「……ああ、だが、苦しみたくないんで、即死で頼む」

「私を信じろ」

「信じてますとも——」

沙龍は一瞬だけ笑みを消して、公務員を見た。公務員が頷く。

「じゃあな」

と、沙龍が言った時、奏欽には沙龍が本気なのだ分かった。

そして、そのトリガーに掛かった指は躊躇なく引かれた。

なんなの？

この狂気と悲しみの馬鹿馬鹿しい連鎖は、一体なんなの？

私は、なんのために南海龍王になって、あの忌まわしい過去を封印しなければならなかったの？

こんな悲しみを、これ以上、広げないためじゃない。

なのに、なぜよ。

なぜ、あの優しかった敖坤が狂って、瑠伊が死ななくてはならなかったの？
大体、この人達はなによ。

勝手に龍族の安息の地にাগりこんで、私の邪魔ばかりして！
もう、忘れたいのに。

なのに、忘れられない男を、どうして、貴女が、そんな勝手な理屈で殺さなきゃいけないのよ!?

ふざけないで——！

「もう、やめて——ッ！」

奏欽が動いた時は実はコンマ数秒遅かったのだが、沙龍はフーツと安堵の溜息をついていた。それは、奏欽が動いてくれて良かった——、という意味である。最初から、トリガーは引くつもりだったし、それについては、心配してなかった。

しかし、奏欽が動くか動かないかは、ほとんど賭けだった。

もし、動かないのなら、陽輝は助かるにしても、この芝居が全て無駄になるし、奏欽は救えない。

「殺さないで！ お願い——！」

陽輝に抱きつくようにして、その身体を庇った奏欽は、そのまま倒れ込んだ。パニックになっている奏欽は、今、沙龍が撃った弾がどこにいったのかなど、分からない。

「奏……、安心しろ。空砲だ」

奏欽の身体を抱きとめたまま、陽輝が言った。

「……ッ!？」

改めて見ると、陽輝は被弾していない。

さらに、自分も撃たれた感触はない。

もしかして、騙されたのか？ という結論に奏欽が到達する前に、沙龍がケロツと言った。

「空砲じゃないよ？」

「……!？」

陽輝が、途端に眉を吊り上げた。

「もしかして。ホントに撃ったのか？」

「だって、見てたでしょ？ 弾倉突っ込んだじゃん」

「いや、俺あ、なんか細工してあんのかと——」

と、陽輝が公務員を見ると、首を横にフルフルと振ってる。

「じゃあ……」

「いや、私、昔から銃の腕、そんなによくはないんで、多分、当たらないだろうと……」

「多分」？

「う、うん」

陽輝の言い方に、沙龍は一步後ずさった。

「多分」!? “多分”だと!? こぬやろー……。もし当たってたらドースンだよ！ 全くいつもいつも考えナシに力技ばかり——」

立ち上がって、今にも沙龍の胸倉掴んで喚き散らそうという陽輝を我に返らせたのは、奏欽の白い指だった。

その指先が、宥めるように頬を撫でるので、宥めなきやいけないのはどっちだ、と陽輝は微笑んだ。

「これで分かっただろう、欽チャン」

沙龍はデザート・イーグルを公務員に放り投げながら言った。

奏欽は、涙に濡れた瞳のまま、沙龍を見上げた。その顔は、まだ年端のゆかぬ少女のように心許ない。

「別に、本当に龍王を辞めろってわけでも、陽輝とやり直せってわけでもないんだけど……。欽チャンが死んだら、陽輝はまず間違いなく泣くぞ」

「……」

「だから、私の戦友を泣かせないでくれ」

それだけ言って、沙龍は二人から少し離れた。

そして、まるで一仕事終わったとばかりに、大理石のテーブルに座ってそこにあった来客用の煙草を失敬し、くわえている。

「まー、なんて偉そうなガキなこと。いや、ホント」

公務員がホルスターにデザート・イーグルを納めながら零すのだが、九玄はこいつも屈折野郎かと思わずにいられない。

「その偉そうなガキに喜んで仕えてんのはどいつだ」

九玄が苦笑しながら言うと、公務員は、

「フン……」

と、鼻を鳴らし、ライターが見つからずにあちこち捜している沙龍に自分のジッポーを放ってやった。

「奏？ 大丈夫か？」

呆けたままの奏欽は、やっと自分がどういう格好をしているのか気付いたようだが、急に離れるのも気が引けたのか、そのまま陽輝の膝の上に座っていた。

「大、丈夫……、だと思っ」

「そうか、じゃあ、そのまま聞いてくれ」

「……？」

「前と同じことは言わないぜ。同じ結果になっちまうからな」

「うん……？」

「あー、沙龍はああ言ったが……、出来れば、龍王なんてやめて、俺の所に戻っ
てきな」

「……!？」

奏欽は口を開けてまで驚いた。

よくもまあ、こんなセリフが言えたものだ——、という驚愕もあるが、それだ

けではない。

「お前にや、向いてないんだよ。そんなの、誰だって分かるのに、お前だけが変な義務感に駆られてる」

「うん。それは……、自覚してる」

「お前が二胡を弾かなくなったのは、俺のせいだけじゃない。親父さんの、いや、南海龍王家の歴史を全部背負おうとしたからだろ？ だけど、それは誰のためなんだ？ 誰のためでもないだろ？ 別にバレた所でいいじゃねえか」

「……」

奏欽は、陽輝がそこまで知っていることにも驚いていた。

陽輝の地位で知り得たのかもしれない。しかし、こればかりは、陽輝が言うほど簡単なことではない。

天界の創世からの、罪深い問題なのだ。少なくとも奏欽にとっては。

「俺だけじゃ頼りないってんなら、俺には九雷と沙龍が居る。あいつらは正真正銘無敵だぜ？ なにがあるうと大丈夫だ」

「そう、ね……。そうかもしれない」

奏欽が、ほのかに微笑んだ。

それでも、まだその頬は涙に濡れている。

陽輝は、その奏欽の頬を軽く撫でた。まるでさっきのお返しというように。

「だから……、龍王なんてやめちまえよ」

「あの時……、それを言ってくれば良かったのに……」

かつて、奏欽が龍王位を継ぐことになった時、陽輝は言った。

『好きにしろよ、お前の自由だ——』

だが、おそらく奏欽は止めて欲しかったのだ。

「ああ、後悔してる。つまんねえ意地張っちゃまったもんだとな。だがな、奏。物事には遅すぎるってことはないんだぜ？ それに、焦ることもない。とりあえず、今は水晶宮の自爆装置を解除してくれ。その後で、ゆっくり考えようぜ？」

「うん——」

奏欽は、自分で涙を拭ってから、頷いた。

公務員が大体のあたりをつけて探していた、デザート・イーグルの弾丸二発は、一発は部屋の隅の柱に、もう一発は天井に突き刺さっていた。

柱のほうの弾を引っこ抜いて陽輝に見せると、あ的一幕がどう行われたのか、陽輝はやっと理解したようだ。

沙龍が撃つ直前かそれと同時に、公務員がその初弾の軌道を変えたのである。それはかなりの技量を要する。

銃口ギリギリの辺りを狙わないと沙龍の手元は狂うし、怖いボスに怪我をさせようもんなら、腕の一本くらい簡単に切り落とされてしまうだろう。なにせ、それには前科がある。

しかし、実際には、沙龍は公務員の腕を信じていたし、公務員もしくじることにはなかった。

「そーゆうことかよ……。自信はあったんだろうな……。？」

「一応あったと言えばあったが――、俺の左手はせいぜい九十九パーセントの命中率だ。右になるともっと落ちるが……。残りの一パーセントをどうするつもりだったのか、俺は九龍に聞いてみたいね」

「なにも考えてないだけだろ」

九玄が簡単に言った。

「まあ、そうなんだろうな……」

陽輝は大きく息を吐き出しながら、自爆解除の作業をしている沙龍と奏欽を見た。

「しかしなー、九玄姐さん……。俺は、沙龍に殺意すら覚えるぜ。俺が千年かけて出来なかったことを、アイツはたった五分でやりやがった」

その陽輝のぼやきを聞きながら、九玄は笑っていた。

「あー、ハラヘツタ……」

奏欽に言われた通りにキーボードを打つ沙龍が、なにも考えずに眩いた。

もう数時間、飲み食いしていない。

それに、急に元の姿に戻ったせいか、体のあちこちが妙に痛いし、熱い風呂にでもすぐ入りたい気分だ。

「沙龍さん、水晶宮のわりと近くに、私の別荘があるんです。これが終わった
ら、そこでご馳走しますね。なんでも作りますよ」

「やった！ あの春巻きは絶品だったよ！ ……なんか私が欽ちゃんを嫁に貰い
たくなってきた」

「フフ……」

奏欽が最後のキーを押すと、晴れて自爆装置が解除された。

機械の明滅が止まり、モニターが静かになって、元の静寂が帰ってきた。

「うへへ、なに作ってもらおっかなー……」

沙龍が浮かれ気分で体の向きを変えた時、

ズン……！！

という、かなり大きな揺れが水晶宮を襲った。

震度五はあろうかという縦揺れだが、これは自然のものではないな、と沙龍に
は分かった。

「わっ……!!?」

体のバランスを崩し、咄嗟に傍にあったレバーを掴む。

が、揺れはもう一度あって、沙龍は次に尻餅をついてしまった。

「突入部隊が素粒子爆弾でも使ってるのか？」

「あ、そうだ。沙龍さん、そのレバーは絶対触らない、で——、五行砲の……
発射装置だか……ら……。——！」

奏欽が、白い顔を更に真っ白にし、美しい顔がよじれるほどに、声にならない
悲鳴を上げた。

奏欽が、口をパクパクさせ、指差しながら、涙目になっている。

「え？ なに？ 夕方のドラマの録画予約忘れてた？」

「……沙龍」

駆けつけた九玄の方が、事態を先に理解する。

今にも失神しそうな奏欽と、「これはやばい」という顔の九玄を交互に見て、

沙龍はゴクリ、と唾を飲み込んだ。

「それとも、アイロンかけっぱなしだった、とか？」

「……沙龍」

「い、いや、だといいな、と思っただけ……」

「言いたくないんだが……、なにか非常にマズイ事態になったんじゃないのか……」

「……？」

「……」

「……」

「……」

沙龍は、今、自分がおろしてしまつたレバーを見る。手はまだそこを掴んだまままだ。

レバーの真上には赤いラベルの注意書きがデカデカと書いてある。

「ご、五行砲の発射装置……？」

奏欽が、声にならないまま、何度も頷いた。

水晶宮からやや西南に位置するその観測所に、西海龍王敖閏と木佐小次郎の姿があつた。

珍しいコンビだが、他称インテリの木佐は、敖閏の即席アシスタントとして充分に仕事をこなしていた。

敖閏がここに来たのは、最悪『五行砲』が発射されてしまつた時、その軌道を変更できるような機能がここにはあるかもしれない、という期待を抱いてのこと

である。

もしなかったとしても、なにか有益情報があればいい、と思っていた。

「過去、五行砲が使われたことはあるんですか？」

木佐が手を休めずに聞いた。

「あるね。僕が知る限り、一度だけ試射をしたはずだよ。その際、データを取るのに設置されたのがここさ」

幾つかのコンピューターは後付けだろうが、壁にはめ込まれた機器は、太古の時代に設置されたものらしい。

木佐は、それを幾つか起動し、分からないながらも、色んな情報を読み取っていた。

「それは、いつ頃のことですか？」

「うーん？ 五千年位前かなあ？」

「それを御覧になりました？」

「直接見てはいないけど、夜空が一瞬、明るくなつたのは覚えてるよ」

「破壊力はどれくらいなんでしょう？」

「さあねえ、フル装填だと、大陸一個分くらい吹っ飛んじやうかも」

「……」

どうしてそういう厄介なものを作るんだ、と木佐は思うのだが、それが人の業というものかもしれぬ。

三つの機械を同時に操りながら、木佐は気になるファイルを見つけて、それをメイン・モニターに映した。

「西海龍王殿、僕が思うに、このエネルギー供給ラインを断てば、五行砲は機能しないんじゃないですか？」

モニターに表示されたのは、設計図らしきものの一部である。

それが、実際に今ある『五行砲』の設計図かどうかも分からなかったが、方角や大きさはほぼ合っている。

「まあ、理屈ではそうなるんだけど、なにせ、古い機械だからねえ。……それより、欽チャンがずっと連絡して来ないんだけど、大丈夫かな」

敖坤や敖吉に怪しまれないためにも、特に敖閏との連絡は絶つという方針で、単独水晶宮に向かった奏欽だったが、『八方結界』が解除され、水晶宮の包囲部

隊が突入してから随分経つ。

そろそろ連絡を寄越してきてもいいのだが――、と敖閏は、目の前の比較的新しいパソコンで、水晶宮への直通ラインを開いた。

「……あれ？」

敖閏がアクセスすると、水晶宮で最初に繋がる場所、つまり東海龍王の部屋の音声が入ってきたが、どうも様子がおかしい。

「どうしました？」

「なんか――。マズイことになっちゃってるみたい？」

敖閏は、ワーキヤー言ってるスピーカーを指差した。

ついさつき、自爆装置を解除して静かになったばかりの部屋に、今度はそれ以上の喧騒が溢れた。

部屋中の機械が勝手に動き始め、重い物が上下するような音が断続的に聞こえてきた。

佐の声が聞こえた。

「……馨？　馨がそこに居るのか？」

「き——キサさんツ!?」

沙龍の、お花畑を歩いているような顔が、瞬時にキリッといつもの三白眼に戻った。

雑音交じりだったが、木佐の声は沙龍を冷静にさせるのに充分役立ったようだ。

『いいか、よく聞け。五行砲は起動しただけでは発射されない。発射装置にさえ触らなければ——』

「だからー……、その『発射装置』を押しちゃったんだってばー……」

『なんだってえええ——!?』

キサの大声が耳をつんざく。

「だから、その発射装置を押しちゃった場合の、発射までの時間とか、なにをすれば止まるか、とか、そこら辺を教えてクダサイ……って話なのヨ……」

『分かった。数秒で調べる。その間に、僕が理解していることを伝えておく。発

射を止めるには、今、充填されつつある、そのエネルギーの流れを止めればいいだけだと思う』

「と、止められるんだね？」

『止めるんだよ、馨。大丈夫、君ならできる』

意外にも木佐は冷静だ。そして、沙龍の使い方というものをよく心得ている。

「うん、分かった」

『——緑麗チャン、聞こえる？』

今度は、敖閏の声だった。

『水晶宮自体の自爆装置は、カウント・ダウンなしでは作動しない。これの最短設定時間は確か三十分だったから、それを待ってたら間に合わない。原始的な方法で止めるしかないんだよね』

「原始的な方法？」

『僕達が調べたところ、五行砲は、二ヶ所で充填したエネルギーを、中央に集めてから発射されるらしい。水晶宮の南北に塔があるでしょう？』

「南北……。ああ、あれか」

沙龍は、窓から見える二つの尖塔はそのためだったのか、と納得した。

『フル充填が終われば、そのエネルギーは塔から斜め四十五度に打上げられ、中央砲塔の上部にある反射鏡に射出される。その照射を受けたらもう終りだ。後は、向いている砲門の方角にそのエネルギーが撃ち出されるだけ。だから、タイムリミットは反射鏡に到達するまでだと思って』

「分かりました」

『考えられる方法は、第一に、エネルギー供給ラインを断つこと。第二に、その充填を止めること。最期の手段は……、そうだな、自爆装置を使わず、水晶宮ごと爆破する……くらいかな』

「分かりました。やります——」

沙龍は一度深呼吸してから、メンバーを振り返った。

「陽輝は、欽チャン連れて脱出してくれ。道々、元帥と連絡取って、今このエリアに居る全員を水晶宮の東側、つまり、海側に避難させるようにして欲しい。飛龍と公務員は、同じくそれを手伝って海側に脱出。娘々は北の塔に行ってくれ。

私が南に行く」

「分かった。要するに、あの塔にある充填装置を破壊すればいいんだな？」

九玄が、手にしていた大刀を背負った。

「待てよ、九龍。その人選の根拠は？」

公務員が聞いた。

「陽輝は怪我人の上に体力残ってない。欽チャンは破壊任務に向いてない。飛龍は破壊任務に向きすぎだが、オーバーキルになりそうでちよつと……ね。そして、五行に無関係な公務員には、五行エネルギーの充填装置は破壊できないかもしれない。物理攻撃だけじゃ無理だった場合に困るんでね。そして、娘々と私は無傷だ」

一気に喋りながら、龍王剣を台座から無理矢理引き抜いた沙龍は、それを武器として使うつもりのようにだった。

「以上、質問は？」

「……いや、ない」

「俺は役立たず扱いか。泣けるぜ」

陽輝はそう言いながらも、ヘッドセットに手を当てて、無線の周波数を変え

た。

「じゃ、作戦開始！ フル充填されたら、お終いだ」

「タイムリミットはッ？」

九玄が走りながら聞いた。

「聞きたい？」

沙龍がニンマリと笑うので、九玄は嫌な予感がした。

「……あまり聞きたくないが、聞いておこう」

「10分だ」

(ム……?)

沙龍は、南側の尖塔へ走っていたが、ひどく体がダルく感じた。まだ本調子じゃないのかもしれない、と思ったが、今はそれを気にしてはいられない。

鉄製か銅製か、いかにも堅牢な扉が見えてきた。

最初から『鍵を探して開ける』などという考えはない。そのためにこんな大層な剣を奪ってきたのだ。

「おらよ！」

その扉を龍王剣で切り裂くと、塔の中に飛び込んだ。

使い心地は聖魔剣よりも格段に悪いというしかないが、物理力だけならこちらの方が上かもしれない、と思った。

しかし、その一瞬、目が霞んで、沙龍は慌てた。

「霞み目!? ナンテ40の世話になる歳じゃないんだけどな……、ナーンテ!……」

ゴホ」

一人漫才をやっている沙龍のヘッドホンに、九玄からの連絡が入る。

『沙龍！　こちら九玄。北塔に到着した！』

「私も到着した。もうメンドイから、全部破壊の方向で！」

『なんでお前はそう、デストラクティブの方向にしか考えが向かんだ！　もつと物事はコンストラクティブに——！』

九玄のそんな声に重なって、なにかがガラガラと崩れる音や、手榴弾でも炸裂したような効果音が聞こえてくる。とても『建設的な音』には聞こえない。

「やってることは同じじゃないんかね……」

沙龍の飛び込んだ塔の内部は、吹き抜けのようになっていた。つまり、一階しかない建造物なのだ。

そして、この一階のエリアに置いてある大型冷蔵庫のような機械や、壁をぐるっと囲んだパネルが全て『充填装置』ということになる。

「はいはい、ちやっちゃと終わらすよー！」

沙龍は邪道だと思ったが、『龍王剣』に自分の『土行』を最大稼動で込めて、

そこら辺にあるものを全て斬りまくった。

「姐さん、そっちは!？」

『ああ、全て破壊した。……が、止まらないぞ!？』

陽輝は無線を天界軍の通常周波数に合わせると、途端に大将の顔になった。

今は軍服も着てないし、腕章もつけてない。

かろうじて身分を証明するものがあるとしたら、二十四時間首にかけてあるドッグ・タグぐらいのものだが、例えこれがなくても、この顔は一軍の将に相応しい、と奏欽は思った。

「全員引き上げさせろ！ そう、例外なく全員だ！」

通話相手は九雷なので、例え上官だとしても、遠慮は微塵もない。

最初、オペレーターが出たのだが、名乗りもせず「九雷を出せ！」と言うので、もしそのオペレーターの傍に九雷が居なかったら、繋いでもらえなかっただろう。

『相変わらず、状況説明の足りん男だな。俺でなきや、理解できないところだぞ』

「おめーだから省いてんだよ！ 最悪ドカンだ。楽しいだろ!？」

陽輝も九雷も、その『最悪』はないと信じているようだった。

恐らく、奏欽も、である。

しかし公務員だけは、かなり悲観的に五行砲の砲門を見上げていた。

（あのでけーのが、辺り一帯の全ての五行エネルギー吸い取ってんだろ？ もう無理じゃねーか、あの様子じゃ）

二つの南北の尖塔からは既に、虹色の禍々しいエネルギーが煙のような形を持って立ち昇り、今にも一条の束になって、集束しそうである。

公務員は嘆息した。

（まあ、俺は死んでるからいいんだけど）

「ぎえええええええ！ 充填装置は破壊したのに、あのウネウネが勝手に集まって

るーっ！」

沙龍は尖塔から出てそれを確認すると、もうお手上げだとばかりに叫んだ。

「キサさーん！ どーすればいいの!？」

『落ち着け、馨！ 人の造ったものに、完璧なモノなんて、ない！ 必ず方法はある——』

ヘッドホンから聞こえる木佐の声もかなり切迫しているが、今、一番落ち着いた状態で、その具体的な方法を探しているのも木佐だった。

「沙龍、あと三分だ！」

九玄の急かす声が聞こえるが、沙龍にはもう返答する余裕はない。

『まさか……、反射鏡ってこれか？』

木佐の独り言のような声に、敖閏が応える。

『直径二センチもないね。これが五行砲の『収束点』になるのか……。ああ、

『鏡石』か、なるほど』

収束点とは、五行の氣の流れの始発になり、終点となるもので、その一点に、全ての力が凝縮されるものだ。

「き、キサさん！ あと二分切った！」

『馨！ 充填が止められないなら、反射鏡を破壊しろ。そうすれば、五行エネルギーは収束点を失って空に逃げる！』

解決策が見出せたことに木佐は弾んだ声を出した。

沙龍も、萎れていた体に力が戻ってきたのを感じる。

「は、反射鏡ね!? どれ——」

しかし、木佐の次の言葉に、沙龍はまた打ちひしがれたのである。

『一円玉ほどしかない。簡単だろ!?!』

そりや簡単だろう。もし、目の前にあるのなら。

亀裂を入れるくらいなら、ナイフさえあれば、幼稚園児だってできる。

しかし、あの巨大砲塔のはるか上部、砲門の根元にある（はずの）一円玉大の鏡の周りには、誰も居ないのだ。

「ウソ……」

沙龍は、もう絶望した。

『もうひとつ、注文をつける！ 反射鏡だけを物理力で破壊してくれ。もし他の

制御盤や砲門を傷つけてしまうと、反射鏡に集まった五行エネルギーが拡散して一番最悪な結果になる！』

「ウソ……」

シユタツと座り込んでしまった沙龍のヘッドホンに、九玄の声が響いた。

『沙龍、あと一分半だ！』

沙龍はギョツと大地を掴んで、もうこれしかない、と腹を括った。

これで駄目なら、もう冥府で魂魄状態となって、皆に謝るしかない。

「陽輝、公務員！ 最後の見せ場をやる！ そっから、砲門の根元にある鏡を狙撃できるか？ いや、できるか、じゃない、してくれ！ あと一分しかない！」

最初に応答したのは公務員の方だった。

ちようど、水晶宮の玄関口にあたる甕城おうじょう（※防御用の半円の建築物）近辺に居

たので、そこから見上げる砲門は比較的に見やすい位置にある。

が、当然、砲門までの距離はかなり遠い。

中央砲塔の高さは軽く見ても二百メートルはあるのだ。

「なんだって？ 鏡？ どれのことだ？」

公務員は、砲門を見上げた。

隣に居た陽輝も、奏欽も、同じく上空を見上げた。

「一円玉大だ。ソレを撃ち落してくれ！」

「う、嘘だろ……？」

公務員も絶望的に空を仰いだ。

「いや、飛龍でもいい。風火輪で——」

沙龍はそう言ったが、肝心の飛龍は三人とは別行動で、水晶宮の裏側で避難する人々を海側へ誘導している。

「沙龍さん、だめよ！ 敖開の居る場所からじゃ、間に合わない！」
奏欽が叫ぶ。

しかし、陽輝は一人、鼻を鳴らしていた。

「全く、人を役立たず扱いしておいて、最後はこれかよ……。どいてろ、若造」
呆然と立ち尽くす公務員を押しつけるようにして、陽輝は遥か上空を見上げ

た。

「ああ、鏡って、あれか」

「見えるのか……っ!？」

驚く公務員は、陽輝がアーマライトではなく、S & W M 29を抜いて構えたので、更に驚いていた。

「……!?!? できるのか!?! 『ソイツ』で!」

ハンドガンの有効射程距離は玄人が使ったとしても、せいぜい五十メートルである。しかも的は、一円玉大。あの中心を撃ち抜くのは、ほとんど不可能だろう。

「まあ、あんたの持つてるオートマジや無理だろうな」

「……」

公務員は絶句していた。

確かに、アーマライトは射程は十分だとしても、破壊力が大きすぎるので、反射鏡のみを撃ち抜くことはできない。旧式リボルバーを使うしかないのだ。

「距離目算にして二百メートル、だな。まあ、見てろ。本当の銃の使い方っての

を、教えてやるよ。……おい、沙龍！聞こえてるか!？」

「聞こえてるゝ、あと三十秒しかないゝ」

「落ち着け。俺は絶対外さない。カウント・ダウンしてくれ」

「分かった。あと二十」

「よし。……終わったら、後で、呑みに行こうぜ」

「奢りね。……十五」

「なに言ってるんだ。お前、こんな年寄りコキ使つといて。少しは労れよ」

「じゃあ、ツケで。……八、七——」

「……」

「五、四——」

「……頼んだぜ、『レディ』」

公務員が息を呑んだ。

鳥が巢立つようにフツと軽く放たれたその弾丸が、反射鏡を打ち抜いたところは見えなかった。

ただ、うねりを持ってまるで生き物のように動いていた五行エネルギーが、そ

れぞれ南北の塔の上で一条の光の束となり、それぞれが、反射鏡を指して斜めに射出されたところまでははつきりと見えた。

しかし、その二条の光は、砲門の根元でクロスし、留まることなく、それぞれの進行方向へと消えていったのだ。

奏欽はその場にへナへナと座り込み、公務員は口を開けたままだった。が、なにも言わずにポカンとしているのは癪だったのだろう。

「オッサン、目は衰えてないようだな」

「俺の腕に感動したんなら、素直にそう言えよ」

これだから近頃の若者は……、と言いたげな陽輝だったが、腰を抜かしすぎてもう立てそうにない奏欽の前にしゃがんだ時は、もうにこにこしていた。

「惚れ直したか？」

「そういう自信過剰なところは、お友達にそっくりね」

それは、歌声のように聞こえた。

31 戦場の恋人達

「ムグ……」

城壁の傍にへたり込んでいた沙龍は、重かった体が急に軽くなったのを感じた。

今さっきまで自分がつけていたはずのヘッドセットが、巨大になって自分の目の前に転がっている。

「ウギユ……？」（なんで？）

「……沙龍？ どうした？ 大丈夫か？」

その巨大レシーバー部分からは、九玄の声が聞こえてくる。

「……。……。……うきゅ」

「なるほど……、いいタイミングでまたそのサイズになったわけだな。待ってろ。今、迎えをよこしてやる」

その数分後に現れた飛龍が、ミニサイズの黄龍をガシツと掴んで、運んでくれ

た。

既に水晶宮前には知った顔が勢ぞろいして、沙龍は、今の自分から見れば小山ほどもある黒焰虎の姿を見つけると、かなりうるさく騒いだ。

飛龍は舌打ちしながらも、沙龍がなにを言いたいのか分かったので、黒焰虎の傍に立っていた九雷の腕に、沙龍の小さな体を下ろしてやった。

「キュー！ ウキュー、クウ？」

九雷は、この小さな龍がニコニコしながら——そして多少赤面しながら——両手を広げて自分に抱きついてくるのを、優しく背中を撫でて応えていた。

当然、『それ』が誰だか分かるのだろう。

「ホー、やっぱ愛の力だな……」

陽輝がそんなことを言っていたが、それまで陽輝の肩の怪我を治療していた奏欽は、沙龍が降りてきた途端、その治療を放棄して、九雷の方へ近付いた。

「……なんだよ、俺より沙龍かよ」

と、ぼやく陽輝には構わず、奏欽は髪飾りを解こうとしたが、既に、髪にはなにもつけていないのを思い出した。

ならば、と、奏欽は帯の上に飾りで結んでいた細い帯紐を解いて、それを九雷の腕の中でさんざん甘えている龍に巻いてやった。

「こうしないと、沙龍さん、喋れないみたいなの」

「……」

九雷はなにも言わなかったが、その表情は柔らかい。

「プハ！ ……ありがと、欽チャン！」

「いえ、どういたしまして」

「大変だったな、沙龍」

「うん、生きて会えてヨカッタよ、もうホント、色々大変でね。一年分くらいの体力と精神力使った感じ？ あ、あとさ、公務員に仕事頼んだの、元帥？別に余計なことするとか言うんじゃないで、アイツかなりボツタクリ野郎なんだよね。後ですんごい金額請求されるから、こういう時は前払いにしないと、つて言っておかなきゃって思ったただけなんだけど。あ、それとサー……」

「……」

のべつまくなしに喋る沙龍に、九雷は少し戸惑って、笑いを堪えているような

奏欽を見た。

「なんか、ちよつと人格も変わっちゃうみたい」

と、奏欽は説明した。

少し離れた場所でその様子を見ていた赤帝君は、難しい顔をしていた。

(もしかして、玉帝陛下が言っていたのは、これのことか……?)

その赤帝君の様子に気付いた九玄は、世間話を兼ねて、少し探ってみた。

「なにか、思うところがあたりか？」

「いや……、皆が無事でよかったと思っていたところです」

「東海龍王は……」

九玄が言うと、赤帝君は首を振った。

「敖坤様は……、そうですね。無念だったかもしれません」

「緑麗を忘れられなかったのか」

「だと思います。昔から、一途な方でしたから」

「恋情と狂気は、時として紙一重だな……」

九玄の静かな横顔に、赤帝君は憂いの瞳で頷いた。

撤去作業の始まった仮設本営では、スタッフ達が緊張感の解けた様子で、それでも、それなり忙しく立ち回っていた。

結局、クーデターの主犯は敖吉一人とされ、その敖吉も死亡のまま送検ということになった。

敖坤については今のところ保留で、秦帝に報告をしてから、判断を仰ぐしかない。

しばらく水晶宮は軍の管理下に置かれ、東海龍王の私設軍も解散ということになるだろう。

「北はお取り潰しだろうな。東は分からねえが」

陽輝が、まだ撤去されてないパイプ椅子に座って、一服しながら言った。

「呉謙は自決しやがった。生き恥晒したくなかったんだろうが、これで本当の黒幕が誰だったかも分からなくなっちゃった。敖吉じゃなかったことは確かだろうが、敖坤だったとも思えねえ」

「真相は墓の下、か……。いや、公務員がなにか知ってるかもしれない」

九雷が、あのヒョロリとした男を遠くに見ながら言った。九玄や飛龍と一緒にコーヒーを飲んで一休みしているようだ。

「あのニーチャンが？」

「ああ。沙龍の舎弟みたいになっているが、あれは元々、冥府の作業員だ」

「ふーん……。ということは、泰山府君も絡んでるのか」

「……」

九雷ははつきりとは答えなかったが、そのかわりに、大きめの地図を机に広げた。それは天仙界全域を示すものだ。

「おい、九雷——。そろそろ俺に教えてもいいんじゃないかねえのか？ 実地で散々被害蒙った駄賃代わりだ」

九雷は、ある一点を見つめている。

そして、かなり間を置いて言った。

「……いいのか？」

「なにがだよ？」

「これを聞くと、後戻りはできんぞ」

九雷の表情は見えないが、口元が笑っている。

「おいおい、舐められたもんだな。今更どんな大物の名前が出てこようが、俺あ驚かないぜ？」

「そうか。俺は正直、逃げ出したいがな」

面白そうに言う九雷は、既に、答えを示しているのだ。

陽輝が立ち上がって、その地図を覗き込み、九雷の視線の先を探したが、妙なことに、九雷の視線は地図上にはない。

「一体、誰なんだよ——」

急かすように言うと、九雷は、一度、帝都以東のある場所——水晶宮——を指し、そこからゆっくり直線を引っ張るようにして、西に動かす。途中の帝都を無視して、九雷は最終的に地図からはかなりはみ出した遙か西の辺りを指で二度突いた。

「……」

さすがに、陽輝は絶句した。

『そこ』は、おそらく、人界で言うところの、欧州に当たる。

「だから、白帝は太上道君を探しに行ったのさ」

太上道君——。天界で四名居る『最高神』の一人である。

ずっと行方不明になっているのだが、どうも、このことと関係があるらしい。

「俺の推測だが、敖坤は最初から『五行砲』を撃つつもりはなかった。しかし、砲門はなんとしても『ここ』に向けたかった。帝都ではなく、な。最期の抵抗として、ここに砲門を向けて、反逆の意を示したかった——。それは、おそらく、敖坤の意地でもあったんだろう」

九雷が最初に水晶宮を指したのは、五行砲の射線を示すためである。

「そして、敖吉を自ら葬り、自分がその罪を被って玉砕するつもりだった——つてことか。しかし、いくらなんでも『ここ』は無謀だぜ」

陽輝は呆れている。

「そうだな。しかし、無謀だと思っただけなのが確実に一人居るぞ」

九雷の視線の先には、さきほど、水晶宮に到着したらしい木佐に、さんざんオモチャにされている小さな黄色い龍が居る。

しかし、九雷は言い直した。

「いや、二人だな」

つまり、自分と沙龍は、ということだ。

それが分かったので、陽輝は負けじと言い返した。

「……いや、三人にしてくれ」

「フ……」

「なあ、九雷。だとしたら、後戻りもなにも、俺達のターニング・ポイントはとつくに過ぎてるんじゃないかねえのか？」

「そうだな……」

彼らにとって、それは緑麗と出逢った遥か昔まで遡るかもしれない。

あれからしばらく、俺は南海龍王家の別荘で静養していた。

別に肩の傷なんてどうってことなかったが、奏がやかましく滞在を（沙龍に、だ）すすめるので、俺がぶつぶつ文句を言っていたら、

「じゃあ、貴方も静養ついでに来れば？」

という冷たい一言があつたのだ。

今後、九雷の『お邪魔虫リスト』には、奏欽も上位に加わりそうな勢いだ。全く、沙龍の吸引力にも困ったもんだぜ。

と言っても、沙龍自身は、あのちっこい体で俺達の邪魔をしないように気を遣っていたようだ。

そして、三日くらい経って、

「そろそろ水雲宮に帰る」

と言って、出て行った。

出て行く前に、ちよつと気になることを言っていたが。

「あのサー、私がずっと元帥の傍に居るのって、いいのかな？」

「は？ なんの話だ？」

「まあ、話すと長くなるんで省略するけど」

「いや、省略するなよ。重要などころだろ、それ」

「うん、まあ、それで、つまりだね、私は本来、あと五、六十年くらいしか生きられない人間なわけよ。でも、その寿命をかなり伸ばせる反則技があるらしいのよ。それを使ってもいいのかなって話」

「いいも悪いも、なんで悪いのか、俺にはよく分からねえ」

「だって、それは、私の我俣なわけじゃん？ 元帥だって、本当は——」

と、言いかけてそれつきり黙ってしまった沙龍は、本当にぬいぐるみのように見えた。ヒラヒラのレースの付いたピンクのリボンを巻いて、どこかのデパートにでも並んでそうだ。

これは、絶対、奏の趣味だろうが、沙龍には迷惑なんじゃないのか？

「なあ……」

と、言いかけて、俺もやめた。

俺は改めて、緑麗の背負ってしまった業の深さってやつを考えていた。

沙龍はもしかしたら、その一番の犠牲者なのかもしれない。なによりも痛々しいのは、沙龍自身が、『それ』を『我俣』だと思っていることだ。

「元帥には今の、内緒ね」

「ああ……。ところで、お前、いつ元に戻るんだ？」

「うーん、それを私に聞かれてもねえ……。ドクターは二、三日くらいじゃないかって言ってたけど」

「まあ、次に会う時は、元の姿に戻ってることを祈ってるワ」

「あいよ……」

そうして、颯爽と、とはとても言えない、ポテポテとした足取りで小さな龍は出て行った。

その後姿が笑いと哀愁を誘うので、なんとなくずっと見守っていたが、俺はこの時、ひどく虚しかった。

まあ、己の無力を嘆いていた——とでも言えば格好もつくか。

「……沙龍さん、行っちゃったの？」

今まで遠慮してたのか、奏が、ティー・セットを両手に現れた。

「ああ、難儀なヤツだぜ。ホントに……」

なんとなく、俺はしんみりした気分だったので、そのままそれを口にした。
が、奏は意外なことを言った。

「でも、沙龍さんは幸せだと思う」

「……なんでだよ？」

「だって、あの人は愛でるべきものを全て持っている」

「……」

それは、いつだったか、俺がテキストに言ったセリフだが、結構当たってんじゃないか、とも思う。

酒と、友と、女――。

美味しい酒があれば、大抵笑って過ごせるし、頼もしい友が居れば、俺が大事なことを忘れても、思い出させてくれる。

そして、イイ女が居れば、もう充分過ぎるくらいだ。

沙龍にとっては、あの仏頂面が「イイ男」になるんだろう。

「な、なに？　なんかついてる？」

「いや……」

俺は、相変わらずヘンな顔してる奏が、流れるような手つきで紅茶を淹れるのをしばらく眺めていた。

その後、二週間くらいで帝都に帰り、副官から逃げ回る日常へと戻ったが、変わったことと言えば、俺の寢床がなくなってたんで、急遽引越し先を探す羽目になったということくらいか。

軍宿舎はあのクーデターの日に火事で丸焼けしてしまった。狭い我が家だったが、長年使ってただけあって、さすがに愛着もあったのによ。

俺にはどうも、引越し先のあのピンクのベッドが性に合わねえんだよな。

まあ、そんなのはシーツを取り替えりやいいだけの話なんだが。

そうそう、そういえば、昨日、なんか見たことのあるような若造が西方軍の執

務室を訪ねてきて、『クボタ』を置いてったのはちよつと嬉しかった。沙龍に『名月』と『TAIZAN』をキッチリ持ってかれた後だったからな。

「あーあ、すっかり焼け野原だな……」

その日、元寢床の焼け跡の近所を通りがかったのは単なる偶然だったが、沙龍の声がした時は、報告書がどうか、やかましく言ってくる副官から逃げ回っている最中だったもんで、思わず隠れちゃった。

しかし、沙龍は俺を呼んだわけではなかった。

「欽チャーン！」

沙龍は、敖開の背から転げ落ちるようにして、奏を呼び止めていた。なんだ、ちやんと元に戻ってるじゃないか。

しかし、なんで奏のヤツは、宮中イベントもねえのに出仕してんだ？

二人の会話は聞こえないが、沙龍が手にした数枚の紙片を奏に見せて、なにやら説得してるようなのは分かる。温泉旅行にでも誘ってんのか？

奏は強引な沙龍に多少困惑してるが、あの表情はまんざらでもねえって感じだな。

「大将！ 探しましたよ！」

祥倫のデカイ声が辺り一帯に響き渡る。

全く、気の利かねえ副官だぜ……。あの二人に見つかっちゃまったじゃねえか。

「……陽輝？」

俺に気付いた沙龍は胡乱な目を飛ばしやがる。

いや、だから、別に覗いてたワケじゃねえって！

しかし、キョトンとした奏が、その一瞬後に、化けやがった。

「」

思わず、後ろを振り返りたくなった。

『それは、俺の後ろに誰か居て、ソイツにしてるのか？ と。

だけど、やめた。

そんな花のような笑顔を向けられたら、勘違いしたままの方が幸せだ。

「陽輝大将、今日こそ、報告書上げてくださいますよ。司令部からせつ突かれてるんでね！」

「ああ、分かったって……。もう、なんでもやってやるよ……。」



E
N
D

あとがき

欽ちゃんは最初、「女性版九雷」というポジションで考えたキャラクターだったんですが、描いてるうちにだいぶ変わってきてしまいました。（九雷の屈折度が、育ちのいい奏欽には足りない）

とはいえ、やはり「九雷と奏欽」、「沙龍と陽輝」というのが同質、同系統ということになるわけで、そういう似たもの夫婦はあまり上手くないとか、私自身が似たものカップルは（描いてて）ツマンネーという思いがあるので、伴侶としては入れ替えてあります。

二〇一一年八月三日 小龍

【追記】shokoさんに描いてもらった欽ちゃんを表紙絵にしました。謝謝！

二〇二二年一月十日 小龍

